罪と罰（ツミトバツ）
地球（ほし）の継承者
SIN AND PUNISHMENT™

飯野文彦

電撃文庫

罪と罰 地球の継承者

飯野文彦

電撃文庫

¥620

ISBN4-8402-1746-7

C0193 ¥620E

発行◉メディアワークス

定価：本体620円
※消費税が別に加算されます

罪と罰
地球(ほし)の継承者
飯野文彦
電撃文庫0530

罪と罰　地球(ほし)の継承者

飯野文彦

電撃文庫

0530

DENGEKI BUNKO

飯野文彦

1961年6月16日山梨県生まれ。早稲田大学卒業。ワセダ・ミステリ・クラブOB。'84年『新作ゴジラ』で小説家デビュー。立川談志と菊地秀行を尊敬し、けろけろけろっぴと快獣ブースカとチビヨッシーを敬愛する。

【電撃文庫作品】

グランディアⅡ〈上〉
グランディアⅡ〈下〉
罪と罰 地球の継承者

イラスト:鈴木康士(トレジャー)

昭和49年12月10日生まれ。アーケード「レイディアントシルバーガン」の開発にデザイナーとして参加。NINTENDO64「罪と罰 地球の継承者」ではキャラクターメイキング全般とCGグラフィック作成を担当。

カバー/あかつきBP

罪と罰
地球の継承者

ルフィアン。その化け物どもが、人類への攻撃をはじめて二カ月あまり。日本、いや人類は、いまや未曾有の危機にさらされていた。本来、ヒトの〝食料〟として創造されたその化け物は、人間を狩りながら列島を南下。多くの人々と共に、主人公のサキも南へと逃げるが、途中、ルフィアンの襲撃に遭い重傷を負う。

自ら聖女を名乗る「救済グループ」のリーダー、アチの血を受け助けられたサキは、グループの一員に加わり、人類の敵ルフィアンと戦いながら、ヒトの罪と罰を知る……。

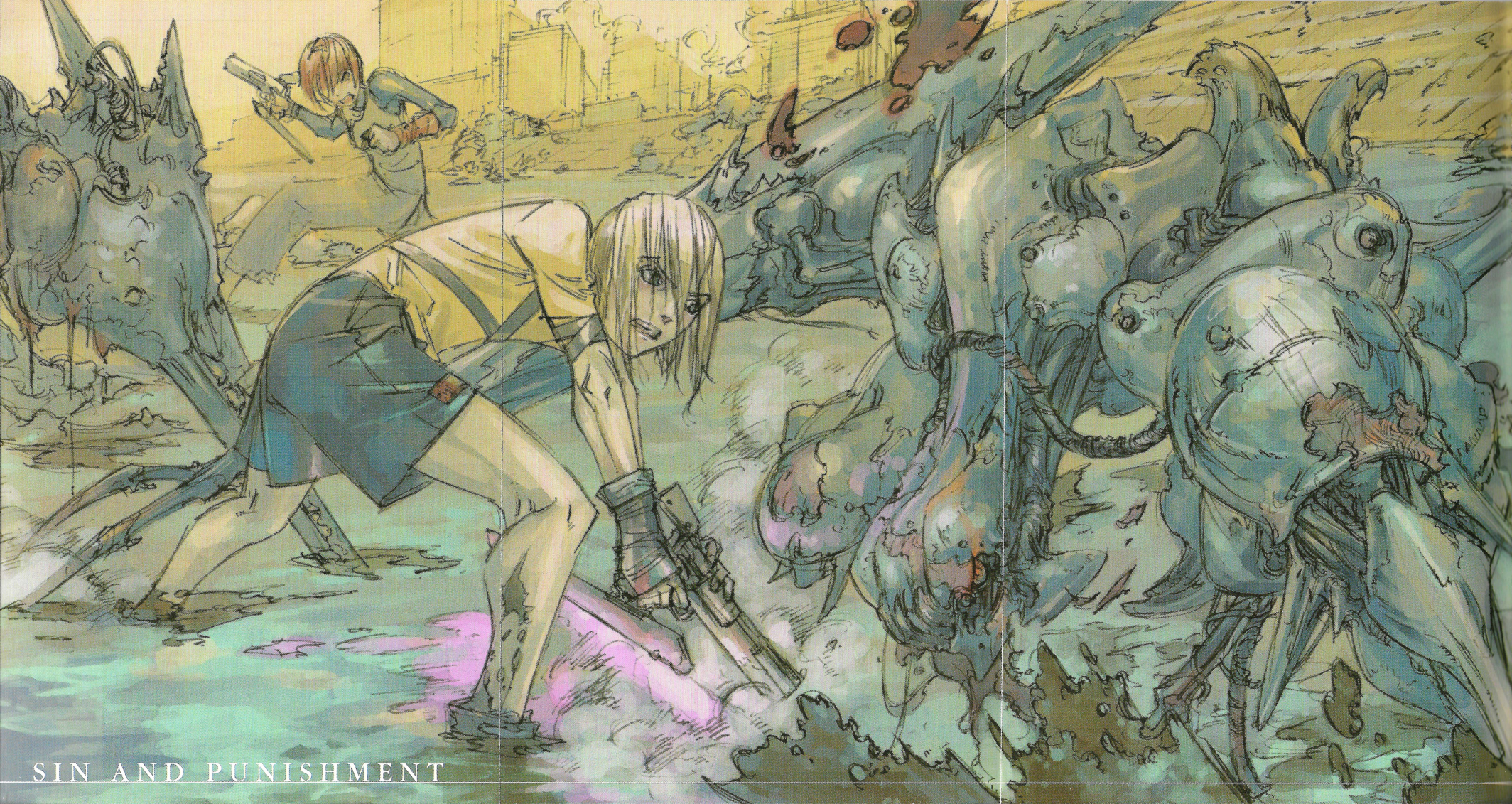
NINTENDO64の痛快アクションシューティングのプレストーリーを小説化!

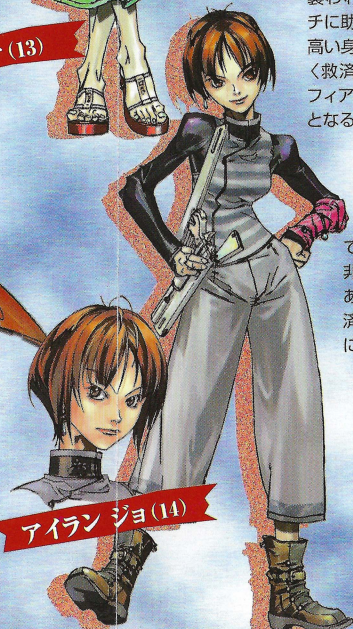
カバーイラスト/鈴木康士(トレジャー)
カバーデザイン/スペースMAO
カバーフォーマット/朝倉哲也(design CREST)

飯野文彦

イラスト
鈴木康士
（トレジャー）

ルフィアン侵攻図

ルフィアン侵攻ルート
（地上展開）
東北自動車道
常磐自動車道
東京
武装ボランティア 空母
2007.March
JAPAN-NorthEast

SIN AND PUNISHMENT

武装ボランティア
ブラッド(17)
〈武装ボランティア〉の司令官であり、超常的能力を持つ青年。
カチュア(15)
ブラッドの側近。戦術転化し得る念動力を持つ。他の側近との確執が絶えない。
ラダン
日本に派遣された〈武装ボランティア〉のリーダー。少女とも思える外見からは想像がつかないが、かつてはゲリラ組織のリーダーだった。
ケビン
日本へ派遣された、〈武装ボランティア〉のメンバーのひとり。かつて、何十人もの女性を手にかけ、アメリカ全土を恐怖に陥れた殺人鬼。
ルフィアン
人口飽和状態にある世界の食料危機を救うべく"創造"された、食用生態系より派生した攻撃体の名称。擬態能力や人工の有害毒素の浄化能力を備える上に、短期間の爆発的な産卵サイクルで繁殖し、人を狩る。
自ら「聖女」を名乗る〈救済グループ〉の先導者。彼女の授血行為は多くの怪我人を治癒し、ときには授血を起因として特殊能力を獲得する者も存在する。自己中心的かつ好戦的な性格や、預言と称する言動から、彼女に神格を見る者も少なくない。
アチ(13)
救済グループ
サキ アマミヤ(14)
日本人とアメリカ人のハーフ。母と避難していたところをルフィアンに襲われ重傷を負うが、アチに助けられる。その後、高い身体能力を発揮して、〈救済グループ〉内のルフィアン狩猟班リーダーとなる。
日本人と韓国人のハーフ。頭脳明晰で身体能力も高い才女。この状況下で非難の的となり、人間不信となる。とある事件がもとでサキと出会い、〈救済グループ〉に参加。打ち解けるうちにその能力を発揮する。
アイラン ジョ(14)
テツオ
両親をルフィアンに殺され、〈救済グループ〉に参加した少年。機械に詳しく、ガンソードに基本的な改造を施した。サキを慕っている。
ミチコ
池袋周辺のメンバーをまとめる、盲目の少女。混乱の最中にありながらも、アチの教えをよく守り、弱者救済にあたる。

罪と罰
ツミトバツ
地球の継承者™
SIN AND PUNISHMENT

C O N T E N T S

イラスト　鈴木康士（トレジャー）
デザイン　スペースMAO

第一章　出会い

二〇〇七年三月二十一日――。
部屋の外から、怒号が響いてきている。
土浦市の郊外にある自宅二階の自室で、アイランは部屋の隅にうずくまっていた。
（どうして、こんなことに）
ここ数日間、同じ疑問が、頭の中でこだましていた。
アイランのフルネームは、アイラン・ジョという。
生まれも育ちも日本であるが、日本人の父と韓国人の母との間に生まれた。
彼女は地元では有名な、私立の女子中学に通っている。
二カ月後には十五歳をむかえ、付属の女子高に通うことも決まっていた。
しかし今の彼女に、夢を馳せ、想い描いていた前途へと勇む姿はない。
「日本の高校受験」など、一年はやくスキップしたはずだ。
ひとつの成功をおさめたはずだ。
その自分が……今は……。

今は、後退を余儀なくされるみじめな敗北者なのではないだろうか。
世の中のすべてのことがまったく変わってしまった。
わずか二カ月あまりの間に――。
階下から一段と大きな怒鳴り声が響いてきた。
口汚い罵声や、ヒステリックな叫び声などさまざまだ。
アイランは両手で耳を押さえた。
それでも聞こえてしまう。
立ち上がって自分の部屋を出ると、廊下を挟んで正面にあるパソコンルームに入った。
パソコンや機械いじりが趣味という、女の子にしては一風変わった趣味を持っている。
友だちと話しているよりも、一人機械に向かっているほうが落ち着くのだ。
五台あるパソコンはどれも皆、アイランが自分で組み立てたものだった。
ほかにも部屋には、彼女が造った電動で動くロボットなどが所狭しと置いてある。
最も起動が速いノートパソコンに向かってスイッチを入れた。
ただ当てもなくネットサーフィンした。
しかし五分と経たないうちに、パソコンのスイッチを切った。
どこを見ても、殺伐とした記述しか見られない。
もっともそんなことはインターネットに接続する前から予想していた。

それでももしかして……と、わずかばかりの希望を持ってアクセスしたのだが、これ以上つづけていてもよけい落ち込むだけだとわかったからだ。

メールチェックはしなかった。

混乱が起きてから、メールの数は激増している。そのすべてが誹謗中傷の文面で埋め尽くされていた。

混乱が起き始めた頃は、友だちからのメールは、それまでと同じような文面だった。

ところが、友だちの激変ぶりは、信じられないほどだった。それまで仲がよかった者ほど、罵詈雑言が多くなった。

元々社交的だったわけではないのだが、教師に勧められて、中学二年の秋まで、体操部に所属していた。

アイランの運動神経のよさに、顧問の教師が惚れ込んだのだった。

本気で練習すれば、オリンピックも夢じゃないわ——何十回言われたかわからない。

しかし、アイランにその気がなかったため、教師も渋々あきらめた様子だった。

そんなことがあって体操部に居づらくなり、途中で退部した。

しかし部の仲間とは、わりかし仲がよく、やめた後も友だちづきあいをしていた。

何人かは心を許しあえると思っていた友だちもいた。

しかし、そんな彼女たちが、今ではアイランを責めつづけている。

電話やメール、そして家まで押し掛けてきた子もいる。

今も外にいる暴徒の中に、つい最近までアイランの友だちだった少女の姿もあるかも知れなかった。

(友だちなんていなかった。みんな、見せ掛けだったんだ)

ここ二カ月の間に、アイランははっきりと自覚した。

金持ちだから、とか、頭がいいうえ運動神経がいいのを鼻にかけているとか、露骨に誹謗中傷された。

仲がいいと思っていたその陰で、自分がどれほど、蔑視されていたかを知った。

今では、そんなものか、と冷めた気持ちで感覚を流している。

それでも彼女たちと対峙するのはつらかったし、メールを読むのも嫌だ。

アイランは、ここ一週間以上、ほとんど自宅から出ていなかった。

危険で、出られなかったと言うほうが正確だろう。

なぜ、アイランの家に暴徒が押し寄せ、また電話や電子メールで誹謗されなければならないか。

その原因のいったんは、食料の貿易商社を経営する彼女の父が、今回の出来事——ルフィアンの暴走に加担しているという根も葉もないうわさが原因だった。

ちょっと冷静に考えれば、そんなことがあり得ないのはすぐにわかる。

もしも父が加担していたならば、暴徒たちが押し寄せてくる前にアイランや母を連れて、すでに逃亡している。
救いのない混乱の苛立ちや不安をぶつけずにいられない人々が、因縁をつける標的として、食料貿易商で裕福なアイラン一家を、かっこうの標的としているだけの話なのだ。
ただここ一週間ほど、一時よりも家を囲む暴徒の数は減っていた。
アメリカからやって来た〈武装ボランティア〉と名乗る一団が、最新鋭の武器を手に治安維持に乗り出したからだった。
もし武装ボランティアが、ここ土浦にやって来なかったら。
来るのがあと数日遅れていたら。
アイラン一家は暴徒たちに家の中まで踏み込まれて、惨殺されていたに違いない。
それほど事態は緊迫していた。
だからといって、感謝する気持ちは沸いてこない。まだまだことが始まったばかりであるのを、アイランは感じていた。
北海道から南下しているルフィアンたちは、すぐ近くまで来ている。
昨日見たインターネットの情報では、すでに筑波学園都市はルフィアンによって、一日持たずに壊滅したという。
すぐ近くにルフィアンが来ている。

ここが襲われるのも時間の問題だ。
恐怖と不安に煽られて、暴徒たちは行くあてもなく、アイランの家にやって来ては暴言を投げつける。
暴言だけでなく、何をされるかわからない恐怖もあった。
すでにあちこちで火災が起こっていた。隣の家も数日前に何者かに放火され、今や見るかげもない。
そんな暇があったら、逃げればいいのに、それでいて逃げる決心がつかない愚かな連中たちだ、とアイランは思った。
皆、心のどこかで、この惨事が終わることを希望的な思いとして持っているために、自分の家を捨てて逃げる決心がつかないのだ。
そのくせ、家にじっとしていると不安に押しつぶされそうになり、何か邪悪な者に導かれるかのように、アイランの家までやって来る。
それだけの愚かな連中……。
パソコンルームのドアがノックされて、アイランを呼ぶ母の声がした。
「もう心配はないわ」
アイランが黙っていると扉が開き、母が部屋に入ってきた。
「どうして?」

アイランは振り向きもせず、ノートパソコンの電源の切れた画面を見つめたまま訊ねた。
「武装ボランティアの人と話がついたの。今日から一名、専属で我が家を警備してくれることになったから」
「お金で雇ったわけ？」
アイランの問いに、母の返事はなかった。
しばらく無言の後、話題を変えるように、母が言った。
「ソウルの姉さんとも、連絡がついたわ。いつでも歓迎してくれるって」
アイランは母に背を向けたまま、黙っていた。
母はアイランの肩にそっとふれただけで、それ以上何も言わずに部屋を出ていった。
「おまえら、帰れ帰れ。この家に何かしたら、治安維持妨害と見なし、容赦なく射殺する」
外から男の濁声と銃声が聞こえた。
それまで響いていた罵声が消えた。
力による鎮圧。金による暴動の押さえ込み。
いつも父がやる手だ。
口うるさくて、見栄っ張りの母が嫌いだ。
何でもお金で解決しようとする父が嫌いだ。
友だちもいらない。淋しくないかと言われれば、淋しくないと答える。

心の中にぽっかりと満たされない孤独を感じても、人には言わない。
誰にも本当の気もちなんて言えない。淋しいなんて言えない。
言ったとしても、誰にもわかってもらえないから。
パソコンに向かっていれば、孤独は癒される。すくなくとも忘れられる……。
外の騒ぎは収まった様子だった。
しかしアイランの心の中では、人々の罵詈雑言が依然として響きつづけている。

❖

二〇〇七年四月二十三日——。
足に砂袋が結わえつけられていて、歩くたびに砂がそそぎ込まれているみたいだと、チヅルは思った。
東京国際空港を目指して、ひたすら南下しているのだった。
振り返って息子のサキを見た。
肩をがっくりと垂れ、地面を見つめながら歩いてくる。何も考えず、ただ母である自分のあとをついてきている。
今年の春、十四歳になったばかりだ。
感受性の強い子だ。

いろいろ悩んだり、苦しんだりしているはずだ。

しかし母親であるチヅルには、不平一つ言わない。

それどころか、チヅルのことを気遣ってくれる。

「母さん、だいじょうぶ？」

顔を上げ、笑顔さえ浮かべた。本当は口をきくのもおっくうなくらい疲れているくせに。

「ええ、サキ、あなたは？」

「俺はぜんぜん、平気だよ」

「そう」

チヅルも笑みを浮かべ、ふたたび前を向いて歩く。

改めて、サキがたまらなく愛しかった。

混乱が起きて水戸のアパートを出てから、すでにどのくらい経っただろうか。

一週間にも思えるし、一ケ月くらい過ぎたようにも思える。

石岡から土浦へと出て、霞ケ浦を回り込むように、阿見、美浦と通過し、もうすぐ江戸崎に達する。

広い道路は避けてきた。

その間、野宿をしながら、ただひたすら南下してきた。

逃げ惑う車両の排気ガス、渋滞、どの人も先を急いで殺気立ち、一触即発の状態を幾度となく見てきたからだった。

若者が容赦なく老人たちを押しのけ、それだけでなく轢き逃げしていく光景に出くわしたこともある。

十数年前に暮らしていたニューヨークの街でも、これほど酷くはなかった。まさかここが日本だなんて、チヅルには未だに信じられない。

全部が夢ではないか。

ふと路肩に座り込んで眠りに落ち、目を覚ませば水戸のアパートでのサキとの生活がつづいているのでは……。

願望だけでなく、ほんとうにそんな風に思ってしまう。

足の裏の豆をいくつも潰し、体も目に見えて衰えたとわかる今になっても――。

今回の事態が起きるまでも、生活は決して楽ではなかった。

サキを連れてアメリカから帰ってきたとき、厳格な両親は激怒し、チヅルに勘当を言い渡した。

勘当なんて言葉が二十一世紀の今にも残っているなんて、と苦笑したものだが、両親――特に父が本気であるのは、わかっていた。

そもそも高校卒業と同時に、勝手にアメリカ留学を決めてしまった時点で、チヅルは父から絶縁を言い渡されていた。

それでも留学して半年ほど経ったときから、姉を通して母からは、幾ばくかの仕送りを受けていた。ときどき母の気をつかう手紙が届くこともあった。

しかし父からは、一向に〈梨のつぶて〉だった。

母や姉からは、一度帰国して、父に詫びろと何度も言われたものだ。けれどもチヅルには、帰国したくてもできない訳があった。

渡米してすぐ、知り合った同級生と深く愛し合い、サキを身籠もったのだ。悔いはなかった。それほど彼のことを愛していた。

大学を辞めて働く、と彼は言った。

チヅルは止めたが、彼は聞かなかった。

チヅルとサキのことを深く愛してくれていた。

サキと名づけたのも彼だ。

何か日本の書物で知った名前で、彼はいたく気に入っており、サキが生まれる前からそう決めていた。

男の子なんだから、もっと別の名前を、と言おうとしたけれど、彼がそれほど気に入っているのならと、チヅルは笑顔で合意した。

そのときチヅルは、彼と籍を入れ、アメリカに永住するつもりだった。

大学を辞めた彼は、友だちの先輩がやっていた小さな雑貨店に勤めるようになった。

ところが、勤め始めて一カ月と経たないうちに、悲報が届いた。

初めての給料で、チヅルとサキのためにプレゼントをしようと、仕事帰りに寄ったデパートの近くで、暴漢に襲われたのだ。

連絡を受けて病院に駆けつけたとき、彼は死を迎えつつあった。

涙でにじんだ眼でチヅルと、彼女の抱いていたサキを見つめ、一言も言葉を発しないまま息絶えた。

臓器まで達したナイフによる刺し傷からの出血多量による死だった。

彼の葬儀で、チヅルは彼の両親から、人殺し呼ばわりされた。

おまえさえいなければ、こんなことにはならなかったと、チヅルはいわれのない中傷や愚弄の言葉を豪雨のように浴びせられた。

誰も止めてはくれなかった。

むしろ、口にこそ出さなかったものの、大学時代の友人たちでさえチヅルに冷たい視線を投げかけた。

大学に通うこともできず、頼るべき者も失ったチヅルに残された道は帰国しかなかった。

そして身も心もぼろぼろになって帰国したチヅルを待っていたのは、勘当という仕打ちだったのだ。

子どもができたと話しても、気持ちを和らげるどころか、勝手な振る舞いだとよけい非難を

浴びせられてしまった。

幸い、すでに水戸市内に嫁いでいた姉が、アパートや当面の生活費を援助してくれたおかげで、何とか日本での再出発を切ることができた。

あれから十余年、チヅルは一人でサキを育ててきた。

サキがすべて――。

サキがいればどんな苦労も耐えられた。

チヅルは心に決めていた。

サキが高校を卒業したらいっしょに渡米する。

まずやることは、彼の墓参りだ。

彼に成長したサキの姿を見せたい。

彼の墓前で、いろんなことを報告したかった。

そして――今度こそアメリカに永住しよう。

サキと二人で、彼と知り合ったアメリカで暮らすのだ。

だが、それも単なる夢で終わってしまいそうだ。

ルフィアンのせいで――。

そもそもルフィアンとは、何者なんだ。

自分に問うまでもなく、チヅルも一通りの知識は持っている。

世界規模の爆発的な人口の増加によって飢餓状態に陥った人類の食料として、創造された新たなる生物――。

原始的昆虫類を基盤に改造されたその生命体は、蔓延する人工の有害毒素の浄化能力を備え、その上、短期間での爆発的な「産卵」サイクルで繁殖。

これによって、人類は未来永劫、飢餓から救われる、はずであった。

ところが、その食用生態系から〝ルフィアン〟と呼ばれる攻撃体が、突如として人間を襲い始めた。

食用生態系の発祥の地として、未来世界のシンボルとなるはずだった北海道は、瞬く間に蹂躙された。

警察や自衛隊の抵抗もまったく無意味だった。

それどころか、発生からわずか二カ月の間に、日本の警察及び自衛隊は壊滅状態に追い込まれてしまったのだ。

政府はアメリカはじめ諸外国や国連に援助を求めた。

ところが対応は、すべて冷たかった。

どの国も、人口増加によって他国を支援するどころではなかった。

二十世紀後半からエコノミックアニマルと呼ばれて世界の嫌われ者であった日本は、このときとばかり諸外国の本音を知らされる結果となった。

たしかにチヅル自身も、経済優先の日本の世界侵略は醜い行為だと思う。

危機状況に陥った日本を助ける手段を講じることもなく、したり顔でマスコミに持論を述べる学者がいかに多かったことか。

曰く――食用生態系自体は、十年で時限的に死滅するように〈設計〉されている。

曰く――即効性の高いキラーウイルスの開発もなされ、安全性を高めている。

だがこのウイルスは、今回の災難が起きてまもなく紛失したとされ、実在したのかさえ疑わしかった。

また、曰く――増えすぎた人類に対して、短期間での人口統制を実現させる〈益獣〉と言い放った者さえいた。

チヅルは彼らに会えたら言いたいことが山ほどあった。

こういった状況がつづき無法状態と化した日本を、ルフィアンの群れは我が物顔で蹂躙している真っ最中だった。

しかし、国連や諸外国に見捨てられた日本ではあったが、まったく助けの手が差し伸べられなかったわけではない。

三月の初め頃、武装ボランティアと名乗る一団が首都東京に上陸し、治安回復に当たっていた。

しかしチヅルがかろうじて報道を続ける数少ないマスコミを通して知り得た知識では、武装ボランティアなる組織が、いったい何であるのか皆目検討がつかない。

そもそも、その名称からしていかがわしさを漂わせている。

しかも、ルフィアンを撃退するだけでなく、自分たちの行動に障害となる人間さえも、無差別に殺害しているといううわさもあった。

いずれにせよ、自分の身は自分で守るしかない。

さらにサキを守らなければならない。自分の命より大切なサキを――。

サキの無事を保証してくれるなら、今のチヅルだったら、どんな者にもすがるだろう。

そう言えば――歩いてくる道すがら、一人の少女が逃げおくれた人々に救いの手を差し伸べているという話を耳にしたことがあった。

聖女と名乗る不思議な力を持つ少女らしい。

チヅルはその手の話を一切信じなかった。しかし今なら信じてもいい。その少女がサキを救ってくれるなら、聖女でなくたとえ悪魔だったとしても、すがりつきたい。

そんなことを思っていたとき、チヅルの唇に笑みが浮かんだ。

ずいぶんと弱気になっている自分を、自虐的に笑ったのだった。

「母さん、あれ」

突然サキに声をかけられて、チヅルはハッと顔を上げた。

◈

チヅルたちの眼前で、巨大なナメクジが、もごもごと体を蠢かせていた。
頭部に開いたマンホールの穴のような口では、人を飲み込んでいる最中だった。
「ルフィアン」
チヅルの口から、勝手に言葉が出ていた。
サキの体をしっかりと抱きしめ、動きを止めた。
それがルフィアンであるという証拠はない。
本来のルフィアンが、どんな形をしているか、定かではないからだ。
しかし、それがルフィアンに間違いないことも、チヅルは感覚的に感じ取っていた。
ルフィアンは擬態するという。
つまり定まった形などあってなきがごとしなのだ。
現実にインド象ほどもあるナメクジがいるわけがないし、たとえいたとしても人を丸飲みするわけがない。
その口がすっぽりと人体を飲み込んだとき、辺りにたたずんでいた人々の間に動揺が走った。
チヅル同様に、歩くことに疲れ果てて判断力の低下した人々は、人一人がそのナメクジの形態をした物体に飲み込まれるのを目の当たりにして、初めて事態を把握した様子だ。

民家が両脇に立ち並ぶ二車線の狭い道路には、ざっと見回しただけでも百人ほどの人々がいたが、騒ぎは瞬時に広がった。
ほとんどの者たちが映像や写真でこそ眼にしたことはあれ、実際にルフィアンと対峙するのは初めてのはずだ。
もちろんチヅルも例外ではない。
チヅルはサキを抱きしめ、後退した。
だがすぐにそちらからも悲鳴が上がる。
振り返ると、そこには背丈十メートルを超える蟹が両手の鋏で、人間をつまみ上げていた。
二匹だけではない。
ぐるりと辺りを見回すと、ほかにも太古の恐竜を思わせる姿や犬や猫といったペットが民家よりも頭一つ大きく巨大化したものなどが、四方を取り囲んでいた。
それらは逃げ惑う人々に接近したかと思うと、何の容赦さえせず襲いかかる。
なぜならルフィアンに知性などない。
これまで人間が魚や鳥、豚や牛を容赦なく食していたように、人間を食欲を満たすための餌としか見ていないのだ。
「母さん」
サキがチヅルの前に進み出た。

それまで杖がわりに使っていたこん棒を、逆さに構えている。
「だいじょうぶ、俺がついてるから」
そう言う声も、また体も震えていた。
「サキ。じっとしていて」
チヅルはサキにまわりが見えないように、しっかりと抱きしめた。
サキに惨劇を見せたくない。
壮絶な断末魔の悲鳴を聞かせたくなかった。
(だいじょうぶよ、サキ。あなただけはどんなことがあっても死なせはしないわ。わたしの命に代えても——)
しかし辺りを見回すと、そんな思いはガラス細工のようにもろく崩れそうになる。
悪夢の中にすっぽりと入り込んでしまったかのようだった。
サキを抱えて立ち尽くしているだけで精いっぱいだった。
もしサキがいなくて一人きりだったら、他の人々のように絶叫しながら逃げ惑い、無惨にルフィアンの餌になっていたことだろう。
いや、それも時間の問題かもしれない。
間を抜けて逃げようとする人々に対し、ルフィアンはその巨体に似合わぬ俊敏さで襲いかかっていた。

カメレオンが蝿を食らうように、伸ばした舌で一瞬にして飲み込む。掃除機が綿ぼこりを吸い込むように、ひと飲みしてしまう。
だめだ、助からない。
しかしチヅルがあきらめたら、サキはどうなる?
最後まであきらめてはいけない。
自分のためでなく、サキのために、たとえ藁にすがっても生存の道を探そう。
そのためにここまで苦しい思いをして、歩きつづけてきたのではないか。
実際にルフィアンに遭遇したからといって、すぐにあきらめるくらいなら、初めからアパートに残って、安穏としていればよかったのだ。
チヅルは辺りを見回した。
路肩に自家用車が乗り捨ててあった。
緊張に身を固くしながら、ルフィアンたちを見回す。
幸い一匹としてまだこちらには近づいていない。
「あの車の中に隠れましょう」
サキの耳元でつぶやき、慎重な足取りで車まで近づいた。
心の中で、死んだ彼に祈る。お願い気づかれないで。サキと私を守って——。
祈りが通じたのか、サキを助手席に座らせ、チヅル自身も運転席に身を忍び込ませられた。

ドアを閉めようとしたとき、チヅルは辺りの変化に気づいた。
先ほどまで響き渡っていた人々の悲鳴が、ぴたりと消えている。
辺りを見回して、チヅルの神経が凍（こお）った。
人々の姿が皆無（かいむ）になっていた。
逃げられた者は、ほんのひとかけらだろう。あとの人々は、跡形（あとかた）もなくルフィアンの餌となってしまった。
人間が食料として創り出したルフィアンの――。
何匹かのルフィアンが、その醜い顔を、こちらに向けていた。
しかも巨大蟹のごときヤツがぎこちない足取りで、こちらに迫っている。それを見た別のルフィアンも、争うように向かってきた。
チヅルは激しい音を響かせてドアを閉めた。
パニックで頭の中が空白（くうはく）になる。
何とか助かる方法は、と、車内を見回した。
キーが差し込んだままになっていた。
「サキ、逃げられるわ」
自動車のキーを捻（ひね）った。
エンジンは掛からない。

「お願い、掛かってよ」
声に出して言ったとき、サキがメーターを指さして言った。
「母さん、無駄（むだ）だ。ガス欠だ」
メーターは左側のEのところに振り切れていた。

◈

「ほんとだわ。わたしったら、何してるのかしら」
チヅルは苦笑した。
なぜ笑えるのか自分でも不思議だった。
次の瞬間、激しく車体が揺（ゆ）れた。
巨大な猫がその前足で、鞠（まり）にじゃれつくように車を揺らしていた。
さらに犬が駆け寄り、その向こうからはナメクジと蟹が近づいてきている。これほどの悪夢は見ろと言われても無理だろう。
チヅルは頬（ほほ）に苦笑を浮かべたまま、サキを抱きしめた。
「ごめんね、サキ」
気がついたらチヅルは、詫びていた。
「どうして、謝（あやま）るの？」

サキが顔を上げて、チヅルを見た。
「母さんは、俺に謝ることなんて一つもない。俺は母さんのおかげで、生きてこれたんだから」
チヅルが返答に窮していると、サキが言った。
「サキ……」
「そりゃあ、悪い事をして心配もかけたけど、感謝してるよ」
サキは照れくさそうに言った。
「ありがとう、サキ」
チヅルはサキを力いっぱい抱きしめた。
その直後——けたたましい悲鳴が、車の外で響いた。
餌を奪い合って、互いに争っているのだろう。チヅルは目を閉じサキを抱きしめたまま思った。その餌とは、自分たちのことだ。
ところが、今度は悲鳴に銃声が重なった。
「すごいや、どんどん撃ち殺されてる」
サキがチヅルの腕の中から身を乗り出した。
いったい何が……。
顔を上げたチヅルが見たのは、次々に倒れていくルフィアンたちの姿だった。
「おらおら、化け物ども。おめぇらは人間様の餌のはずだろうが。立場をわきまえな」

ルフィアンの死骸の向こうから姿を現したのは、アーミージャケットに身を包んだ大柄な白人の男だった。
（武装ボランティア……）
男の向こうからも、同じように戦闘服姿の男の姿が見える。
辺りにいたルフィアンたちは、男たちに銃撃され、動きを止めていた。
「助かった。助かったわ、サキ！」
チヅルはサキの頭を撫でた。
サキはチヅルを見て、笑みを浮かべると、そのままシートにもたれ、吸いこまれるように寝入ってしまった。
突然押し寄せた恐怖そして安堵のせいで、一気に疲れが出たらしい。
無理もない。ここまで泣き言一つ言わず、チヅルを思いやりながら歩きつづけてきたのだから。
「サキ、休んでて。一言お礼を言ってくるわ」
車を出るなり、近くにいる白人男に礼を言った。
「ありがとうございました。助かりました」
チヅルの声に、男は掛けていたサングラスを外す。
チヅルを見たとたん、男は目を大きく見開き、驚きをあらわにした。

「おまえは、ナオミ……どうして、ここに……？」

チヅルは困惑しながら、首を横に振った。

「悪いけど、人違いよ。私はチヅル。チヅル・アマミヤ」

そう言っても男は、しばらく呆然とした顔つきで、チヅルを見つめていた。

やがて男は、悲しそうに苦笑した。

「そうだよな、ナオミが生きているわけがねえ。……それにしても、洒落た英語をしゃべるな」

「ええ、アメリカで暮らしたことがあるから」

「どうりで。英語が国際語に統一されてもう三年近くになるってのに、未だにジャパニーズイングリッシュの抜け作どもが多いからな、この国には」

男は噛みタバコをチヅルの足もとに吐き捨てた。なおも舐め回すような目で、チヅルを見つめつづける。

返答に困ってチヅルはうつむく。

「そうだ、俺も自己紹介しとかなくちゃな。俺の名はケビン。聞いたことないか？」

「さあ、ケビンとだけ言われても……」

「それなら、ケビン・ザ・リッパーって名前は、どうだい？」

「何ですって！　ま……まさかあなたが……」

驚くチヅルを見て、男は大げさに顔をほころばせた。

「そうさ、俺があのケビン・ザ・リッパー様だ」

冷たい水の中に、頭から突き落とされたようなショックだった。

チヅルがアメリカで生活していた頃、全米を恐怖のどん底に陥れた殺人鬼がいた。

何十人という若い女性を殺害した殺人鬼。

その名が、ケビン・ザ・リッパー――。

「ど……どうして、あなたがここに？」

「おやおや、知らねえのか。武装ボランティアとして、おまえたちをわざわざ助けに来てやったのは、全米の刑務所から召集された奴らなんだってことを」

「何ですって」

「俺もいまじゃ心を入れ替えて、こうしてボランティアしてるってわけさ。まあ、それはジョークだ。刑務所にいるよりは、ましだからな。しかし、ラッキーだったぜ。ここまできてナオミに瓜二つの女と出会えるとは」

「ナオミさんって、誰？」

「聞きたいか？　よぉし、特別に教えてやろう。俺の初恋の女さ。しかし死んじまったんだ。ケビン・ザ・リッパーってクレイジーな野郎の第一の犠牲者だ」

「それじゃあ、恋人を自分の手で」

「ナオミを殺したことだけは後悔している。刑務所の中でも、それだけは悔やみつづけたぜ。

ああ神様、ナオミともう一度会わせてください、って、生まれて初めて祈ったりもした。しっかし、神様ってのは、もしかして本当にいるのかもな」

ケビンは顔をオーブンに入れたチーズのようにとろけさせて、チヅルを見た。

チヅルは体から血の気が引いた。

（ああ、何てこと。化け物を退治してくれた恩人が、全米切ってのならず者だったとは――）

「おい、また来やがったぜ。今度は大量だ」

後方で声がした。

「ちっ、何だよ、いいところだってのに」

今にもチヅルにふれようとしていたケビンは、大げさに舌打ちした。

「ちょっと、一仕事してくる。車ん中に隠れて待っててくれ」

希代の殺人鬼はにやりと笑い、背中に担いでいた銃を構えると、チヅルの前から立ち去っていく。

「サキ、急いで」

チヅルは車の中からサキを連れ出そうとした。

男たちが戻って来ないうちに、どこかに身を隠そう。

そう思って辺りを見回した。

だがチヅルが目の当たりにしたのは、すさまじい戦闘風景だった。

先ほど撃退されたルフィアンたちは、一匹一匹が巨大だったのに比べ、今度襲ってきた連中は、大きさはそれほどではないものの数が桁違いだ。

ルフィアンは二つのタイプに分かれていた。

地上からは柴犬の一団が駆け寄り、頭上ではカラスの群れが空を埋め尽くしている。

もちろんどちらもルフィアンが擬態したものであるのは、鋭い牙や嘴、異様に輝く瞳から明らかだ。

とても逃げるどころではない。

チヅルはもう一度、車に駆け込み、ドアをロックした。

悲鳴が轟いた。

目をやると、軍服に身を包んだ男たちが、カラスの大群に襲われていた。銃から発した弾丸が空しく空を切り、彼らは地に倒れ伏した。

「化け物どもめが、キャッホー！」

それでもケビンをはじめ、男たちは逃げるどころか、ゲームを楽しんでいるかのように、銃を乱射している。

「退却だ。車に戻れ」

彼らを乗せてきたらしい頑丈なトラックの運転席で男が叫んだが、すぐにカラスの群れに覆い尽くされて見えなくなった。

けたたましい雄叫びをあげ、柴犬の群れ——狂犬の集団が、車に体当たりしてきた。

牙を剥いた犬が車を取り囲む。

頭からウインドウにぶつかってくる。

無数の犬たちに視界を塞がれて、表がどのような状況になっているのかすらわからない。

犬たちのうなり声ばかりで、つい今まで聞こえていた武装ボランティアの銃器の音さえも耳に入らなくなっていた。

ケビンをはじめとして、トラックに乗ってやって来た男たちの数は、せいぜい二、三十人といったところだろうか。

それに対して、襲撃してきたルフィアンの数は、その千倍いや、一万倍は下らない。

ケビン・ザ・リッパーからは逃れられた。

しかし……。

もう少しで空港まで行けた。

あと一日、この化け物どもがやって来るのが遅かったならば、避難民大量空輸の飛行機に乗れた。

空港の混乱は、すさまじいものだろうが、せめてサキだけでも何とか飛行機に乗り込ますことはできたはずだ。

あと一日あったなら……。

突然車内にノイズが響いた。

犬たちがぶつかった弾みのせいか、勝手にカーラジオのスイッチが入っている。

〈……奇跡は起きます。聖女アチ様の力……奇跡が……〉

ノイズにまぎれて、よく聞き取れなかったが、チヅルはサキを抱きしめ、その言葉に神経を集中した。

〈……この放送を聞かれた方……すぐ……アチ……救済グループの元へ……〉

「救済グループ」

チヅルは、口に出してつぶやいていた。

ここまで来る途中、人々が話していた、聖女のグループのことらしい。

これまでは、聞き流していた。

混乱時に似非の救世主が現れるのは、歴史を見れば明らかだ。

不安におびえ、何でも信じたいと願う集団心理だと、哀れにさえ思っていた。

しかし今はまったく違う思いだった。

犬に擬態したルフィアンに囲まれ、どうすることもできない。

唯一すがれる道があるのなら、どんなことでも信じよう。

サキを助けられるのなら……。

〈強く念じ……アチ様の救済を……念じるのです。そうすれば……救済の道が……。……アチ

様と……強く、念じ……〉

（アチ様、どうか、息子のサキを助けてください。わたしはもういい。しかしサキだけは、どうか無事に──）

ミシッと厭な音がした。

正面のウインドウにひびが入ったのだ。犬たちは痛みすら感じていないかのように、頭をぶつけ、爪を立てる。

ウインドウが破られるのも時間の問題だろう。

「アチ様、どうかサキをお助けください」

チヅルはサキをきつく抱きしめ、声に出して念じた。

「アチって？」

目を覚ましたサキが訊ねた。

「あなたも祈るのよ。アチ様、どうか救済をと」

チヅルの頭部に痛みが走った。

ウインドウの割れ目から、犬が前足を押し入れて、爪で掻いたのだった。

「ああ、アチ様、どうかサキを。わたしの大切なサキをお救いください」

「アチが、俺を救う……？」

チヅルの腕の中でサキがつぶやいたとき、ウインドウが大きく割られて、犬の群れが狭い車内になだれ込んできた。

「アチ様、どうかサキをお救いください。サキを──!!」

チヅルはサキをきつく抱きしめながら、そう絶叫していた。

❖

サキは夢を見ていた。

夢の中で、銃を手に戦っていた。

戦いの相手は、空を飛んで迫ってくる。

──鷹や鷲に擬態したルフィアンの群れだった。

（俺が戦っている）

心中の驚きに反して、体は俊敏に反応していた。単に夢と片づけられないような臨場感がある。

見たこともない銃を、自分は巧みに操作していた。

戦塵にまみれ、荒れ果てた荒野を、サキは走っていた。

鷹や鷲だけでなく、巨大なカラス、図鑑で見たことしかなかったような太古の怪鳥のような奴らまでもが、続々と姿を現し、サキに襲いかかってくる。

おびただしい数、そして風を切る俊敏さだ。

恐怖に、逃げだしたくなる思いが脳裏を過る。

だが体は、そんな素振りなどまったく見せずに、迫り来るルフィアンの群れに立ち向かっていた。

自分の利き腕のように、思い通りに銃が操れる。

敵が繰り出す攻撃——。

甲高い叫び声が超音波となって襲ってくるのを、寸前のところで身をかわし、飛び跳ねて避ける。

息をつく間もない攻撃の連続にもひるまずに、的確に銃で撃つ。接近した敵には銃に装備されたソードで斬る。

いつしか弱気だった気持ちは消え失せ、心と体が一つになって戦っていた。考えるよりも先に、トリガーを引き、迫るルフィアンを撃ち落とす。

自分に間違いないのに、まったくの別人のような感覚さえあった。

これまで自分の中で眠っていたものが、徐々に目を覚ましている——。

そんな気持ちさえする。

夜が明け、朝日が照りつけるように心の中がクリアーになってくる。

体のすみずみにまで力がみなぎり、体の切れ、瞬発力、スピードが増してくる。

そんなサキに恐れをなしたかのように、ルフィアンの数が減り、やがてそのすべてが粉塵と化した。

サキは立ち止まった。

息が上がり、体から汗が噴き出していたが、それらさえ心地よい。

気のせいだろうか、荒野のどこかから自分を呼ぶ声がする。

辺りを見回しても、誰もいない。

しかしその声はスピーカーのボリュームを上げるようにどんどん大きくなってくる。

女性、というよりも、若い女の子の声。

聞き覚えのない声だった。

誰だ、俺を呼ぶのは。

そう思ったことが、そのまま口から出て言葉となっていた。

誰だ俺を呼ぶのは。誰だ俺を呼ぶのは——と言いながら、何かに導かれるように、サキは目を醒ました。

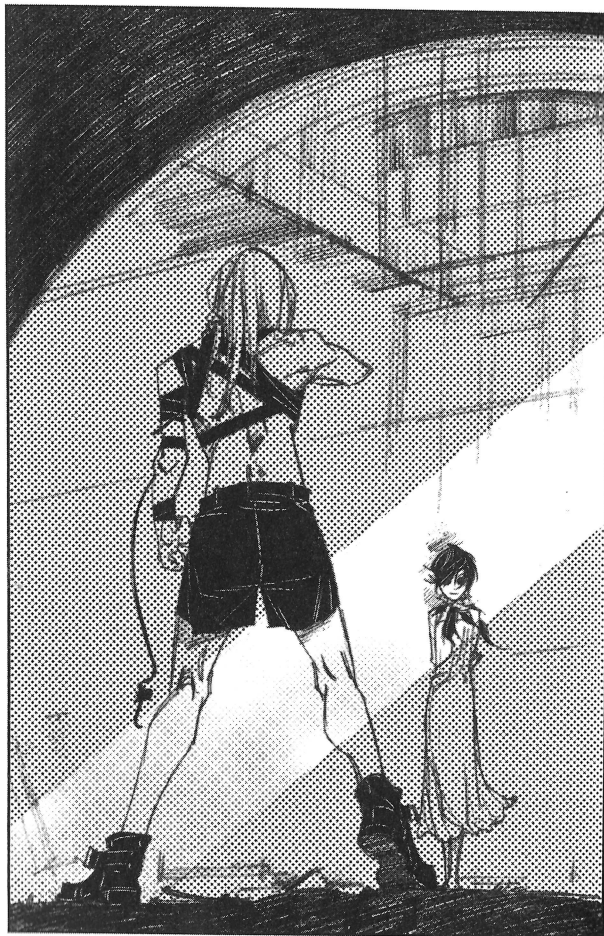
上半身を起こす。

剝き出しのコンクリートに囲まれた一室だった。

薄暗く、ひんやりとしている。

廃墟となったビルの内部という雰囲気の場所だ。

部屋の片隅に、窓が見える。窓といってもガラスも入っておらず、ただ外が見えるだけの部

分だった。
そこからぼんやりと光が差し込んでいるところを見ると、日中のようだった。
サキは床に寝ていた。
古びて、所々からウレタンが飛びだしているマットレスが敷いてある、その上に横たわっていた。
「気がついたわね、サキ」
声がした。夢の中で自分を呼んだのと同じ声だった。
サキは緊張に身を固くしながら、立ち上がった。
三メートルと離れていない場所、コンクリートの壁に一人の少女がもたれて立っていた。
薄い緑色をしたノースリーブのワンピースを着たスリムな少女だった。
あどけない顔つきをしている。
サキよりも二、三歳年下といった雰囲気だ。
しかし、どこにでもいる少女とは、どこか違っていた。
何が、と言われるとうまく答えられないのだが、彼女の華奢な体から、熱を帯びた光が発せられているかのようなのだ。
「どうして、俺の名前を知ってる?」
サキは警戒しながら訊ねた。

少女は楽しそうに、明るく顔をほころばせた。
「あなたのお母さんが、そう呼んでたから」
「母さんって……」
突然母の名を出され、一瞬何がなんだかわからなくなった。
「母さんは？」
記憶をさぐりながらも、サキは訊ねた。
「死んだわ」
少女は、時計の針が秒を刻むように、無感動に言った。
その言葉に、ここに来る前の記憶が蘇ってきた。
母と二人して、空港を目指して歩いていた。
四月の下旬、避難民大量空輸を行う東京国際空港を目指すため、緊急移送を目的とした道路用大型車両に搭乗したのだ。
しかし車両は発車してまもなく、動かなくなった。
上京用の各主要道は規制を無視した個人車両の大量侵入と事故の多発によって完全に停滞、路上は大量の車両が乗り捨てられていたため、それらを除けることは事実上不可能だったのだ。
動かない車両の中でじっとしていても仕方がなく、サキは母に促されて、歩いた。歩きつづけた。

疲れたし面倒だったけど、それほど不安はなかった。
母がいっしょだったからだ。
母といっしょなら、不安はない。母はサキのことを守ってくれる。母がいれば、サキは何も考えなくていい。
母に従っていれば、生きていけた。
その母が死んだと、少女は言った。
そう、あの車の中で、サキと母は狂犬の集団に襲われた。
狂犬に擬態したルフィアンたちが、車に体当たりし、ウインドウを割って中に入り込んできた。
その直後――サキは母に抱かれながら意識を失った。
そして気がついたら今だった。
「母さんが死んだなんて」
「あなただって、わかってるはずよ。ルフィアンの総攻撃を受けて、助かるはずがないって」
相変わらず少女は、たんたんとした口調で言った。
「でも、それなら俺だっていっしょに死んでいたはずだ」
サキの言葉に、少女の顔つきが一瞬、かたくなった。けれどもすぐに、やわらかい笑みを浮かべる。

「私が助けた」
「おまえが、俺を助けた？　あの犬の群れの中からいったいどうやって？」
「それは……」
そう言いかけたところで、少女は声に出して笑う。
「何がおかしいんだ？」
「だってサキは質問ばかり」
少女はからかうような目でサキを見た。
サキは少女を睨んだ。
しかし少女は、それがまるでうれしいかのように、いっそうの笑みを浮かべて、サキに微笑む。
「誰だ、おまえ？」
「私はアチ」
アチ……聞いたことがある名前だ、とサキは思った。
（そうだ、あのとき、カーラジオから聞こえたんだ）
車の中で狂犬どもに襲われたとき、いつの間に吸いこまれるように寝入っていたサキだったが、ノイズ混じりのカーラジオから聞こえてきた言葉が、その名を語っていた。
さらに母が、それを聞いて祈ったのだ。

——アチ様、どうかサキをお救いください。サキを!!
「何か思いだしたみたいね」
アチが言った。
「それじゃあ、おまえは、母さんの言葉を聞きつけて……まさかそんな」
「そのまさかよ。だからサキ、あなたはここにいる」
「じゃあ、なぜ母さんを助けなかったんだ」
「助けるに値しなかったから」
アチの口調は、相変わらずたんたんとしたものだった。
「この野郎」
とたんにサキの中で、怒りが込み上げてきた。
母の死という重大な、サキにとっては自分の生死よりも大切な問題をさらりと言われたせいで、アチの言葉自体がジョークのように感じられたせいかもしれない。
いや、あまりに大きな出来事だけに、にわかに反応できなかったせいかもしれない。
だが今は、母の死が事実であると認識できる。
サキが拳を握りしめ、足を踏み出そうとしたとき、アチが言った。
「悲しみを私に対する怒りに転化するのは、お門違いよ。私はチヅル・アマミヤの願いを聞き入れて、アチ、あなたを助けた。それだけでも感謝されていいんじゃない」

サキは動きを止めた。

自分の気持ちが、透明のガラス越しにすべてアチに見られているみたいだった。

サキは今まで寝かされていたマットトレスの上に腰を下ろした。

涙がこぼれた。

流れるにまかせて泣いた。

「悲しいよね。好きな人が死ぬのって」

相変わらずたんたんとした口調だったけれど、ふと顔を上げると、アチの瞳から涙が一粒、頬を伝って流れ落ちていた。

その涙を見たとたん、サキの中で何かが変わった。

「アチ、おまえは聖女なのか？」

サキが訊ねる。

アチは真剣な顔でサキを見つめ返し、そしてコクリと首を縦に振った。

❖

ふたたびマットトレスから立ち上がり、アチと向かい合ったとき――。

サキの中の様々な感情の波紋は、信じられないほどに収まっていた。

消えたわけではない。

最愛の母を失った悲しみが消えるはずがない。

しかしアチを見ていると、心が静かな山奥にある湖のようになってくる。

感情の高鳴りが、そっと湖底まで沈んでいき、気持ちがなだらかな湖面のように、穏やかになってくるのだった。

目の前にいる少女が、聖女。

母親の呼びかけに応じて、サキを助けてくれた聖女……。

「どうやって、俺を助けてくれたんだ？」

サキは数メートル離れた位置でアチを見つめながら訊ねた。

「こうしたの」

アチは左腕を差し出し、二の腕の内側に右手を当てた。いつの間にか、右手には小さなナイフが握られていた。

ナイフの刃を左腕に当てると、スッと引いた。

白い肌に赤い筋が浮かび、すぐに血の雫となって、腕を流れて指先から、滴り落ちていく。

「血よ。サキ、あなたもチヅルと同じようにルフィアンの攻撃を受けた。いくら私が空間移動の力を持っているからといって、すぐに駆けつけるなんて無理だったから。私と、私の仲間が駆けつけ、ルフィアンを払い除けたとき、すでにチヅルは死に、あなたも死……いいえ、瀕死の重傷を負っていた」

「その俺に、血を与えて？」

「私の血であなたは復活、そして新生した」

にわかに信じがたい話だった。

しかし彼女の話が嘘でないのは、サキ自身が知っているのだ。嘘だったら、こうして生きてここにいられるわけがないのだから。

それでもサキは、一瞬ではあったがアチが、言葉に詰まったことが気にかかった。

『あなたも死……いいえ、瀕死の重傷を負っていた』——と。

「なぜ、俺を助けたんだ？　母さんが祈ったから、それだけでわざわざ？」

「サキ、あなたに私たちといっしょに戦ってもらうためよ」

アチはナイフをしまい、細い指先で左腕の怪我をなぞる。

指を離したとき、消しゴムで鉛筆の線を消したみたいに傷はきれいに消えていた。

びっくりしてアチを見つめると、アチは幼い子供のように笑った。アチにすれば、そんなことは悪戯程度なのだろう。

「いっしょに戦ってくれるわね」

やさしい言葉遣いだが、同時に有無をも言わせぬ力強さがあった。

そしてそのつぶらな瞳には、これまで他人には感じたことのない光が宿っている。

母とは違う。

だが、母によく似た輝き——。

サキ自身にも、それが何なのかはわからない。

だが母が死んだ今、自分を崩すことなく支えていくには、アチのこの輝きが必要かもしれない。

わずかな間に、サキはそんなことを考えていた。

「私たちの仲間は〈救済グループ〉と呼ばれているわ」

アチが言った。

「救済グループ？　そう言えばあのとき、俺と母さんを助けてくれた外人たちも、おまえの仲間なのか？」

サキの問いにアチは即座に、違うわ、と断言してから、言葉をつづける。

「やつらはアメリカからやって来た〈武装ボランティア〉。日本の治安維持のためなんて言ってるけれど、とんだ偽善者集団だわ。現に老人や子供といった弱者を容赦なくルフィアンの餌として与え、私たち〈救済グループ〉をも、任務遂行の邪魔になるからって、容赦なく攻撃を仕掛けてきている」

「めちゃくちゃな連中だな。よくそんな連中をアメリカ政府は派遣したな」

「あなた、何にも知らないのね。彼らのバックにいるのは、G&R社よ」

アチは冷たく言った。

サキはムッと黙った。
しかしアチは悪気はなかったらしく、すぐに平然と言葉をつづける。
「まあ、めちゃくちゃな連中だってのは当たっているわね。いい？　アメリカは世界的危機に対して、もう海外派遣に前途ある若者を出す余裕なんかない。だから危険な社会奉仕活動の場では、人権復帰の餌につられた犯罪者たちをタダ働きさせる。死んでもだれからも文句が出ない連中を無償で兵士として使えるの。武装ボランティアの兵隊たちが凶悪な犯罪者の集まりだってことは、平和におぼれたこの日本ではまるで問題視されていないし。戦争屋のG&R社にとっては、安く使える手駒が欲しかっただけなのよ」
「犯罪者が武装ボランティアの兵士……」
あのとき、母に近づいてきた白人の顔が、サキの脳裏に浮かぶ。あの男は母に何をするつもりだったんだろうか。
そう思ったとたん、怒りがカッとこみ上げてきた。
今の自分だったら、奴が母に下卑た目を向けただけで、攻撃していた。
それ以前に、奴らが現れる前に、ルフィアンを攻撃していた。
「攻撃、この俺が、どうやって？」
サキは自分自身に疑問を投げ掛けていた。
「どうかしたの、サキ？」

アチに訊かれたものの、なんと答えればいいのかわからずに、サキは口をつぐんだ。
銃を手にルフィアンと戦ったのは、夢だったのだ。
実際に戦ったわけではない。
それでも思い出したとたん、実際に経験したことのように体が熱く火照ってきた。
指先にトリガーを絞る感覚が、生々しく蘇ってくるかのようだ。
そんなサキを見て、アチはクスッと笑い「テツオ」と声をあげた。
すぐにコンクリートの壁の向こうから返事があった。
「待って。もうすぐだから」
「いいから、持ってきて」
アチの言葉を受けて、奥の部屋から、小柄な人影が姿を現した。
十歳前後と思える少年だった。
野球帽を逆さにかぶりながらも、手にした物を夢中でいじくり回していて、顔も上げない。
「それは!!」
少年が手にした物を見て、サキは声をあげた。
銃だ。
それもサキが夢の中で、自由に操り、ルフィアンを撃退したのと、瓜二つだった。
「テツオ、貸して。ほら、サキ」

アチは少年から銃を奪うと、サキに向かって放った。

「ままま、待ってくれよ。俺は銃なんて」

あわててキャッチしたが、手にした瞬間、以前からさわり慣れていたかのように、銃がぴたりとサキの右手にフィットした。

「ね、いい感じでしょ?」

アチが言った。

サキは銃を右手に持ったままアチを見つめた。

「何が起こったんだ?」

「何って?」

「俺に何をした?」

「さっきも言ったじゃない。私の血を与えたの」

「血を与えて命を助け、その上、俺が見た夢の中身まで知っているってのは、どういうことなんだ?」

サキの言葉に、アチは楽しそうに顔をほころばせた。

「あれは単なる夢じゃない。私があなたに与えた、もう一つの現実よ」

「現実? それじゃあ、ほんとうに俺が、この銃でルフィアンを始末したっていうのか」

サキが冗談めかして言うと、アチはまじめな顔でうなずいた。

「いい加減にしてくれよ。俺はこれまで銃なんて撃ったことがない。喧嘩だってしたことがないのに——」

「こんにちは、ボク、テツオ。年は十歳。お兄ちゃんは?」

少年が、笑顔で言った。

サキは名前と歳を名乗った。

「ねえねえ、サキ。ガンソードを試してみてよ」

テツオと名乗った少年は、サキに近づいてきた。

「ガンソード? 試すって言ったって……」

「ボクが調整したんだ。この銃の正式名称は〈ガンソードG&R-M64-JPC DOLPHIN〉。アメリカの兵器メーカーG&R社が、次世代の保安用携帯銃器として開発した銃なんだよ。ガス圧で射出される弾丸は、エネルギーを帯び発光、着弾箇所に致命的な表面破壊を引き起こすんだ」

いったん銃について話し始めたテツオは、サキが口を挟む間もなく、話を続ける。

「しっかしさ。日本の都市警察が実装した型は、殺傷能力が軽減されていて、対人ダメージは、たとえ急所に命中しても、失神程度なんだ。そんなんじゃ、ルフィアン相手には玩具みたいなもんだから、ボクが改造したんだけど……。ね、早く撃ってみて」

「そう言われても、何を撃てばいいいか」

「アチ様を撃てばいいよ」
「なにッ！」
すぐにテツオは、にこっと笑う。
「冗談に決まってるだろ。壁を撃ってみて。早く」
テツオに促されるまま、サキは壁に向けて銃を構え、トリガーを引いた。
衝撃はほとんどなく、それでいて発射された弾丸は六、七メートル離れた分厚いコンクリートの壁を、一発でうち破っていた。
「すげえ」
サキは壁に近づいた。
厚さ十センチほどの壁に、手首が通るほどの穴が空いていた。
「これだけ威力を上げるのは大変だったんだから」
テツオがサキの隣に立ち、穴を見ながら言った。
「おまえが、改造したのか？」
サキが訊ねると、テツオは誇らしげに胸を張る。
「まあね。ルフィアンに襲撃されて、逃げた警官が落としていったのを、改造したんだ。それより今度はソードを試してみて。ソードもパワーアップしたから、かなりの威力だと思うんだけど」

「ソード？」
「つまり警棒だよ。グリップ下部にはエネルギー射出でソードが装着され、接近戦用の武具として使用されるんだ」
サキはグリップの下についた銃座を腕で押した。
瞬時に赤白い炎のようなレーザーが二メートル近くも伸びた。
警棒というよりも、光の刀といったほうがピンと来る。
「ねえねえ、早く試してみてよ」
テツオに促されてソードを振るおうとしたとき、見知らぬ少女が血相を変えて、部屋に駆け込んできた。
「アチ様、ルフィアンの襲撃です」
「予定通りね」
アチは少しもあわてずに、窓際へと歩いた。
サキは、胸の高鳴りを感じながら、後につづいた。
窓の外に広がっているのは、けだるい太陽の光に照らされたゴーストタウンという言葉がぴたりと当てはまる街並みだった。
ビルの前がこの街のメインストリートだったらしく、両脇には商店街がずらり並んでいる。どの店も荒れ果てて、見るも無惨な惨状だ。

この街をこれほどにしたのは、混乱と暴徒という人間が引き起こした災害だったのだろうが、今まさにその無人の街に、南下してきたルフィアンどもが姿を現した。
サキの夢に出てきたかのように、鷹や鷲に擬態した群れが、空を舞う。
さらに路面をやって来るのは、サキたちを襲い、母を殺害したのと同様、柴犬の群れだった。
「さあ、頼んだわ」
アチが、サキに言った。
「頼んだって？」
「夢の中でやったようにやればいいの。あなたなら、できるわ」
「しかし……」
「大切な母親の命を奪った連中の仲間よ。いいえ、あの中にもあなたの母親の肉を食らった奴がいるかもしれないわね」
アチの言葉に、サキは手にしたガンソードのグリップをかたく握っていた。
「さあ、行くのよ。サキ」
アチは両手をかかげた。
とたんにサキの体がふわっと重量感を逸した。
視界がぼやける。
だが次の瞬間、サキはビルから出て、ルフィアンが迫り来るメインストリートのど真ん中に、

一人で立っていた。
アチの力で、強制的にテレポートさせられたらしい。
サキを見つけたルフィアンたちが、とたんにスピードを増した。餌、つまりサキを見つけて、我先に食らおうとしているのだ。
「あいつらはボクの父さんや母さんを生きたまま食らったんだ」
声がして振り向く。
後方のビルの窓から、アチといっしょにテツオが身を乗り出していた。
「お願いだ。ボクが改造したその銃で、仇をとってくれよ」
テツオが祈るように叫んだ。
サキを見つめる目に、きらりと輝くものが見えた。
（あの少年も、ルフィアンに肉親を殺されたのか……。俺と同じように）
一人になったとたん、サキの心に母の面影が蘇った。
母が死んだ。
自分のために苦労を重ね、自分のことを深く愛してくれた母。
サキが高校を卒業したら、いっしょにアメリカへ行くことを楽しみにしていたのに、それなのに死んでしまうなんて。
母さん、俺まだ十四だぜ。死ぬのは早いよ。

いっしょにアメリカへ行って、俺と死んだ父さんの墓参りするんじゃなかったのか。
それなのに……。
「サキ、来たわよ」
アチの声が響いた。
メインストリートの前方を見やると、すでに柴犬たちの群れは、五十メートルほどまで接近していた。
本能剝き出しで迫る群れを見たとき、サキの中で何かが弾けた。
熱い血をたぎらせる、何か。
戦闘に駆り立てる熱い何かが――。
サキは考えるより先に、ガンソードの銃口を前方に向けた。
両足を開いて立ち、銃を構える姿が、様になっている。
まるで経験を積んだことがあるかのようだ。
先頭の奴との距離が十メートルを切る。
トリガーを絞る。
命中し、一撃で仕留めた。
端から見れば、たった一発の弾丸を発射したにすぎない。
だがサキにとっては、確実に何かが変わった一発だった。

気がついたら、銃を連射し、ルフィアンを的確に撃ち殺していた。
接近した奴は、ソードで斬る。
息をもつかせぬ戦いの中、サキは頭の一部で冷静に、自分が今までの自分とは違っていることを感じていた。

❖

二〇〇七年五月六日――。
サキは大宮の繁華街で、食料物資の調達に当たっていた。
ほかの救済グループのメンバーたちが食料を運んでいる間、襲撃に備えて、ガンソードから手を離さない。
アチと出会って、二週間近くの日が過ぎていた。
今ではサキは、救済グループの一員として、あわただしい日々を過ごしている。
救済グループが戦う相手は、ルフィアンだけではなかった。
もう一つ〈武装ボランティア〉とも激しく対立している。
アチたちの活動を危険視した〈武装ボランティア〉は、〈救済グループ〉に対して、首都圏からの即時避難を勧告したのだ。
けれども、アチが聞き入れずに活動をつづけたため〈救済グループ〉は危険組織として、強

制排除の対象とされているのだ。

実際、サキから見ても、アチは不思議かつ不可解な存在だった。

聖女、であるのは、間違いない。

彼女の血を与えられたものは、傷が癒え、今まさに死に瀕していた人間が、精気を取り戻す。

サキ自身も、この二週間の間に、そのような光景を幾度となく目の当たりにしている。

もちろんそれらの者の中には、効き目なく死んでいく者もいたが、逆にアチから血を受けることによって、それまで以上の力を発揮する者もいた。

その最たる例がサキだ。

うぬぼれではなく、アチが言ったのだ。

――サキ、あなたにはとても大きな力が宿っているわ。まだまだあなたは変わっていく。私の血を受けた者の中でも、あなたはエリート中のエリートかもしれない。

エリートであるかどうかはわからないが、変化についてはサキ自身、強く感じていたことだった。

明らかに、それ以前の自分とは違っている。

異質な力が宿っているのもまた事実だ。

けれども、違っていないとも思える。

以前の自分と性質そのものは変わってはいない。

ただ、アチの血を受けることで細胞が活性化し、眠っていた力が目を醒ました。そんな気がするのだった。

ただ大きく変わった点を一つだけ上げるとしたら、俊敏さと判断力、そして銃の扱いについてである。

救済グループのメンバーたちは、お世辞にも強者とはいえない者がほとんどだった。

自力で逃げられず、弱者として武装ボランティアからも見捨てられた者たちが、アチに救出されたのだから、当然かもしれない。

そんな中にあって、サキの発揮し始めた攻撃力は、わずかな間に救済グループにとって、なくてはならないものになっている。

今日の食料調達も、サキがいなければ、わざわざ危険を犯して、大宮の旧繁華街まで足を伸ばしたりはしない。

ただそうしなければならないほど、物資の不足は深刻だということだ。

すでに首都圏郊外北部においては、ルフィアンと武装ボランティアとの交戦が激化している。

ここ大宮でも、すでに何度となくルフィアンと武装ボランティアの戦闘が行われていた。

そのため市街は、戦禍の跡のごとく荒れ果てている。

取る物もとりあえずに住民たちが逃げだし、またその後、略奪を企む連中がやって来る前に、ルフィアンが南下してきたため、デパートや商店の倉庫などには、わりかし食料が残って

いた。

とくにJRの駅からほど近いデパートの地下の倉庫には、ほとんど手つかずの品物が残されていた。思いもかけない収穫だ。

現在、食料調達に来ているのは、サキをはじめとして十名のメンバーである。

地下で調達のメンバーたちをリードしているのは、テツオだった。

歳に似合わずに、てきぱきと指示を与えている。

サキはというと、銃を片手に地下フロアーを歩いていた。明るいとはいえないものの、非常灯が点在しているため、不自由はしない。

「すごいよ、サキ。カニの缶詰がこんなにあった。ショウコが喜ぶよ」

ショウコというのは、アチに助けられたものの、元々体が弱かったらしく、本部に寝たきりの少女だ。

テツオは両手に缶詰を抱えて笑いながら、サキに駆け寄ってきた。

無口で人見知りの激しい少女で、ほかの仲間からほとんど相手にされていなかった。ただテツオだけが、かいがいしく面倒を見ている。

「ショウコ、カニなんて食べるのか?」

サキは何気なく訊いた。

「食べるどころか、大好物なんだ。お母さんが作ってくれたカニチャーハンが、一番の好物だったって言ってるもの」

「カニチャーハンか。俺もママに作ってもらったことがあったっけ」

サキがぽつりとつぶやいたとき、背後から笑い声が響いた。

男の下卑た笑いだ。

銃を手に振り向く。

いつの間にか、ショーケースの背後に、軍服姿の男が立っていた。

「俺のママは、中華料理が得意だったんだ。しかし、俺が八つのとき、男をこしらえて家を出てったきりだがな」

長身の白人だった。手にしたアーミーナイフの先で、陳列棚に傷をつけながら、ゆっくりとサキに近づいてくる。

男の顔に、見覚えがあったような気がした。

「お前は……」

サキがつぶやくと、男はサキを見つめた。

「どこかで見たガキだ。……そうか、覚えてる、覚えてるぞ。おまえはナオミ……いやチヅルといっしょにいたガキだ。そうだろう、ビンゴー! だが待てよ。なぜ、生きてる? おまえといっしょにいた女は、あんなにずたずたになってたのに」

「母さん、母さんは……」

とたんに男は楽しそうに微笑む。
「あの後、俺たちの仲間もほとんどやられた。そんなのはかまわねえ。どいつもこいつもクズばかりだったからな。しかし俺は、チヅルが気に入った。どうしてもチヅルに会いたくて、車に戻ったんだよ。ちゃんといたぜ、かわいそうにチヅルは傷だらけになって。もう少し俺が行くのが遅かったら、ルフィアンどもの餌になっていたところだ。しかしこの俺が、ちゃんと……」
「母さんを、返せ！」
意識するよりも早く、サキは叫んでいた。
手にした銃を男に向ける。
「おもしれえ、撃ってみろよ。このケビン・ザ・リッパー様のナイフが速いか、おまえの銃が速いか、競争だ」
ケビンは唇をにやりと歪めた。
しかし瞳からは、笑いが消えている。
野生の獣のような険しい輝きが浮かんでいた。
「サキ……」
サキの背中に身を隠しながら、テツオがつぶやいた。
サキはケビンを見つめ返し、緊張に体をかたくした。
息詰まる睨み合いに、空気が緊迫した。

だが次の瞬間に、サキはケビンからわずかに視線を逸らし、驚きに声を震わせた。
「か、母さん……」
その声にケビンも、自分の背後に眼をやる。
非常灯に照らされた薄暗い地下食品売場の通路にサキの母――。
チヅルが立っていた。

❖

死んだはずの母親、チヅルがぎこちない足取りで、こちらに歩いてくる。
「母さん、母さん」
サキが呼びかけても、チヅルは反応しなかった。
見たところ怪我はない。
だがその表情は、魂が抜けたかのようにうつろだ。
「母さん、俺だ。母さん！」
サキが駆け出そうとしたしたとき、シュッと風を切り、ケビンの手からナイフが飛ぶ。
ナイフはチヅルの眉間に、深々と突き刺さっていた。
「きさま！」
ケビンを撃とうとしたサキを、テツオが止めた。

「サキ、落ち着くんだ。ほら、あれを見て」
テツオに促されて、母親に目を向ける。
母親の体が、ぶよぶよとゼリーのように揺れていた。
見る見る白い脂(あぶら)の塊(かたまり)に溶(と)けてゆく。
サキは訳が分からずに、呆然と立ち尽くした。
「ルフィアンだよ、サキ。ルフィアンの奴が、擬態したんだ」
テツオが言った。
「ビンゴ！　しかしあの女に擬態するってことは、あのときあそこにいたルフィアンが、ここに来ているってことになる。俺と、おまえとそしてあのときのルフィアンの再会か。ふっ、出来過ぎてるぜ」
ケビンはもはやタンパク質の塊と化したルフィアンの死骸に近づき、ナイフを抜いた。
だがそれは悪夢の始まりにしかすぎなかった。
いつの間にか、通路のあちこちにチヅルが姿を現し、二十世紀後半にブームを起こした怪奇映画のゾンビのような姿で、ゆっくりとサキに向かって歩いてきていた。
「おっと、長居(ながい)は無用(むよう)だ。小僧(こぞう)、愛しい〈ママたち〉とせいぜい楽しく過ごせよ」
ケビンはそう言うと、サキたちに背中を向けた。
「おい、おまえ、武装ボランティアだろ。ルフィアンを見逃(みのが)していくのかよ」

テツオが叫んだ。
「女のいねえところに興味はねえ。それにお前ら救済グループも、攻撃対象として殺害許可が出ているんだぜ。見逃してやるだけでも、ありがたいと思うんだな」
ケビンは、通り道を塞いでいたチヅルの喉を、ナイフで真一文字に切(き)り裂(さ)き、靴音を響かせて、地下フロアーを後にしていった。
「サキ、ガンソードを貸して」
テツオが言った。
「どうする気だ」
「どうするって、ボクが……」
「いや、俺がやる」
押し殺した声でつぶやくなり、ガンソードを構えた。
迫り来るチヅルの額(ひたい)に照準(しょうじゅん)を合わせ、トリガーを引く。
次々にチヅルが倒れていく。
たとえ偽物(にせもの)だとわかっていても、ほかの者の手に掛けさせたくはなかった。
（母さん、さようなら）
サキは心で別れを言った。
チヅルの擬態の群れが消えると、一転してすさまじい雄叫びがこだました。

天井に頭を擦りながら、恐竜たちが姿を現した。背丈二メートルを超えるティラノザウルスの群れだった。
玩具屋にあったフィギュアを見て擬態したのだろう。どのティラノザウルスにも首や肩、股間のところに切れ目が入っている。
それでいて動きは、ほんとうに太古の世界から蘇ってきたかのように俊敏だ。
フロアー内に悲鳴が轟いた。
「ユキコの声だ」
テツオが血相を変えた。
食料調達に当たっているグループが、襲われている様子だ。
感傷に浸っている間はなかった。
「離れるな」
サキはテツオに声をかけ、トリガーを絞る。
ティラノザウルスの数は多い。
地下という閉ざされた空間のため、撃ち殺したあとの体が邪魔になって、うまく配置を取らないと自分たちを袋小路に追い込む危険がある。
そのため食料調達のメンバーたちのところにたどり着くまでに数分を要してしまった。その数分が命取りだった。

「ユキコぉぉ。イサムぅぅぅ！」
かろうじて息のあったユキコに駆け寄った。
ユキコはサキを見ると、微笑みを残して事切れていった。
「ちくしょう、大切な友だちを……」
テツオが肩を震わせた。
「時間がない。行くぞ」
サキはテツオを促した。
「でも食料は？」
「とにかくいったん退却だ」
「ちくしょう、ユキコたちが命がけで集めたってのに」
テツオは近くに落ちていたカニの缶詰を一つ懐に入れ、サキにつづいた。
地下にこれだけ大量に押し寄せてきているのだから、地上はどうなっているのか。
一抹の不安を脳裏に浮かべながら、階段を上がり、一階フロアーに出た。
そこはしんと静まり返っていた。
動くものの姿は見られない。
「テツオ、離れるな」
ガンソードを構えたまま、慎重な足取りで前進する。ときどきマネキンやディスプレイの飾

りに威嚇（いかく）射撃した。
だがルフィアンの擬態はなかった。
デパートから外に出る。
太陽が西の空に傾いた夕暮れ近い時刻だった。
街は妙になま暖かい風が吹き抜けてゆくばかりで、閑散（かんさん）としたゴーストタウンが広がっているばかりだった。
「おかしいね、ルフィアンなんて、どこにもいない。それなのになぜボクたちがいる地下にだけ、あんなに押し寄せてきたんだろう」
テツオの言葉に、サキも引っかかるものがあった。
サキたちがデパートの地下にいることを知って、何者かがルフィアンを誘導（ゆうどう）してきたのではないか。
そして何者か、と言えば、心当（こころあ）たる相手は一人しかいない。
ケビン。ケビン・ザ・リッパーだ。
なぜ奴が一人で、サキたちのところにやって来たのか。
しかもルフィアンが、サキの母親に擬態するなんて、あまりに不自然すぎるではないか。
ケビンがルフィアンどもを導き、チヅルに擬態させ、サキたちを襲わせた。そう考えれば、納得（なっとく）がいく。

そう考えたとき、サキはハッと息を飲んだ。
「なあ、テツオ。ルフィアンが擬態するためには、その対象というか、擬態するものに会わなければできないんだろうか」
「それはそうだと思うよ。あいつら知性なんてない。ただ本能だけで擬態してるんだから。擬態する相手に会わなければ……それじゃあ、サキのお母さんは……」
テツオが、驚いた顔つきでサキを見つめた。
テツオもサキの考えているのと同じことに思い当たった様子だった。
「生きてるんだよ、サキのお母さん。そうじゃなかったら、ルフィアンが擬態できるわけがないもの」
テツオがサキの顔を見上げた。
どんな表情をすればいいのか、わからなかった。
無人の大宮の街に歩を踏み出す。
さっきまでどんよりと暗く思えた夕日の中に、わずかではあったが明るい輝きが宿っているかのように思えた。

❖

二〇〇七年五月十七日――。

アイランは、母親と二人で東京国際空港に着いた。
まだここまでは、ルフィアンの群れはやって来てはいない。
しかし空港内は、国外脱出を望む人々で、異様な熱気に包まれていた。
押し寄せる人々の数に対し、圧倒的に離陸する航空機が足りない。
またたとえ飛行機を確保できたとしても、日本からの難民を受け入れる国がないのだ。
空港までは、比較的困難もなくたどり着けた。
アイランの父が買収した武装ボランティアの男が、避難する人々を強引に押し除けて、優先的に輸送してくれたからだ。
ところが空港に着くなり、アイランと母親は、放り出されるようにトラックから降ろされてしまった。
日本を飛び立つまで、ガードするという約束だったじゃないの——。
母が男たちに文句を言った。
だが男たちは、母が払えないのを承知でさらなる金銭を要求。金がないならお役ご免とばかり、さっさと立ち去ってしまったのだった。
母はヒステリックに文句を言い出したが後の祭りだ。
アイランはうんざりとして、その場に座り込んだ。
ぼんやりとあたりを見回す。

ごった返す空港は、空気中に割れたガラスが散りばめられている——。
それほど緊迫していた。
どの人を見ても、極限まで追い込まれた雰囲気で殺気立っていた。
「仕方ないわ。とにかく行きましょう」
母親に手を引かれ、引きずられるように歩き出した。
「痛いよ、離して」
アイランが手を振り払おうとしても、母親は離さない。
「安心しなさい。すぐにソウル直行の飛行機に乗れるから」
わかってる、もう何度も聞いた——と思ったけれど、口には出さなかった。
すでに大半の在日韓国人の日本退去は完了していた。
その上で、韓国政府は日本人の一時的な避難民受け入れを表明した数少ない国の一つである。
韓国はアイランの母親の祖国だった。
だがここまで避難が遅れた原因は、父親にあった。
仕事の関係からルフィアン侵攻の引き金を引いたのではないかと疑われているため、依然として許可が出ていない。
そのため先に許可が出たアイランと母親は、一足先に日本を脱出することにしたのだった。
待ち合わせロビーに着いた。

顔見知りの韓国人や韓国大使館関係者の一団が目につく。母親は人々の間を縫うようにして、彼らに近づいた。

「おまたせ。出発は？」

母が韓国大使館員の男に訊ねた。

だが男は、苦々しい顔で母親を見つめ返し、首を横に振った。

それまで漠然と感じていた不穏な空気が、いちだんと強まるのがアイランにはわかった。

「何かあったの？」

母親の執拗な問いに、男が重い口を開く。

「避難する人の数が、増えてしまいましてね。チャーターした機に、全員乗ることができないんですよ」

「どうしてよ、ちゃんと確認したんじゃなかったの？　それくらいどうしてちゃんとチェックできないのよ」

「みんな逃げだしたいのは同じなんですよ。私としては一人でも多くの同胞を……」

「だったら私たちが優先のはずよ。大使にも話は通っているわ。さあ早く、私と娘の手続きをしなさい。後からやって来た人たちなんて、後回しにすればいいんだから」

ヒステリックにまくし立てる母に対し、男は露骨に顔をしかめた。

「何よ、その顔は。あなたじゃわからないわ。別の人を呼びなさい」

「お母さん、いいわよ。待ってようよ」

激高する母親の腕を引いた。

しかし母親はなおも男に抗議をつづける。

甲高い声が、辺りに響き、雰囲気をよけいとげとげしくさせた。

抗議を受けている大使館員だけでなく、待っていた同胞たちも顔をしかめはじめた。

同胞ばかりではない。

ロビーに所狭しとたたずむ日本人たちの視線までもが、声高に抗議をつづける母親に向けられている。

アイランは、全身に寒いものが走った。

母を見る人々の目に宿ったどす黒い光に、極度の恐怖を感じたのだ。

これまでも友人や知人が暴徒となって、押し寄せてきたとき、同じような恐怖を感じた。

しかしそれらとは比べものにならないほどのぎりぎりの緊迫感が、ピンと張りつめている。

「お母さん」

やめてよ、危ないよ——と言おうとしたのだが、声にならなかった。

母親の腕を引くのが精いっぱいだった。

母親も完全にパニック状態に陥っている。

元来取り乱す傾向があったけれど、だからといって母親ばかりを責めるのは酷だろう。

今回のルフィアン騒動が起きるまでは、わりかし裕福な生活を送ってきた。地域の人々とも穏やかに交流してきたのだ。
それが突然、理由のない中傷を浴び、母親も酷く傷ついているのだ。
精神的にも磨り減って、限界まで達している。
それが空港に来て、一気に爆発してしまった様子だった。
だがヒステリックな爆発は、ガソリンが充満した場所でマッチをするようなものだった。
空港は、すでに一種の無法状態と化している。
もっとも、警察機構が崩壊した日本では、ここ空港に限らず、どこでも同様だ。
かろうじて武装ボランティアがやって来て、武力による制圧を行っているために、表面上での混乱は収まっている程度にすぎない。
しかしいつ暴動が起きても、何の不思議もない状態であり、空港内部には武装ボランティアは配備されていなかった。
そのため細かい混乱は空港内各所で起きている様子だった。
しかし、それでも大きな混乱になっていないのは、皆、ここへたどり着くまでに疲労困憊していて、その根気さえ失せているからなのだ。
ちょっとしたきっかけさえあれば、すぐに爆発する。そんな場所で母は理性をなくし、絶叫している。

「うるせえんだよ」
すぐ近くに座り込んでいた中年の男が声をあげた。
アイランも何度か会ったことがある、韓国の同胞だった。
人一倍穏やかで、酒に酔うとこの上なく愉快な男だった。その男が怒りに目をつり上げて、母親を睨みつけた。
母親も相手が知っている男だけに、かちんと来た様子だった。
「何、その口の聞き方は。これまでの恩義を忘れたの。あなたには、どれだけこれまでに援助してきたか……」
「そんなこと今、ごちゃごちゃ言われる筋合いはねえ」
男が立ち上がり、母親に詰め寄った。
それが混乱のはじまりだった。
近くに腰を下ろしていた同胞たちも、一斉に腰を上げ、母親に食ってかかってきたのだ。
「おれたちはもうここで三日も順番を待ってるんだ。それを今頃来て、ぎゃあぎゃあわめくんじゃねえ」
「そうよ、何様のつもりよ。いつまでも金持ちぶっているンじゃないわ」
さすがに母親も、身を固くした。
だがすぐに大使館員に近づき、耳打ちする。

「飛行機に乗せてくれたら、個人的にお礼するわ。だから……」
母親の言葉がとぎれた。
大使館員の右腕が、母親を殴っていた。
「うるせえんだよ、金で何でもできると思ったら大間違いだ」
大使館員はさらに倒れた母に、唾を吐きかけた。
すでに火が放たれたのを、アイランは敏感に感じた。
出発を待たされて苛立ちの募る同胞たちの怒りが、母親に向けて爆発してしまったのだ。
「やめて、やめてぇ――ぇ！」
絶叫するアイランは、近くにいたやはり顔見知りの初老の女に突き飛ばされた。瘦せ細った女のどこにそれだけの力があるのか、と驚くばかりだ。
アイランはフロアーにしたたか腰を打ちつけ、動けなかった。
そんな彼女の目の前で、母親が暴行を受けている。
「やめて、どうして……お願いだから、やめて……」
祈るようにつぶやくが、誰の耳にも届かない。
誰も止められなかった。
暴動は、ロビーにいた日本人たちにも飛び火した。
人々が罵倒し、殴り合う。

怒号と悲鳴がこだまする。
「やめて……みんな。どうして、どうして……」
アイランは壁際にもたれて、おびえた顔つきで暴動を見やる。
見開かれた瞳からは、涙も凍りついたかのように落ちては来なかった。

❖

空港にたどり着いたサキたちが見たものは、人々の暴動だった。
混乱で通行不可能な大型車両ではなく、十台を超えるバイクに分乗し、裏道をかいくぐるようにしてやって来たのだった。
それほどまでにして空港にやって来たのは、救済グループが介護している避難民のうち、弱った者たちを南日本に退去させるのが目的だ。
弱者を切り捨てる武装ボランティアに見捨てられた人々だけに、救済グループが連れてこなければ、ほかに誰も援助の手を差し伸べない。
そのためバイクに乗ったそれぞれが、後ろにしっかりと紐で縛りつけるようにして、やっとのことで空港までたどり着いた。
空港まで来ただけで、空輸機に乗れる保証は何もない。
だからといって、じっとしていても何の解決にもならず、アチの命令でこうして赴いてきた。

しかし着いていきなり、人でごった返す空港は、パニック状態だった。

「サキ、どうしよう？」

体に見合った小型バイクを降りたテツオが駆け寄ってきた。

「どうもこうも……」

サキはバイクに乗った救済グループのメンバーを見回した。

サキとテツオ以外は、ここに来るまでで精力を使い果たしたという雰囲気で、ぐったりとなっている。

アチからこのグループのリーダーを任されてやって来ただけに、サキが何とかするしか道はない。

「とりあえず、中の様子を見てくる。テツオ、みんなを安全な場所で待機させててくれよ」

「一人で大丈夫？」

「ああ、これがあるからな」

サキが持っていたガンソードをかかげた。

テツオはうれしそうに笑ったが、すぐに心配そうに言う。

「でも人を撃つときはパワーを弱めて」

サキはこくりとうなずき、空港内に向かって駆け出した。

はじめはガンソードを使うことはないだろうと思っていた。

ここにはまだルフィアンが姿を現している気配はない。

また武装ボランティアもルフィアン迎撃を優先しているのか、空港に彼等の姿も見られなかったからだ。

しかし空港内に入ってすぐ、その考えが甘かったことがはっきりした。

治安を維持する力が皆無であるため、歯止めが利かなくなった人々が、不安や苛立ちを無軌道な暴力に変えている。

「やめろおお」

サキは声を限りに絶叫した。

だが、怒号や悲鳴にかき消され、誰も耳を貸さない。

ガンソードを天井に向けて、放った。

天井が砕け、辺りにいた人々が何事かと振り向く。

しかしガンソードは過去の火薬によって炸裂する銃器とは違い、ガス圧で発射される。

そのため、消音機能が働いてしまい、多くの人々を威嚇するまでには至らなかった。

血の気にはやった男たちが、サキを見て、ガンソードを奪おうと駆け寄ってきた。

サキはテツオに言われた通り、パワーを最小にセットしてから、トリガーを引いた。

弾丸は迫り来る暴徒の腹部に、確実に命中した。

次々にその場に倒れていく。

殺傷能力はなく失神させただけなのだが、その威力は絶大だった。
サキのまわりにいた半径数十メートルの人々は、動きを止め、おびえた目つきでサキを見ている。
「救済グループの者だ。危害は与えない。じっとしてるんだ。その場に腰を下ろして、じっと」
サキが叫ぶと、湖面に落ちた水滴から波紋が広がるように、人々が座り込んだ。
さらにサキは過激暴徒たちを的確に撃ち、失神させながらロビーを抜けて、空港内へと走った。
搭乗口前のフロアーにたどり着くと、そこはいちだんと激しい混乱状態にあった。
中でも韓国の国旗を掲げた一団の狂乱ぶりは、ひときわけたたましい。
老若男女かかわりなく、怒号を発している。
サキが近づき、叫んでも、誰一人として振り向かなかった。
どうやら一人の人物を袋叩きにしている様子だ。
それら暴徒の脇に、一人の少女がうずくまるようにして座り込んでいた。
血の気が失せて、歯が噛み合っていない。
それでも目だけは勝ち気に見開かれ、暴徒たちを凝視しているのだった。
サキは何かに引きつけられるように、少女の元へと走った。
「何があったんだ?」

駆け寄りざま、少女に訊ねた。
少女は暴徒たちをきっと見つめたまま口を開く。
「母さんが……母さんが……」
「何、あの中に君の母さんがいるのか?」
そのとき少女が初めて顔を上げ、サキを見た。
目があった瞬間、少女の感情がサキの中に、一気に流れ込んでくるかのようだった。
悲しみ、おびえ、恐怖、そして孤独。
それらがいくら雄弁に語られるよりも、彼女と視線を合わせただけで、切ないほどに伝わってくる。
「母さんが……」
サキを見上げてつぶやいた少女の瞳——。
それまで風に吹かれたガラスのように乾いていた瞳が、にわかに濡れそぼり、涙があふれ出た。
それでも少女は泣き崩れようとはせず、流れる涙を拭いもせずに、その視線を暴徒に向ける。
視線に憎しみがこもるのがわかった。
「やめろ。そこをどくんだ」
サキが叫んでも、暴動は止まない。

そこにいる数十人の者たちは、完全に理性を逸していた。おそらく自分たちが何をしているのか、それさえもわからず暴れている。

サキは後部にいた男目掛けて、ガンソードのトリガーを引いた。

男が倒れると、暴徒たちの目がサキに向けられる。

すぐに怒りの矛先が、サキに変わった。

暴徒たちとの距離は五メートルと離れていない。

だがサキは両足を開いて立ち、冷静にトリガーを絞った。

ルフィアンでもない、武装ボランティアでもない。

一般の人間を撃つのは、いくらはパワーダウンして殺傷能力がないからといって、決して気持ちのいいものではない。

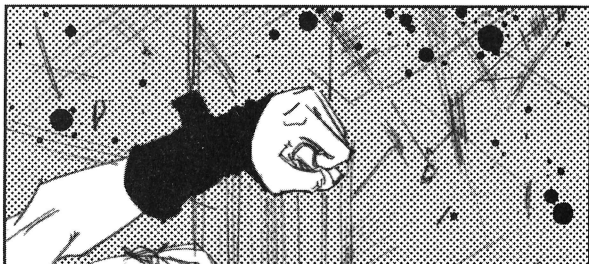
しかし、そうしなければならないから撃つ。

ほかにどうすればいいというのだ?

もしほかに解決の方法があるなら、教えてほしい。

しかし誰も教えてくれず、またサキ自身にもわからない以上、そうするしかない。

近距離から迫る暴徒を睨みながらも、サキの脳裏にくっきりと浮かんでいるのは、サキの後方でうずくまっている少女の瞳だった。

彼女と見つめ合っているかのような思いが、心に焼きついている。

何もできずに、目を見開いているだけの彼女に代わって、自分はトリガーを引いている――
と、そんな思いにとらわれていた。

暴徒たちを倒し終えるのに、実際には十秒ほどしか掛かっていなかっただろう。

しかしサキの中では、時間の流れが止まり、意識さえ空白になったようだった。

その空白の中に浮かんでいるのは、少女の瞳。

冷たく無表情を装ったその下から、さまざまな感情が溢れだしてくる瞳――。

倒れた暴徒たちの向こうに、一人の女性の姿があった。

ぐったりとなったその姿からは、一見しただけで、すでに事切れているのがわかる。

「母さん……」

すぐ脇で声がした。

顔を向けると、うずくまっていた少女が、サキのすぐ脇に立って、倒れた女性を見ていた。

「見るな」

サキは両手を広げて、少女の前に立った。

少女は正面からサキを見た。

しかしその瞳は、サキの体を通り抜け、その向こうで絶命している母親に向かっているかのようだ。

「口うるさかったけれど、ほんとうはやさしかった。反抗ばかりしてたし、怒らせるようなこ

とばかりしていたけど、嫌いだったんじゃない。ううん、大切な母さん。母さんが私を愛してくれたように、私も愛していた。でもそれがうまく伝えられなくて……。それなのにこんなことに……なぜ……どうして……」

放心したようにつぶやく。

少女の一言一言が、サキの胸に突き刺さった。

彼女の痛みが、自分の痛みのようにきりきりと感じられた。感じられれば感じられるほど、いたたまれない。

気がつくとサキは、ガンソードを腰のホルダーに収め、少女の体を抱き上げていた。

すらりとした体は、魂が抜けたように軽い。

少女は何も言わなかった。

サキに抱かれて、じっとしている。

ただその瞳だけは、見開かれ呆然と前方に向けられている。

フロアーを出て、一気にロビーを走り抜ける。

空港入り口のところまで走り出ると、テツオが声をあげた。

「サキ――ッ。こっちこっち!」

サキはテツオたちのところに駆け寄るなり、止めてあったバイクの後ろに少女を乗せた。すぐに自分もまたがり、エンジンを掛けた。

「サキ、どこへ行くの？」
テツオが訊ねた。
「この子を送り届けてくる」
「送り届けるって、じゃあボクたちは、どうすればいいんだい？」
テツオが不安そうな目で、サキを見た。
「ここから一番近いところにある、仲間の場所はどこだ？」
「ここからなら、たぶん上野だと思う。駅前のデパートの三階フロアーを拠点にしてる。今頃はアチ様も、上野に着いていると思うけど」
「テツオ、信じてくれ。この子を上野まで送り届けたら、必ず戻ってくる」
「でも、サキがいなくなったら……」
テツオが言葉を詰まらせた。
背後でやりとりを聞いていた救済ボランティアのメンバーたちが、不満げな目をサキに向けていた。
彼、彼女たちの気持ちも痛いほどわかる。
わざわざ苦労してここまで来たのに、サキ一人で勝手に戻るというのだから。だがサキは譲れなかった。
「この子はここにいちゃいけないんだ。少しでもここから離れないと、気持ちが押しつぶされちまう。一刻を争うんだ」

サキの言葉を聞いて、テツオはその目を、バイクの後部シートに乗せた少女に向けた。
すぐに少女を見つめるテツオの顔に、不安以上に悲しげな色が浮かび上がる。
「そうだね、わかった。でもサキ、彼女を送り届けたら、すぐに戻ってきてね」
テツオの言葉に、サキは首を縦に振ると、バイクを発進させた。
風を切って、バイクを疾走させる。
少女はその両腕をしっかりとサキの胴にまきつけてきた。
風の音以外、何も聞こえないサキの耳に、少女のつぶやきが聞こえてきた。
「母さん……。なぜ……どうして、こんなことに……」
聞こえたのではなく、感じられたのかもしれない。
声ではなく、彼女の悲しい心のとまどいが、触れあう体を伝わって。
サキにしがみつく彼女の両腕は、おびえた子猫のように小刻みに震えつづけていた。
空港から上野の駅前まで、二十分とかからずにたどり着いた。
上野の街も、すでにゴートスタウンと化している。
駅前のデパートだった廃ビルに、少女を抱えて入った。
三階に上がるなり、すぐにアチが姿を現した。

その顔は怒りに上気（じょうき）していた。
「いったいどういうつもり？」
サキは無視して、アチの脇を抜けた。
介護班の仲間のところに近づき、そこに敷いてあった布団（ふとん）の上に少女を横たえた。
少女を見つめると、依然としてガラスのような瞳を前方に向けたまま、じっとしている。
しかしその瞳を見ているだけで、サキの心に切ない思いが流れ込んでくる。
「この子、どうしたの？」
介護班の仲間に訊ねられた。
「何も訊かないで、休ませてやってくれ。お願いだ」
サキの言葉に、仲間はうなずき、少女の体に毛布を掛けた。
「サキ、答えなさい」
後ろからアチの声がした。
サキは立ち上がり、アチに向かって言った。
「空港へ引き返すよ。しかしとてもあの状態じゃ、何人輸送機に乗せられるかわからないが」
「そんなこと訊いていないわ。なぜ勝手に戻ってきたりしたの？　私はそんな娘を連れてこいなんて、一言も命令してないわ。なぜ、勝手なことを。答えなさい、サキ！」
サキはアチの脇を抜けて、ビルを後にした。

エンジンを掛けたままのバイクにまたがり、発進させる。
ふたたび空港を目指して——。

第二章　困惑

「なあ、ラダン司令官殿ぉ。彼女を、何とか助けてくださいよぉ」
ケビン・ザ・リッパーは、部屋の正面に置かれたデスクの向こうに立つ人物に、駄々っ子のような口振りで言った。
首都東京の北部——かつて赤羽台団地であったところに、設置された武装ボランティアの仮設基地内だった。
団地群を焼き払ってならした土地に滑走路を作り、アメリカから飛来した空輸機の数々によって、最新鋭の兵器が並んでいる。
その仮設基地の司令室。
そこに立っているのは、まだ少女といってもいいくらいに若い女だった。
ガンダーラ美術に見られる女神のごとき、彫りの深い美しい顔をしている。
スレンダーな体に身につけているのは、二十世紀半ば、一人のファシストによって世界を混乱に陥れたドイツ軍の将校が身にまとっていたかのような軍服だ。
丈の高い詰め襟が、白い喉元に食い込んでいた。

彼女は、ラダン——武装ボランティアのリーダーとして日本に赴任してきた。
囚人あがりのならず者たちを指揮するには、はなはだ場違いな印象を受ける。
だが、その経歴を聞けば、一目置かざるをえない。
昨年——二〇〇六年十二月に起きたインドとパキスタンによる核戦争は、世界混乱の引き金となった出来事だった。
戦争を引き起こしたのは、実はネパールをアジトとする核ゲリラ組織だったことは、今では世界の常識となっている。
そのゲリラ組織を率いていたのが、若き女闘士のラダンだったのだ。
すぐに彼女は、一級戦犯として国際手配の身となった。
しかし今年のはじめ、アメリカに潜伏しているところを逮捕された。
その時点で、ラダンは銃撃戦の末、射殺されたと世界のマスメディアは報道した。
だが彼女は死ななかった。
それどころか、武装ボランティアのリーダーとして、日本の地にいる。
彼女を日本に派遣する元となった人物に〈ある行為〉を施されて回復したことは、武装ボランティア隊員たちの知るところではない。
だが隊員たちは、ラダンが単なる若い娘ではないことを、独特の嗅覚で察している。
罪を犯した囚人だけが持つ感性、とでも言うのだろうか。

誰一人逆らうどころか、一種の敬意すらもって接している。
敬意というと抽象的ではあるが、端的に言い換えれば、恐怖に裏打ちされた敬意。
——この女に逆らったらマズイ。
そんな思いが、囚人たちを〈表面的〉とはいえ、統率している力となっていた。
しかしただ一人だけ、隊員たちの中でも、ラダンに対して横柄とも思える態度で接する者がいた。
それが、ケビンだった。
「どうしても、このまま死なせるわけにはいかねえんだ。なあ、ラダンちゃんよぉ」
今にも泣きだしそうな顔でケビンは、司令室の壁際に設置された円柱形の巨大な水槽を見上げた。
「それなら、もう一度私が手なずけたルフィアンを無断で持ち出したらどう？　知性を持たないルフィアンを飼いならすのが、どれだけ大変か、あなたにはわからないでしょうけどね」
ラダンは厭味ったらしく言った。
彼女が懐柔に成功したルフィアンを、ケビンが勝手に水槽の中の女に擬態させ、無断で連れ出したことを責めているのだ。
しかしケビンは気後れする様子もなく、顔をにやりとほころばせる。
「隠しても知ってるんだ。ラダン、おまえの血を与えれば、この女が生き返るかもしれないってことは」
「ふふふ、とんだお笑い種ね」
ラダンは鼻でせせら笑った。
ケビンの目に暗い光が宿った。
しかしすぐに、大げさな笑みで隠す。
「人が悪いよな。こうしてケビン・ザ・リッパー様が、頭を下げてるってのに。ほかの相手だったら夜中に忍び込んで、スッと首の頸動脈をやって、それでおしまいってとこなのによぉ」
ケビンは長い舌を突き出すと、いつの間にか取り出したアーミーナイフを、ぺろりと舐め回した。
「やってみれば？　せっかく社会復帰できたのに、死に急ぐこともないと思うけど」
「な、なんだとッ——」
「あなたと遊んでいるほど暇じゃないの」
ラダンはそれだけ言うと、司令室を出ていった。
ケビンなど眼中にないかのように。
「くそッ。いい気になりやがって」
アーミーナイフの刃に、赤い雫が滴り落ちた。
近くにあった椅子をつかみあげ、ラダンのデスクに向かって投げつける。

それでも腹立ちがまぎれないのか、タップダンスでも踊り狂うかのように、床を蹴りつづけた。

やがて、肩で息をしながら、壁際の水槽にもたれかかる。

ガラスに頬ずりしながら、水槽の中に安置された全裸の女を見上げた。

「見れば見るほど、ナオミそっくりだ。ああナオミ……いやチヅル、もう離さない。今度はもう死なせはしない。ラダンが無理なら、別の手がある。……知ってるんだぞ、知ってるんだぞ。血を授けて命を回復させるのは、ラダン、お前だけじゃないってことをな。しかもチヅルの息子の血となれば……。ああチヅル、もう少しの辛抱だからなぁ」

ケビンは泣き笑うような表情で、水槽を舐め回した。

ガラスの表面に、血糊がべっとりと付着した。

◈

あのときサキが、アイランなんかを連れて帰ってこなければ、こんなことにはならなかったのに――。

ここ一週間ばかり、そんな陰口が救済グループのメンバーの間でささやかれるようになっていた。

あの日、サキが空港を後にするのを待っていたかのように、ルフィアンの大群が押し寄せた。

空港に残してきた救済グループのメンバーで、生き残ったのはテツオだけだった。

テツオは仲間を守るため、最後まで戦いつづけていた。駆けつけたサキを見るなり、笑顔で気を失ったのだった。

ルフィアンの群れからテツオを連れだし、サキにつづいて駆けつけたアチが血を与えたところ、かろうじて一命は取り留めた。

けれども、依然として意識不明のままである。

サキの中で、忸怩たる思いが募っているのは事実だ。

しかし、それ以上に気になるのは、アイランのことだった。

サキが空港から救出した少女、アイラン。

しかしぶっきらぼうに名前を口にしただけで、ほかに何も言わなかった。

誰が話しかけても、冷たい目でじっと見返すばかりだった。

救済グループの活動には参加せず、一人離れた場所で、時を過ごす。メンバーが話しかけても、聞こえていないかのように返事一つしない。

完全に他人との交流を絶っていた。

外見は怪我もなく健康そのものであるのに……。

そのため、メンバーの間では、すこぶる評判が悪く、空港で仲間たちがやられたのは、アイランのせいだなどと陰口を叩かれているのだった。

しかし——サキには、アイランの気持ちが手に取るようにわかった。
目の前で、ルフィアンや武装ボランティアにではなく、同胞に母親を殺害された。
さらに、もしあのときサキが駆けつけるのが遅かったなら、アイランさえも母親を殺害した同胞たちの手に掛けられていたかもしれないのだ。
彼女の心の傷は、まだまだ癒えてはいない。
かんたんに打ち解けろと言うほうが無理な話だ。
けれども、それをほかのメンバーたちに説明することも困難だった。
それぞれ皆、似たような経験を経ている。
しかも日々刻々とルフィアンの驚異は増大していた。
ここ一週間の間に三度も襲撃を受けて、幾人ものメンバーがルフィアンの餌食になってしまった。
ルフィアンと交戦中、駆けつけた武装ボランティアにルフィアンもろとも殺害された者もいる。
敵は、ルフィアンと武装ボランティアの二つ——。
それにプラスして、残った一般の人間たちも極度に追いつめられ、いつ暴徒に変貌するかわからない状態だった。
救済グループのメンバーも著しく減少していた。

サキがメンバーに加わった頃には、二百名近いメンバーが、十五、六のグループに分かれて活動していた。
しかし今では、グループの数は五つあまり。
メンバーの数も、六十人を割っている。
もちろん逃げ遅れた人々を救出して、メンバーが増える可能性もあるが、むしろ今の状況では減る可能性の方がずっと高く思える。
事実、日々減りつつあった。
ルフィアンに襲われなくても、傷つき、疲れ果てて事切れていく。
それに関東一帯はすでに、ルフィアンの住処と化しているのだから——。
ただ一つ、明るい話題といえるかどうかわからないが、目を見張るほどにぐんぐんと向上しているものがある。
それはサキの戦闘能力だった。
すでに単独での行動が、メインとなっている。
彼の力については、アチ自ら絶賛するほどだった。
——あなたは選ばれた者かもしれない。私がますますあなたの中に眠っている力を呼び起こしてあげる。
だが、サキ自身はきわめてクールに受け止めていた。いや、クールに受け止めるようにしよ

うと決めていた。

正直に言うならば、力がついていく自分に不安と優越感が入り雑じっている。

それだけでなく、ふと考え込むと、何が正しくて、何が間違っているのかさえ、戸惑ってしまう。

果たしてアチに従っていることが、ほんとうに正しいのか。

アチはほんとうに聖女なのか。

――疑問に思うこともあった。

だが考えて、どうなるものでもない。

何も現状は変わらない。

アチの命令にしたがって、迫ってくるルフィアンを倒す。

武装ボランティアに対しても同様だ。

それでも、気に掛かることがないわけではない。

一つは母のこと。

先日、母に擬態したルフィアンに遭遇した。

ルフィアンが擬態するということは、その元になるものが、どこかに居なくてはならない。

つまりこれは、今でも母がどこかで生きているという、間接的な証明になるのではないだろうか。

カギを握っているのは、武装ボランティアのケビンという男だ。

奴は何か知っている。何か企んでいるに違いない――。

そしてもう一つ、気がかりなのは、アイランだった。

彼女が仲間から孤立し、自分の殻に閉じこもるほど、奇妙なまでの共感を覚える。

感じるのだ。

彼女は、自分と同じものを持っている。

自分と同じ不安におびえている。

一言で言うならば、それは孤独――。

サキと同質の深い孤独を、アイランも胸に抱えている。

そこに惹かれるのかもしれない。

気がついたらアイランに食事を与えるのは、サキの仕事となっていた。

ほかのメンバーは、テツオの看護はかいがいしく行うものの、アイランに対してはまったくといっていいほど無頓着だった。

致し方ないだろう。

いくらアイランの世話をしても、まったく反応しない。

それどころか逆に、冷たく挑発するような目で睨み返すのだから。

一人街へ出て、食料を調達してきたサキは、自分とアイランの分を差し引いてからメンバー

に渡すようになった。
当然食事も、ほかのメンバーたちとは別に、アイランと二人でする。
アイランと自分の食事を作るのが、サキの役目となった。
これまで自炊というものをしたことがなかったので、作るといっても実に簡単なものしかできない。
面倒くさいときは缶詰を開けて、そのまま食べた。
少し工夫しようと思ったときには、お湯を沸かし、登山用のドライライスとレトルトカレーで、カレーライスをつくった。
インスタントラーメンも、得意料理の一つとなっていた。
食事を差し出すと、最初のうちはサキがいる間は決して手を付けなかった。
サキが食べた後、席を外し、しばらくして戻ると容器が空になっていたものだ。
しかしここ数日、気がついたら差し出した食事を、アイランはサキといっしょにとるようになっていた。
それだけのことだった。
しかしなぜかサキには、そんな些細なことでも心弾む……。
アイランとの朝食――といってもコーンフレークに、長期保存可能なパックのミルクを掛けただけのものだったが――を済ませて、ぼんやりしていると、背後に気配を感じた。

振り向くと、そこにはアチの姿があった。
アチはサキたちを一瞥しただけで、何も言わずに脇を抜けて、奥の部屋に寝ているテツオのところに歩を進めた。
テツオの近くにいたメンバーの一人を退かせて、身を屈めた。
血を与えているのだった。
すでに数回、行っている。
だがテツオは、意識を取り戻さない。
（テツオ、早く元気になってくれ）
気がつくとサキは、心の中で祈っていた。
テツオのことを考えると、心臓が握りつぶされるような痛みを感じる。

「……ここは？」
となりの部屋から、テツオのつぶやく声が聞こえてきた。
サキは弾かれるように腰を上げ、となりの部屋へ走った。仰向けに寝ているテツオが、ぼんやりと目を開けている。
サキが呼びかけると、テツオはその口元に笑みを浮かべた。
「あなたを見捨てた人に、笑うなんて」
そばにいたメンバーの一人が、ぼそっとつぶやく。

テツオは顔をこわばらせ、すぐに言い返す。
「違うよ、サキはちゃんと来てくれた。ボク、信じてたんだ。だから、最後までがんばれたんだよ。サキのおかげだ、ボクが助かったのは」
胸が熱くなった。
サキが空港に引き返したとき、すでにテツオは体力の限界を超えていた。
サキが戻ることだけを信じて、精神の力でがんばっていたのだ。
（ありがとう、テツオ）
サキは心で、テツオに礼を言った。
テツオが生きていてくれてよかった。
元気になってくれて、うれしかった。
だが喜びに浸（ひた）っている余裕はなかった。
「サキ、出撃して。浦和（うらわ）にいるユキエたちのグループが襲われるわ」
アチは実際に見てきたように予言（よげん）した。
しかしアチの言葉が真実であるのは、サキも知っている。
サキが行かなければ、浦和にいるメンバーが襲われ、まず勝ち目なく死んでいくことだろう。
ゆっくりしている暇はない。
サキはいったん隣の部屋に戻り、ガンソードを手にした。

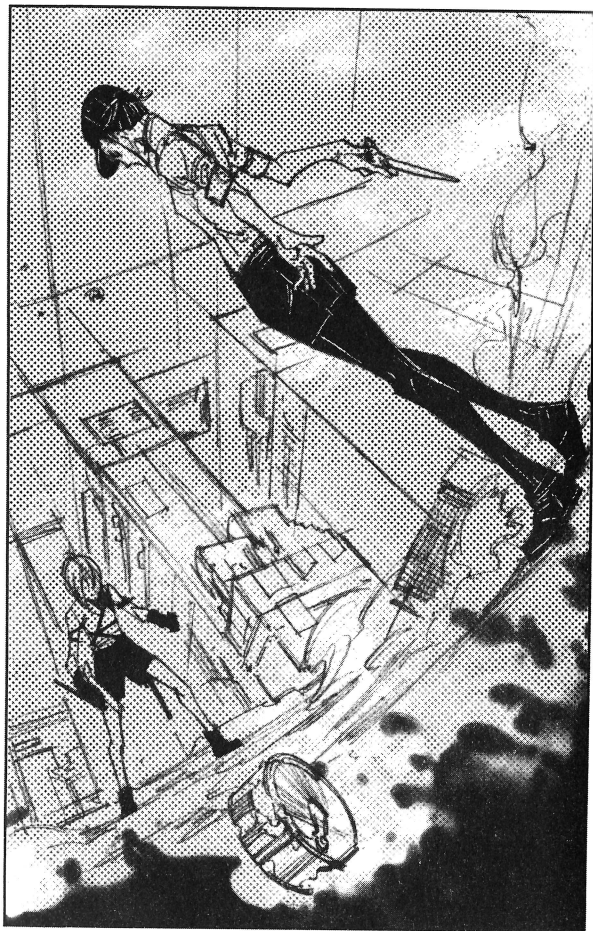
「腹が減ったら、そこにある缶詰を食べるんだ」
サキはアイランに言った。
「あのとき、空港から助け出したお姉さんだね」
振り向くと隣の部屋との境の壁にもたれて、テツオが立っていた。
「だいじょうぶなのか？」
テツオは笑顔でうなずき、その顔をアイランに向けた。
「よかった。元気になったんだね。名前は何て言うの？」
テツオが訊（たず）ねても、アイランはじっと見つめ返すだけで、何も言わなかった。
代わりにサキが、アイラン、と名前を教える。
「アイランか。すてきな名前だね。ねえ、アイランは、どこか悪いの？」
テツオが心配そうに訊ねた。
サキが答えるより先に、メンバーの一人が言う。
「どこも悪くなんてないの。そのくせ何にもしなくて、ただああやってじっとしているだけ。あの女のせいでテツオだってこんな目にあったっていうのに、何とも思ってないんだから」
「そんなことないよ。アイランが何とも思っていないなんて、大間違いだ。彼女はすごく悪いと思っている。元気になったボクを見て、心の中でホッとしてる。ありがとう、アイラン。ボクのこと、ずっと心配してくれていたんだね」

「テツオ！」
サキは胸が熱くなった。母と別れて以来、感じたことのない心通う熱さ……。
「サキ、急いで」
アチが言った。
「アチは、来ないのか？」
少々皮肉まじりにサキは言った。
アチは平然と言い返す。
「私はこれから千葉の柏にいるミチコたちの部隊と合流しなければならない。さあ早く」
「サキ、安心して。ボク、アイランといっしょにいるから」
テツオが微笑んだ。
相変わらず表情は硬いままだったが、アイランの瞳にわずかに潤いを帯びた光が宿ったのを、サキは見逃さなかった。

❖

（おかしい、様子が変だ）
仲間がいるはずの浦和駅近くのスーパーマーケットに足を踏み入れたとたん、サキは得体の知れない違和感を覚えた。

ガンソードを構え、様子をうかがう。
フロアー内は、これまで見てきた建物と同様に荒れ果てて、略奪と混乱の跡をまざまざと残している。
仲間たちの気配はない。
すでにルフィアンに襲撃された後なのだろうか。
しかしそれにしては、ここ浦和に至るまでルフィアンの影すら確認できなかった。
「誰か、いるか」
辺りに細心の注意を払いながら、声をあげてみた。
仲間からの返答はなく、しんと静まり返ったままだった。
慎重な足取りで、奥へと進んだ。
一歩一歩、足を踏み出すごとに、胸騒ぎが強まってくる。
気がつくと、全身に汗をびっしょりとかいている。
知らないうちに、気温が上昇していたようだ。
不快な蒸し暑さだった。
梅雨間近な季節ではあるが、この暑さと湿気は尋常ではない。何かの加減でスーパーの暖房が稼働しているのではないか。
しかし、やはり何かが違っている。

何が違うとは言えないのだが、何かが——。
鼓動が激しくなった時、前方に人影が見えた。
見覚えのある仲間の少女だ。
サキはほっとため息をもらした。
どうやらまだルフィアンは来襲しておらず、間に合ったようだった。
歩調を早め、少女に近づいた。
「ほかのみんなは？」
しかし少女は、ぼんやりと立ち尽くしている。
返事もしなければ、まるでサキがいることさえ気づいていないかのようだ。
様子が変だ。
もう一度声をかけてみたが、やはり少女は無反応に立ち尽くしている。
サキの脳裏に浮かんだのは、先日ルフィアンが母親に擬態したことだった。
もしかして、この少女も……。
「こんにちは」
とつぜん、背後から声がした。
ガンソードを構えて、背後に向けた。
建物の入り口のところに、見知らぬ少女が立っていた。

「君は？」
「わたしは、ラダン。お腹を減らしていたら、その子に助けてもらったの」
「何かあったのか？」
「どうして？」
「どうしてって、様子が変だ。彼女も……それに、ほかのメンバーたちは？」
「さあ知らないわ。わたしが来たときには、彼女しかいなかったもの」
「彼女しかいなかっただって」
「そんなこと、わたしに言われても答えようがないじゃない」
ラダンと名乗った少女は、挑発的に言い、サキを睨みつけた。
サキより四、五歳年上といったところだろうか。
しかし、それよりも大人びた印象を受ける。
「ずっと浦和に住んでたの？」
「ずっとって……どうしてそんなことを聞くの」
「べつに意味はないけど。どうして一人だけで、浦和に残っていたのかと思って」
「わたしのことを、疑っているの。生意気なヤツ」
ラダンは吐き捨てるように言った。
「べつにそういうつもりじゃない」

「それじゃあ、どういうつもり？　だいたいあなたたちみたいな子供に、人が救えるとほんとうに思っているの。ふん、思い上がりもはなはだしいわね」
カチンと来た。
よほどの不幸があって、心に傷を負っていると思い、下手に出ていたのだが、かなりの言いようだ。
サキはラダンから顔を背けた。
ラダンとどんな状況で出会ったのか、仲間の少女に訊ねようと思ったのだ。
しかしうつむき加減で振り向きかけた途中で動きを止めた。仲間の少女の足を、サキは凝視していた。
依然としてむしむしと暑苦しかったにも関わらず、頭から冷たい水が張られたプールの中に突き落とされた気分になった。
仲間の少女の両足首から下がない。
足首から下が、床と一体になっていたのだ。
とたんにサキの頭の中で、それまでの不可解な状況の謎が解決していた。
仲間の少女だけでなく、いまサキがいるスーパーマーケットの建物自体が、ルフィアンの擬態なのだ。

スーパーの暖房が暴走しているのではなく、サキは今巨大なルフィアンの体内にいるのだった――。
「どうかしたの？」
ラダンの声がした。
サキはゆっくりとラダンの方を向いた。
ラダンは建物の入り口に立ったままだ。
サキと十メートル近くも離れているというのに、中に入って来ようとしない。
「ラダン、ちょっと、ここまで来てくれないか？」
「どうして？」
「ちょっと見せたいものがあるんだ。早く」
しかしラダンは、入って来ようとはしなかった。
彼女は何か知っている。
いや、にわかに信じがたいことだが、ラダンはこの建物全体がルフィアンであることを知っている。
そうでなければ、すんなり中に入って来るはずだ。
サキはラダンを見つめた。
彼女も険しい目で、見つめ返す。

険しい目つきだった。
瞳だけ見ていると、サキよりもずっと年上の大人のように思える。
しかし――。
ルフィアンが人間と意志の疎通ができるわけがない。
またルフィアンを操る人間がいるとも、とても思えない。
となると、この不可解な状況を、いったいどう解釈すればいいのか。
「ねえ、あなた名前は？」
唐突にラダンが訊いた。
その顔には挑発的ではあったが、笑みが浮かんでいる。
「サキ・アマミヤ」
アマミヤ……と、つぶやいてからラダンはサキに言った。
「あなた、あの女――チヅル・アマミヤの息子ね」
「母さんを知ってるのか!?」
思わず声を張りあげたサキを見て、ラダンはにやりと笑った。
「ええ。話したことはないけど、顔や体はよく知ってるわ。あなた、ケビンって男に会ったことがあるでしょ」
「ケビン・ザ・リッパー……」

「そう。あのケビンが、どういうわけかあなたのママをとっても気に入ったみたい。それでわざわざわたしのところまで連れてきて、わたしがルフィアン観察用に使おうと思っていた水槽の中に保存しているのよ」
「誰だ、きさまは？」
「ラダン、と名乗るだけで不足なら、これでどう？　武装ボランティア日本司令官、ラダン・ラマ」
「武装ボランティア、日本司令官って、あの囚人たちの指揮官が……」
サキはガンソードをラダンに向けようとした。
それより早く、ラダンは手にしていた短剣(たんけん)を床に向けた。
「銃口(じゅうこう)を下げなさい。わたしがこのナイフを落としたら、どうなると思う？」
サキの背中を冷たい汗が伝った。
ナイフを落としたくらいではルフィアンは死なない。逆にその痛みが引き金となって、暴れ出すことだろう。
そうなると、サキはどうなってしまうか――。
にわかに想像できない。
何しろ彼は、知らず知らずのうちに、ルフィアンの体内に入り込んでいたのだから。
サキは、ゆっくりとガンソードを下(お)ろす。

「勘のいい子ね。どうしてこの建物自体がルフィアンだとわかったの？」
「足と床がくっついている」
「そうだったの。まあ今の段階で、ルフィアンにそこまで求めるのは、まだ無理かもしれないわね」
「ルフィアンを操れるのか？」
「答えは、イエスとノーの両方ね。今は少しばかり『ノー』に近いけれど、いつか近い日に必ずや『イエス』と言い切ってみせる」
「どうして、そんなことが……」
「あなたに説明しても無理だわ。わたしは、選ばれた人間。わたしには、それをやり遂(と)げる力がある」
ラダンの不敵なその顔には、自信めいた微笑みが浮かんでいた。
アチのようだ、とサキは思った。
しかしもしラダンが、アチのように不思議な力を持っているとしたら、彼女が言っているのは偽(いつわ)りだとは言い切れない。
現に彼女はルフィアンを手なずけつつある。
ラダンが促(うなが)したため、このような奇怪な擬態が起こったのは間違いないのだ。
それに彼女がからんでいたのなら、先日、ルフィアンがサキの母チヅルに擬態した謎も解明

できる。
「母さんは、生きているのか」
サキは高鳴る気持ちを抑え、神妙な口振りで訊ねた。
「その答えも、イエスとノーの両方ね。今は『ノー』だけれども、わたしがその気になれば『イエス』になる可能性もないではない」
「血か」
サキの言葉に、ラダンの笑みが止まった。
「どうして、それを知っているの？」
図星だったようだ。ということはラダンも、アチと同じ聖女……!?
「わたしの質問に答えなさい」
ラダンが声を荒くした。
性格もまたアチと同様に、かなり激しやすいようだ。
だが、それが思いもかけない結果を生じた。
サキよりも早く、擬態していたルフィアンが反応したのだ。
とたんに壁や天井や床、商品ケースや陳列棚までもが、歪んで捩れはじめた。まるですべてが蠟細工でできていて、熱に溶けだしたかのようだ。
「タイムアウトのようね。いいわ、答えはべつにあなたから聞く必要もないもの」

ラダンは冷たい笑みを残し、姿を消していった。
サキは辺り構わず、ガンソードを連射した。
もうルフィアンがどんな反応をするか、考えている余裕はない。
後ろから羽交い締めにされた。
ハッと振り向くと、仲間の少女だった。
一瞬、心に迷いが生じた。
少女の頬が裂け、耳まで開いた口で嚙みつこうとする。
体を傾け、わずかにできた隙間を利用してソードを振るった。
少女は、苦悶の表情を浮かべて、その場に倒れた。
本物ではないと頭でわかっていても、気分のよいものではない。
不快な思いを胸に収め、トリガーを引きながら、出口へ向かう。
足場がずぶずぶと泥濘のようになり、なかなか進めない。
しかし、じっとしていたら、底なし沼に引き込まれてしまうかのように、体が沈んでしまいそうだ。
しかも足を引き上げると、床から無数の触手が伸びて、サキの足首をつかむ。
ソードで切断し、辺りかまわず乱射を繰り返し、歩を進める。
ところがあと少しで出られるというとき、出口が消えた。

驚愕に動きを止めた。
だがちょっと考えれば、当然のことだ。
その部分は単に出入り口に擬態していた一部にすぎないのだ。
前方にできた蠢く壁を、ソードで滅多切りにした。
まるで液体を斬っているかのようだった。
斬っても斬っても、すぐに塞がってしまう。
壁や天井がどろどろとろけながら、収縮してきた。
まるで巨大な胃袋の中に飲み込まれてしまったかのようだ。暗くて淀んだ粘膜の壁が、サキを包み込む。
ルフィアンに消化されるのが早いか、息の根を止めるのが早いか——。
指先に力を込めて、トリガーを引きつづける。
(だめだ、やられる。母さん、助けて!)
心で叫んだとき、先ほど出入り口になっていた部分の向こうから、ぼんやりと明かりが透けて見えた。
サキはそちらに銃口を向け、集中的に発砲した。
膜状の壁に穴が開いた。
即座にソードに切り替え、斬り裂く。

破れた。外部が見える。
塞がりそうになる穴に頭からダイブし、外に転がり出た。
一回転して立ち上がるなり、振り向きざまに連射——。
巨大なルフィアンは、廃墟のように崩れ落ち、その動きを止めた。
すぐに辺りを見回した。
上空に装甲ヘリが、旋回していた。
その片方の窓から、ラダンが下を見やっている。
ラダンは建物から脱出したサキを見て、大げさな身振りで手を叩く。
すぐに装甲ヘリが上昇し、加速をつけて飛び去っていく。
ガンソードを向けたとき、すでにヘリは米粒のように小さくなっていた。
無人の街に一人残された。
ふと気がつくと、周囲の光景が陽炎のように揺れていた。
近くに乗り捨てられた車やバイクを見て、緊張を高めた。
タイヤが路面と一体化している。
まずい、と思った瞬間、タイヤを回転させず滑るようにして、すさまじい速度で車やバイクがサキ目掛けて突進してきた。
ルフィアンはスーパーマーケットに擬態していた一体だけではなかった。

浦和の繁華街全体が、ルフィアンの擬態によって形作られていたのだ。

迫る車やバイクに発砲をくりかえし、地面から伸びる触手をソードで薙ぐ。

泥沼のような悪夢の中で、あがいているかのようだった。

これまでのように、生物に擬態して襲いかかってこられるのと勝手が違いすぎて、動揺が激しい。

ラダンのせいだ。

どのような手段を用いたのかはわからないが、彼女がルフィアンを操り、このような不可解極まりない擬態を施させたに違いない。

あの若さで武装ボランティアを指揮し、ルフィアンさえ操ろうとする少女——ラダン。

さらに彼女は、サキの母親を水槽に入れて保管してあると言った。

常識では考えられない。

しかし彼女ならできるかもしれない。

母はいる。

生きているのかまではわからないけれど、アチがサキやテツオたちに血を与えて回復したように、ラダンが血を与えたならば母も元気になるかもしれないのだ。

サキの心に、わずかばかりではあったが光が射した。

異様極まりない街並みの中で、理性を失わずに対処できたのは、それがあったからかもしれない。

そうでなかったら、とっくに感覚が麻痺して隙ができ、ルフィアンの餌食になっていたことだろう。

(やはり母さんが、助けてくれたんだ)

戦いながらも、サキの脳裏を占めているのは、母親のことだった。

やがて——。

陽炎のごとく揺らめいていた街並みの動きが止まった。

街全体が焼き過ぎた肉片のように、炭化して干からびていく。

タンパク質の臭いが辺りに充満した。

辺りには焼け野原が一面に広がっている。

サキが駆けつける以前に、浦和の街並みは取り払われていたのだ。

そしてその代わりに、ルフィアンどもが擬態し、サキやそれに先行してやってきた救済グループの仲間たちを待ち受けていた。

まるで食虫植物が、獲物の虫を待っているかのように——。

おそらくラダンは、救済グループのメンバーが浦和に来ることを知っていて、このような手の込んだ企みを行ったに違いなかった。

アチさえも欺かれたことになる。

しかしいったい何のために。
ラダンは、武装ボランティアは――何を企んでいるのだ。
「アイラン……」
唐突に口走っていた。
なぜだかわからないが、アイランのことが無性に気にかかる。
女性のメンバー数人と、テツオだけを残してきた。
嫌な胸騒ぎがする。
一刻も早く戻ろう。
しかしここまで乗ってきたバイクは、どこかに埋もれてしまった。
郊外まで走り、新たなバイクを調達するしかない。
サキは戦闘の疲れも忘れ、焦土と化した浦和の街を走り出した。

❖

サキが姿を消した後、テツオはアイランと同じ部屋にいた。
ほかのメンバーたちは、階下に降りてしまっていた。
彼女たちがアイランを嫌っているのは、態度からすぐにわかった。
「テツオ、下に行きましょ。そんな非協力的な人は、放っておいて」

アイランの前で、そう言うメンバーさえいた。
ガンソードの整備をするから、と言ってテツオは二階に残ったのだった。
それは嘘ではなかった。
意識を失っている間に、ガンソードのパワーアップについて、改造のヒントが閃いたのだ。
それを実際に試してみたかった。
アイランと同じ部屋に、まだ改造を施していないガンソードを持ち込み、いろいろチェックする。
いろいろと話しかけてみた。
「アイランの家族は？　ボクはね、父さんと母さんと弟と、暮らしてたんだけど。皆死んじゃったんだ。とっても仲がよかったのに、三人ともボクだけを残して死んでしまった。ボクだけが、アチ様の血を受けて助かったんだ……」
テツオはさらに話をつづける。
「父さんは機械の技術者で、ボクと弟にいろいろ教えてくれたんだよ。今ボクがガンソードの改造ができるのも、父さんのおかげなんだ。ボクがいつもこうしてガンソードを改造しているのはね、もちろんルフィアンを倒すためだけど、こうしていると父さんのことを思い出せるからなんだ。ねえ、アイランは？　アイランのこと話してよ」
しかしアイランは答えなかった。

それでもまったく変化がなかったわけではない。
初めのうちは、険しい目でじっとテツオを見つめていたのだが、テツオが話をつづけるうちに視線を逸らしていた。
布団の上に足を組んで座り、じっと自分の爪先を見つめていた。
その姿から睨み返していたときの挑発的な趣は少しも感じられなかった。
むしろ、弱々しく今にも崩れそうな悲しさが漂っている。
その悲しさが、テツオの心の中にまでしみ入ってくるみたいだった。
「だいじょうぶだよ、アイラン。ボクたちはきっと友だちになれる。サキとアイランとボクは、三人とも何だか似ている気がするんだ。どこがどうっていうのは、よくわからないけれど、きっと仲よくなれる。ボクにはわかるんだ」
テツオは心弾む思いで、ガンソードのチューンアップを施した。
しばらくして、ふと顔を上げると、アイランが熱心にテツオの手先を見ていた。
瞳が輝いていた。
単に暇つぶしに見ているという雰囲気ではなかった。
明らかに興味を示している。
「ガンソードはね、もともとは警察の武器だったんだ。でもそれじゃあ弱すぎてルフィアンには利かないから……」

テツオが説明すると、アイランは熱心に聞いている。
「ちょっと貸して」
驚いたことにアイランが言った。
「う、うん、いいけど」
テツオがガンソードを差し出すと、アイランは待ちわびていたように手に取った。
見つめるまなざしや、その手つきから、彼女の興味が半端でないことがひしひしと伝わってくるほどだった。
「ここの回線を直結して、こっちに増幅器をプラスすれば、もっとパワーが増すんじゃない」
「えッ!?　どこどこ?」
テツオはアイランに近づいた。
アイランはガンソードの分解された内部を示しながら、もう一回説明した。
「本当だ。気がつかなかったよ。すごいや、アイランってメカに詳しいんだね」
テツオは胸を弾ませた。
冗談やお世辞ではなく事実だ。
アイランが指摘した通りに改造すれば、確実にパワーアップする。
言われればかんたんなことなのだが、言われるまでまったく気がつかなかった。
テツオが興奮して絶賛すると、視線が合ったアイランの頬が、いくぶん赤らんだ。

すぐにそれを隠すように顔を背けて言った。
「パソコンでネットに接続できれば、もっと情報が見つかると思うんだけど」
「パソコンならあると思うよ。ちょっと待ってて」
テツオはあわてて階段を駆け降りた。あまりに元気がよかったので、メンバーたちが驚いたほどだ。
「テツオ、だいじょうぶなの？」
「ありがとう、平気だよ。ねえ、それよりパソコンない？」
メンバーがさしだしたノートパソコンを受け取るなり、テツオは二階に戻った。
パソコンをアイランの前に置き、近くの電話線に接続する。
「これでつながると思うけど、やってみて」
アイランを促し、いっしょにディスプレイを覗き込んだ。
アイランは慣れた手つきで設定を変更し、わずか数分でネットにアクセスしていた。
検索を巧みに利用して、世界中の銃器やメカのページにアクセスする。
次々に情報を入手していった。
メカには自信があるテツオが見ていて、ついつい見とれてしまう鮮やかな手つきだった。
「すごいや、アイラン」
テツオが声を上げた。

「ねえ、テツオ」
アイランがぽつりとつぶやいた。
「何？」
「テツオは、父さんや母さんが好きだった？」
「もちろんさ。できることならもう一度、会いたいよ。弟にもね。アイランは違うの？」
「私は……」
アイランは口をつぐんだ。
するとと突然、テツオの言葉を真似る男の声がした。
「もう一度会いたいよ～ぉ、アイランは違うの～ぉぉ」
振り向くと、部屋の入り口に見知らぬ軍服の男が立っていた。
「誰だ？」
テツオが声を強張らせた。
「これは失礼。わたくしは武装ボランティアのメンバーでケビンと申します」
男はその場で足を揃え、敬礼した。
礼節をわきまえているというよりも、テツオたちをからかっているのが露骨にわかる。
「下に仲間がいたはずだけど」
「ハッ、たった今、全員無事退避させたところです」

「退避って、いったいどこへ……？」

「もちろん、一番安全な場所。すなわち天国へ、であります」

男は腰のベルトに差してあったアーミーナイフを抜いた。その刃には、べっとりと血糊がこびりついている。

「な、なんてことを――」

テツオは辺りを見回した。

すぐ脇に鉄パイプが落ちていた。

手を伸ばそうと屈むなり、ケビンが駆け寄る。

硬い靴先で腹を蹴り上げられ、テツオの体が、一メートル近く宙に舞った。

肩から床に落ちる。

痛みで呼吸ができなかった。

それでも懸命に顔を上げると、アイランが手にしたガンソードが、ケビンに奪われるところだった。

ケビンはガンソードを構え、その銃口をテツオに向けた。

「やめて」

アイランが声を上げた。

「アイラン……」

「なに友情ごっこしてんだよ。分解されたままで、これじゃ撃てないだろうが」

ケビンはトリガーを引いた。

しかし銃弾は、発射されなかった。

それはテツオもアイランも知ってはいるが、もしもの間違いがと考えると、銃口を向けられて平気ではいられない。

しかも相手は、仲間を刺殺したばかりの男なのだ。

「長居は無用だ。サキを知っているのか？　サキとかいうガキが帰って来たら、話がやっかいだからな」

テツオは訊ねた。

「ああ。本当はあのガキに用があって来た。しかしずいぶんと腕を上げてるってうわさだからな。会って面倒を起こすのも、俺の主義じゃない。だからアイランにご足労願おうと思って、わざわざ訊ねてきたってわけだ」

「アイランに？」

「俺の情報網はだてじゃねえ。ぜ〜んぶお見通しだ。アイラン・ジョ、十五歳。母親は空港で同胞に撲殺された。ちなみにもう一つ教えてやる。親父のほうも、空港へ駆けつける途中に俺の仲間が処理した。馬鹿な親父だぜ。武装ボランティアを金で買収なんかするから、最後には有り金すべて巻き上げられて、これだ」

ケビンはトリガーを引く真似をした。
「いやああッ」
アイランは両手を耳にあてて、うずくまった。
「ちくしょう」
立ち上がろうとしたテツオは、すぐに動きを止めた。
ケビンが突き出したナイフの先端が、喉に触れている。
「仲間のところへ行くか？」
尖った刃先が、テツオの喉に食い込む。
テツオが睨むと、ケビンはにやりと顔をほころばせた。
「おまえはメモ帳代わりに、生かしておいてやる」
ナイフをゆっくりと下げた。
テツオが着ていたシャツを裂く。
露出したテツオの胸に、ナイフの先で文字を刻みだした。
「やめて……」
アイランが声を震わせた。
その瞳が弱々しく震えていた。
「じっとしてろ。動いたり、変な真似をしたら、すぐこのガキは殺す」

ケビンはアイランを威嚇し、ナイフを動かしつづける。
スッと切れたところからじんわりと血がにじみ、滴り落ちていく。
拳を握りしめ、唇を噛みしめて、テツオは耐えた。
動いたら自分が殺されるだけでなく、アイランまでどんな目にあわされるかわからない。
「これでいい。いいか、サキ・アマミヤが戻ったら、ここにアクセスしろと伝えろ」
ケビンはそう言うなり、片足を振り上げ、靴底でテツオの頭を蹴った。
尻餅をつくかっこうで、床に仰向けに転がる。
痛みをこらえてすぐに顔を上げたとき、ケビンはアイランを軽々と片腕で抱え上げ、彼女の首筋にナイフを当てていた。
「アイランを、どうする気だ？」
「うるせえんだ。このケビン・ザ・リッパー様に会って、殺されなかっただけでも、幸せだと思え」
ケビンの靴底で思いきり腹を踏みつけられ、テツオはその場にうずくまった。
痛みに意識が遠のく。
懸命に瞼を開いた。
涙ににじんだ視界の向こうで、アイランが連れ去られていく光景が見えた。

❖

浦和から舞い戻ったサキを迎えたのは、仲間たちの遺体だった。
（アイラン……テツオ！）
階上に駆け上がる。
アイランのいた部屋に、彼女の姿はなかった。
床にテツオが倒れている。
駆け寄り、抱き起こした。
シャツの胸が切られ、血だらけだったが、息はある。
「テツオ、しっかりするんだ」
呼びかけながら体を揺すると、テツオは意識を取り戻した。
「サキ、アイランが――」
「落ち着け。まず傷の手当てだ」
サキはアイランが寝床として使っていたマットレスにテツオを寝かせる。
（落ち着け、落ち着け。まずテツオの傷の手当てだ）
テツオに言ったセリフを自分にも言い聞かせながら、奥の部屋から救急箱を持ってくる。
消毒液をつけた布きれでテツオの胸の傷を拭った。

「どうしたんだ、これは？」
血を拭ったテツオの胸に現れたのは、刃物で付けられた文字だった。どうやらネットのホームページのアドレスらしい。
「アイランを奪っていった男がつけたんだ。サキが戻ったら、ここにアクセスしろって」
テツオが、顔をしかめながら言った。
「しかし、どうしてテツオの胸に……」
「ボクはメモ帳として生かしておくって言ってた」
「何だって。いったい誰がこんなことを？」
サキはこみ上げる怒りを押し殺しながら訊いた。
「武装ボランティアの一員で、ケビンっていう大柄な白人男だ」
「ケビンだって？　ケビン・ザ・リッパーがどうしてここへ？」
「アイランを誘拐するためさ。奴はサキが留守だってことも知ってた。その間を狙って、やってきたんだ」
「なぜアイランを……」
「とにかく、この傷を何かに書き写して」
テツオが痛みをこらえながら言った。
サキは近くにあったノートに、アドレスをメモする。

書きながらも、わざわざナイフでテツオの胸に刻みつけたケビンの異常性に、やり場のない思いが募ってきた。

自分がここにいれば、仲間たちも殺されず、テツオもこんな目にあわずにすんだだろう。

しかもアイランが、連れ去られることもなかったのに――。

メモを終え、テツオの傷の手当てをした。

サキの頭の中では、さまざまな思いがぐるぐると渦を巻いていた。

どこからどこまでが、仕組まれた罠だったのだろうか。

浦和に行け、とサキに言ったのは、アチだった。

しかもそれは完全な敵――ラダンの誘いだったのだ。

ということは、ラダンはアチさえも惑わせたということになる。

ラダンというあの少女と、ケビンの巧みな連携プレイだ。

しかもラダンは、日本を混乱に陥れたルフィアンを手なずけようとしている。

いったい何のために？

武装ボランティアの目的は、日本の治安維持などではなく、ルフィアンを自分らの配下にすることなのではないか。

前にアチから武装ボランティアの背後にあるのは、アメリカの巨大武器メーカーG&R社だと聞いたことがある。

だとしたらG&R社は、ルフィアンを自社の兵器にできたらと目論んでいることが十分に考えられる。

しかし、それよりも気になるのは、もっと身近な問題だった。

まずアチとラダンが似ている点については、まったくの偶然なのだろうか？

そして何より気になるのは、母親のことである。

ケビンはサキの母を気に入り、母を連れていったようだ。

生きているとは言わなかったものの、死んでしまったとも言わなかった……。

わざとサキを混乱させようとしているかのような答えだった。

考えれば考えるほど、訳がわからなくなってくる。

どこまでが罠なのか。

どこまでが本当のことなのか。

「ねえサキ。早くアクセスしてみようよ」

テツオが言った。

「テツオ、傷の具合は……？」

「平気だ。それよりもアイランのことが気になるよ。ねえ」

「わかった」

テツオに促されて、サキはノートパソコンに向かった。

ケビンが残したアドレスにアクセスする。
しかしそのページを見るには、パスワードが必要となっていた。
「何か思い当たる言葉はない？　ケビンって奴、サキだけに見せるために、サキだけにわかる言葉をパスワードにしているはずだよ」
テツオに言われて、すぐにある言葉がピンと浮かぶ。
サキはその言葉を入力した。
――CHIZURU――
〈ピンポ～ン、正解だ〉
にやけた男の声が響いた。
ケビンの声だった。
画面いっぱいに見覚えのあるケビンの顔が映し出された。
三頭身のケビンが、ナイフを振り回している。
ナイフが画面を切り裂き、真っ赤に染まった。
やがて赤い画面に、どす黒い文字が浮かび上がってきた。
ようこそ、サキ・アマミヤ。
おまえと世間話している暇も、またする気もねえ。

用件を話そう。
アイラン・ジョと引き換えるのは、お前の血だ。
何に使うか？
それは、ヒ・ミ・ツ。
といっても、ラダンって小生意気な女から聞いて、うすうす勘づいているだろうが。
ま、おまえにとっても悪い話じゃねえってことだ。
明日正午、赤羽駅北口のロータリーへ来い。
読んでいる端から画面全体が、ブロック崩しのように崩壊しはじめた。
「ウイルスだ」
テツオが叫ぶと同時に、パソコン画面がクラッシュした。

❖

ウイルスに侵され、起動しなくなったパソコンを前にして、サキは考え込んでいた。
すべての情報が、ケビンやラダンたちに流れている。
サキがアイランに好感を持っていることは、仲間うちしか知らないことだ。
たしかに今、サキを動揺させるには、アイランを拉致するのが最も得策だろう。

しかしそれは、サキの生活を監視していなければ、わからないはずだ。
しかもサキが出かけて留守のタイミングさえ、しっかりと伝わっていたことになる。
ここまで筒抜けになっているとなると、考えられるのは、仲間の中に武装ボランティアのスパイがいて、報告していたということだ。
いや、それはあり得ない。
なぜなら、サキとこれまで行動をともにしてきた仲間は、一階で遺体となっている。
待てよ。
スパイとして利用した者を、やっかい払いに処刑したのかもしれない。
奴らならやりかねないことだ。
「ねえ、サキ。どうするの？」
テツオが訊ねた。
突然だったので、サキは驚いてテツオを見た。
「テツオ……」
ぽつりと口から言葉が出た。
「どうしたの、いきなり。顔に何かついてる？」
テツオはどぎまぎした様子で言った。
「いや、なんでもない」

サキは顔を背けた。
忸怩たる思いがこみ上げてきた。
瞬間的にせよ、テツオを疑うなんて……。
そもそもテツオは、ずっと意識を失っていたのだ。
もしもテツオがスパイだったとしても、相手に報告しようがないのだ。
いや、やはりそれ以上に、テツオのことを疑っている自分が、サキにはたまらなかった。
これまで散々見てきて、吐き気がするほど嫌悪した光景。
それは人々が疑い合い、勝手に憎しみ合い、やがて苛立ちをぶつけ合うようにして、喧嘩する光景だった。
ルフィアンが現れてから、そんな状況を数多く見てきた。しかし今の自分は、嫌悪した人々と同じだ。
何の証拠もないのに、テツオを疑っている。
天涯孤独となったサキのことを慕い、打ち解けてくれたただ一人の少年を疑っているのだ。
（最低だ。最低なのは俺自身だ）
「ボクもいっしょに行くよ。アイランはボクの友だちだし、サキ一人で行かせられないよ」
テツオが言った。
その言葉が、鋭くサキの心に突き刺さる。

立ち上がり、テツオに背中を向けた。
とてもテツオに顔向けできる心境ではない。
「どうかしたの？」
「い、いや……みんなを埋めようと思って」
とっさに、そうつぶやき、サキは歩きだした。
「ボクも手伝うよ」
すぐにテツオが、サキに並ぶ。
「ねえ、サキ。笑わないで聞いてくれる？」
「どうしたんだ、急に？」
「笑わないって、約束して」
「わかった、笑わない」
「ルフィアンって、もしかしたら、神様が創り出したんじゃないか、なんて思うんだ」
テツオがぽつりと言った。
「神様が創っただって」
階段を下りる手前で、サキは足を止めた。
神がルフィアンを創り出した――。
想像さえしたことがない言葉だった。

「どうして、そんな風に思うんだ？」
サキが訊ねた。
テツオは階段の手すりにもたれ、考え込むような顔つきで答える。
「人間って、どうも思い上がり過ぎたんじゃないかって思うんだ。だって今年になったばかりの頃、こんなことになると思っていた？　全然思ってなかったでしょ。確かに世界的な人口増加で、食料危機は叫ばれていたけれど、きっとどうにかなるって思ってたでしょ？」
サキはうなずいた。
テツオの言う通りだった。
いやテツオやサキに限らず、ほとんどの人がそう思っていたはずだ。
サキが生まれて生きてきた十四年の間、ほかにもいろいろな危機を叫ぶ声は、数限りなくあった。
一九九九年、世界は滅びる。
二〇〇〇年になったら、世界中のコンピュータが混乱を来す。
関東に大地震が来る。
石油がなくなる。
惑星が地球に衝突し、世界は滅亡する――。
もちろんその中でも、いくつかは現実になった出来事がある。

昨年末にはインドとパキスタンの間で核戦争が勃発した。

しかしそれさえも、どこか遠くの出来事だったし、あのとき日本人の間では、マスコミにこそ流れなかったものの、こんな意見さえも存在した。

――世界の人口が増えすぎているから、ちょうどよかったのだ。

また日本国内では、食料危機に対して楽観的な意見が多かったのも事実だった。

その根拠とされたのが、食用生態系だ。

去年、テレビを通して日本政府が行った食用生態系のキャンペーンコマーシャルは、今でもサキの記憶にくっきりと残っている。

ときの首相は、テレビを通じ、明るい表情で国民たちに訴えたのだった。

〈二十一世紀を迎え、人類は有史以来の繁栄の時を迎えております。

だが急激な人口増加に伴う、食料不足は深刻な問題となりました。

ところが、それはもはや、過去の悩みとして忘れ去られる時代が来たのです。

我々は新たな食用源を手に入れることに成功しました。

それがこの食用生態系なのです。

この食用生態系は、どんな異常な環境下においても繁殖可能なまったく新しい生物なのです。

その安全性も、また味も保証済みです。

現在、北海道の巨大牧場にて食用生態系は、すくすくと成長しており、もうすぐ国民の皆さんのご家庭の食卓を飾ることでしょう〉

時を同じくして、食用生態系の料理方法を紹介する番組、雑誌がちまたにあふれた。

サキが通っていた中学の教師も、興奮気味に話していたものだ。

〈神は人類に、英知という最高の贈り物をくださった。それがある限り、人類はますます繁栄する！〉

そういえばすでに数カ月前――。

首相は暴徒によって殺害されたという。

あの教師もサキが母親と水戸を出るときには、すでに生徒の親に撲殺されていた。

だからといって、彼らが悪かったわけではない。

首相はまだしも、教師が殺されたのは、サキから見ても八つ当たりだった。

しかし裏切られたと、誰かに当たったり、誰かのせいにしないとやりきれないほど、状況はがらりと変わってしまったのだった。

その気持ちは、サキにもよくわかった。
けれども母は、一切誰にも当たらなかった。
ただ前向きに生きようとした。
愚痴をこぼすこともなく、懸命に生きようとした。
最愛の人であると同時に尊敬できる人物であったと、改めて思う。
「テツオの言う通りかもしれないな」
サキはぽつりと言った。
言葉にしたとたん、それが一つの真理であるように思えてきた。
自分がこの世界の主になったかのように、人類はやりたい放題に勝手なことをくりかえしてきた。
知らず知らずのうちに、人間はあまたの罪を犯してきた。
しかし二十一世紀になって、ついに神の逆鱗に触れて罰を受けている。それが今の惨事の原因なのかもしれない。
「おかしいな、ボク。この間まで、ちっともこんなこと、考えたこともなかったのに。……あれ？」
「どうした、テツオ？」
「胸の傷が治ってる」

サキがテツオの胸を見ると、傷がまったく消えていた。
「アチ様の血を受けたからかな。傷がこんなに早く治ったのも。ボクが神様のことなんて考えたのも……」
サキは答えられなかった。
テツオが感じたように、サキも以前は、神様が……などと考えたことはなかった。
むしろ、そんなことを言われたら、反発したに決まっている。
それなのに、テツオが言った言葉にも、すんなりと納得できる気がする。
「サ……サキ」
テツオが声を震わせて、サキにすがりついてきた。
何事かと顔を上げると、殺された仲間たちが、階段を上がってきていた。
皆、虚ろな顔つきで、血まみれの姿のままだった。
「テツオ、見るな」
「で、でも」
「見るな」
サキが叫ぶと、テツオは固く目を閉じてうつむいた。
いくら仲間に似せた擬態だとわかっていても、始末するところをテツオに見せたくはない。
サキはガンソードを構え、的確にトリガーを引いた。

全員を撃ち終えてから、テツオの肩にそっと手をおいた。
できることならば、そのままテツオと二人で、しばしの休息を取り、仲間たちの冥福を祈りたい気持ちだった。
だが状況は、そんなわずかな安らぎさえ許してくれない。
血だらけの仲間が、ぞくぞくと階段を上がってくる。
これは人間が犯した罪に対する神からの罰。
それなら人間が素直に受け入れない限り、この罰はつづくというのか。
「テツオ、武器はあるか?」
「ガンソードが奥に」
「すぐに取ってこい。急ぐんだ」
サキの言葉にテツオは、さっきまでいた部屋に駆け戻った。
上がってくるルフィアンたちの動きが、どんどん速くなっている。
死んだ仲間たちに擬態こそしているものの、すさまじい速さで駆け上がってきたり、数メートル跳躍して襲いかかってくる奴もいた。
テツオの悲鳴が響いてきた。
ガンソードを連射しながら、後退する。
先ほどの部屋まで戻ると、全長一メートルを超える巨大な蛾の集団が、テツオを取り囲んでいた。

駆け寄りざまに、ソードでそれらの胴体を切断する。
「ガンソードがチューンナップ途中だったから、組み立ててたら、窓からこの連中が」
「このビルはルフィアンに囲まれてる。戦えるか?」
「もうちょっとで、直るんだけど」
「早くしろ」
テツオを背後にして、入り口から入ってくる仲間たちの額を、窓から飛び込む巨大蛾の腹部中央を撃つ。
「直った」
テツオが声をあげるなり、サキの背後からすさまじい勢いで、弾丸が発射された。
弾丸は迫っていた巨大蛾の急所を外れたが、桁違いの威力に、一撃で巨大蛾の体が飛び散った。
「すげえ」
撃った本人のテツオが、驚きの声を上げた。
「いったいどうしたんだ?」
「アイランがチューンナップしてくれたんだ。ネットとかで情報を集めて」
「アイランが」

そう言えばサキがガンソードの手入れをしているとき、アイランはじっとサキの手先を見ていたことが幾度となくある。
ただ退屈しのぎに見ているだけだと思っていたのだが、冷静に観察していたのかもしれない。
しかも彼女には、テツオをしのぐほどの隠された能力があるということか。
「サキ、試してみて」
テツオとガンソードを交換し、即座に撃つ。
距離三メートルを切って迫っていた巨大蛾が、一撃で木っ端みじんとなり、体液が降りかかってきた。
テツオがチューンナップしたものより、二倍、いや三倍は確実にパワーアップしていた。
「テツオ、隅でじっとしてろ」
「やだ、サキといっしょにいるよ」
「しかし――」
「もう離れたくないんだ」
テツオの言葉に悲痛なものが混じった。
空港での一件が、サキの頭を過る。
「わかった。背後の援護をたのむ」
「うん！」

窓から巨大蛾の進入が途切れたのを機に、部屋を出た。
階段を降り、一階で迎え撃つ。
新たにムカデやゴキブリ、鼠の巨大化した姿で襲いかかってくる。
おかげで躊躇なく、トリガーを引けた。
「ちくしょう！」
テツオは仲間に擬態し、仲間の遺体にすがりついていたルフィアンたちを完膚無きまでにソードで切り裂いた。
襲撃が止んだとき、ゆうに十分を超えていた。

◈

「どういうつもり、勝手な行動をとって」
ラダンの声が司令室に響いた。
ケビンはうるさそうに顔を歪めて聞き流している。
司令室の床には、手足を縛られた少女が倒れていた。
アイランだった。
薬でも盛られたのか、瞼を閉じ、ぐったりしている。
「本来なら、規則違反で、とっくに処罰されているところよ」

ラダンはさらに語調を強めた。

「ほう、それを言うなら、お互いさまじゃないのか。知ってるんだぜ、あんたが勝手にルフィアンを手なずけようとしてることは」

「そ、それは、研究のために……」

「いや、そんなことはアメリカ本部からは、一言も命令されていない」

「あなたなんかに、何がわかるっていうの」

「見くびるんじゃねえ。俺は生粋のアメリカ育ちだ。どこかの誰かさんのように、アジア大陸の山奥から出てきた田舎者とは訳が違う。こう見えても、得意なのはナイフの扱い方だけじゃねえ。ガキの頃からパソコンを玩具にしてた。俺の初めての罪を知ってるか？」

「十七歳のとき、ハイスクールの同級生の女生徒を襲って――」

「さすがによく調べてある。しかし、ブーッ。外れだ。十一のとき、ハッカーで捕まり、生涯コンピュータに近づくなと言い渡された」

「そんな記録は残っていないわ」

「そうさ、俺が消したんだ。邪魔なものは消すのが、俺の主義だからな」

ケビンは顔をいやらしくほころばせ、さらに言葉をつづける。

「ラダン司令官殿がほかにも、アメリカ本部から命令もされていないことを勝手にいろいろやってるのは、すべて調査済みだ。そろそろやめたほうがいいですよ。パソコンにプライベートな記述を入力しておくのは」

ラダンは、表情を強張らせた。

「まさか、盗み見……。いいえ、ちゃんと保護してあるから、あなたなんかに見られるわけがないわ」

「それがアジアの田舎娘の困ったところだ。俺みたいなハッカーから見れば、自分から秘密を暴露しているのと同じだ」

「ふん。はったりよ」

「――『ブラッドはカチュアに騙されているのよ。わたしのほうが能力も、そして女としてもずっと優れているというのに、なぜ』――」

「やめなさい！」

ラダンは顔を赤く上気させた。

「これでわかっただろう。立場はフィフティフィフティどころか、俺のほうが上だってことが」

「それで、これからどうする気？」

「この女を餌に、チヅル・アマミヤの倅のサキ・アマミヤを呼び出す。そして奴の血をチヅルに与え、チヅルを蘇らせる」

「そんなに都合よくいくかしら」

ラダンは鼻で笑った。

投げられたボールをキャッチするように、ケビンも微笑んだ。
「サキ・アマミヤは、アチと名乗る聖女きどりの女から血を受けて、蘇った。しかもチヅルの実の息子だ。チヅルが〈人間〉として生き返るには、もってこいだと思うんだがな。これがあんたやアチとやらだと〈血〉が強すぎて、生き返ったとしても〈人間〉に戻れるかわからねえからな」
「どういうこと!?」
ラダンの顔が、硬質な宝石のごとく強張った。
対照的にケビンは、笑顔をとろけさせる。
「ま、俺も武装ボランティアの一員として、日本に来たわけだし、あまりラダン司令官殿のご機嫌を損ねて、送還でもされたら、また臭い飯を食らう生活だからな。お互い、持ちつ持たれつ、やっていきませんか、ラダン司令官殿?」
ラダンは端正な顔を極限まで怒りに引きつらせて、ケビンを睨んだ。
しかし数秒後――。
ぷつっと緊張の糸が切れたかのように、フッと笑みを浮かべる。
「わかったわ。しばらく泳がせてあげる」
「泳がせる?」
「わたしが尊敬していた指導者が、教えてくれたことがあるの。『雑魚はめくじら立てずに泳がせておけ』って」

「なんだと――!」
「せいぜい泳ぎなさい。あなたがいるのが、狭い金魚鉢の中だって気がつくまで」
ラダンは悠然とした足どりで、司令室を出ていった。
「くそッ、ますますいい気になりやがって!」
ケビンは視覚でにわかにとらえられない速さで腰のナイフを抜き、瞬時に放った。
大型のアーミーナイフが、ラダンの閉めた扉に深々と突き刺さった。
険しい表情で、ナイフを見つめる。
アーミージャケットのポケットから、発信音がした。
手を入れて取り出したのは、小型の盗聴器だった。
何か音声をキャッチしたらしい。
ボリュームを上げると、話し声が響いてきた。
〈ねえ、サキ。明日はボクがこっそり背後から忍び寄って、ケビンがサキと戦っている間に、アイランを助け出すよ〉
〈テツオ、しかし……〉
〈心配しないで。実はボク、何だかすごく気持ちも心も軽く感じるんだ。怪我をして、返って元気になったみたい。これもアチ様の血を受けたからかな?〉

〈さあ、俺はわからないけど〉
〈だから、サキは心配しないで、あのケビンをやっつけて。ボク、あいつ大嫌いだ〉
「俺もお前が大嫌いだ、クソガキ」
ケビンは盗聴器をポケットにしまった。
「明日だ。明日になれば、すべてが変わる。俺が変えてやる」
ナイフを睨みながら、ケビンはうめくようにつぶやいた。
明日、おびき出したサキ・アマミヤの血で、愛しいチヅルを生き返らせたら、すぐにジェットに乗って、チヅルと二人で、南の島にでもとんずらだ。
そのあとはアメリカ本部と直接交渉だ。
俺が集めた情報——ラダンの不正、ラダンが調べたルフィアンの資料を流す代わりに、司法取引で俺は自由の身に。
そして——。
ケビンはチヅルの入った水槽に近づいた。
チヅルを見上げるうちに、厳しかった表情が、あどけない子どものようになった。
「ああ、チヅル……。俺がこれほどまで恋をするとは、俺自身も信じられない。だがチヅル、本当だ、信じてくれ。俺はお前を愛している。一目見たときから、俺はお前の虜だ。ああチヅル。待っていてくれ、明日、お前の過去の過ち——サキから血を搾り取ったら、それで生き返らせてやる。そうしたら二人でずっと暮らすんだ。誰にも邪魔されずに、ずっとずっとずっと」
つぶやいているうちに感極まってきた様子だった。
ケビンは大粒の涙をぽろぽろと流しながら、水槽にしがみつく。

❖

（盗聴器が仕掛けてあった）
失神したふりをしながら成り行きをうかがっていたアイランは、水槽にすがりつくケビンの後ろ姿をうかがいながら思った。
薬を嗅がされて意識を失ったのは事実だったが、アイランはほどなく意識をとり戻していた。ルフィアンの騒動が起きてからなかなか眠れずに、こっそりと両親の部屋から盗み出した睡眠薬を常用していたため、薬の効き目が薄かったらしい。
そのおかげというのも変な話だが、ケビンたちの会話をこっそり聞くことができた。
どこかに盗聴器が仕掛けられている。
建物のどこかに、隠されているのではないだろう。
それだったら場所を移動したら、役に立たない。
そうなると考えられるのは、サキかテツオのどちらかの体に、隠されているということになるが……。

（テツオだ）

いつ、どうやって取り付けたのかまではわからないが、テツオの体のどこかに盗聴器が仕掛けられているのだ。

（そうか、だからテツオだけ殺さなかったんだ。サキとのやりとりを聞き出すために……。テツオ、話しちゃダメ。サキとあなたが危なくなるのよ）

祈るように思うものの、それを伝える術はない。

じりじりと歯がゆい思いがこみ上げてきて、失神したふりをつづけるのがつらいほどだった。

そのとき、アイランは不思議な感慨に囚われた。

これまで他人のことなど無関心なほうだったし、今回の騒動が起こってから、いっそう人嫌いになっていた。

そんな自分が、他人のことを本気になって心配している。

空港でのショッキングな事件以来、アイランは自分の中に閉じこもった。

それしか方法がなかった。

ケビンが言っていた。父も殺されたと――。

嘘ではないだろう。

金で雇った武装ボランティアが〈用心棒〉をしていたから、何とか無事でいられたのだ。

金がなくなり、雇った〈用心棒〉がいなくなってしまったら、人々の理不尽な怒りによって、

攻撃されたとしても無理のないことだ。

何でも金で解決する父だった。

プライドばかり高く、いつも小言ばかり言っている母だった。

アイランは二人とも大嫌いだった。

別の両親から生まれたかったと、何度思ったか知れない。

けれども、今思えば父も母も、アイランのことを愛してくれていたのだ。

父や母なりのやり方で、最後までアイランを守ろうとしてくれ、そして死んでいった。

それなのにアイランは、最後まで素直になれなかった。

最後まで反抗しつづけてしまった。

涙がこみ上げくる。唇を噛みしめて、懸命に嗚咽をこらえた。

自分がもっと素直だったら、もっと楽しかったかもしれない。

酔った父がアイランのために買ってきた高級料理を、食べたくないと、ごみ箱に投げ捨てたこともあった。

さんざん周囲に自慢して母が買ってくれたオートクチュールのコートを、道端の泥濘に投げ捨てたこともあった。

すべてが嫌だった。もっとふつうにしてほしかった。

だからいつも両親の前では、不機嫌な顔をしていた。

やさしくされると、却って反抗的な態度に出て、困らせたり怒らせたりしてばかりだった。
なんて嫌な子だったんだろう、私って。
友だちだってできるわけがない。
いつも自分と他人との間に垣根を作っていた。
嫌われても当然。友だちなんてできなくて当然……。
今回の騒動があって、友達だと思っていた子から非難され、よけい垣根が高くなった。
そうするしかなかった。特に空港でサキに助けられてからは、そうやって自分の垣根の中にいなければ、自分が壊れてしまいそうだったのだ。
やさしく話しかけてくれた救済グループの女の子たちにも、一切口を聞かなかった。
どうせやさしさなんて見せ掛けだけ、本心では私のことを嫌っているくせに。
だから彼女たちの対応が冷たくなったとき、すこしも自分が悪いなんて思わなかった。
逆に心の中で、彼女たちのことを嘲笑ったくらいだ。
(やっぱり見せ掛けのやさしさだったじゃない。思った通り)
しかし彼女たちも、死んでしまった。
ケビンに殺されたらしい。
彼女たちは救済グループに入るまで、どんな生活をしていたのだろうか。
家族は?

友だちは?
どちらかがいたなら、いっしょに逃げていたはずだ。
何らかの理由で、どちらも失い、救済グループに入るしか生き残る道がなくて、加わったに違いない。
どれだけつらい気持ちだっただろう。どんなに淋しかっただろう。
それなのに、それを隠して、やさしくしてくれた。
けれども、そのやさしさを自分は拒否したのだ。
冷たくされて当然だ。嫌われて当たり前だった。
そんな中で、なぜサキは、やさしくしつづけてくれたんだろうか?
アイランが素っ気なくしても、無視しても、睨みかえしても、サキは面倒を見てくれた。
いっしょにいてわかった。人に言われてやっているのでもなく、いやいややっているわけでもない。自分の意思で面倒を見てくれていた。
こんな風に他人に接せられたのは、これまで生きてきて記憶にないことだった。
サキだけではない。
わずかな接触しかできなかったけれど、テツオもサキと同じように接してくれた。
テツオがアイランを見るときの目は、無防備なほど澄みきっていて、心の奥まで見えてしまいそうなほどだった。

だからアイランも、知らず知らずのうちに、二人と交流を持とうと思ったのかもしれない。
サキが出してくれた食事をいっしょにとりたいと思った。
テツオがガンソードを改造していたとき、手伝ってみたいと思った。
高いところから低いところに水が流れ落ちるように、ごく自然にそう思ったのだった。
こんな嫌な子、嫌われ者に、やさしくしてくれた二人。
その二人が明日、ケビンのような狂人と戦う。
なぜ？
何のために？
（来なければいい。私なんか、どうなったってかまわない）
しかしアイランは、確信していた。
二人は来る。きっと来てくれる。
自分を救い出すために――。
（どうして私なんかのために。こんな嫌われっ子のために。なぜなの？　どうして……）
アイランの心は、嵐に翻弄される小舟のように揺れ動いていた。

第三章　罪と罰

二〇〇七年、五月三十日――。
東京と埼玉の境に位置する町として、賑わいを見せた赤羽の街も、すでに人影はない。
JR赤羽駅北口のロータリーには、初夏の日差しがじりじりと照りつけている。
サキがここに着いたのは、正午まで後十分を残す時刻だった。
駅の構内から、北口の様子をうかがった。
ロータリー付近は高い建物もなく見晴らしがきく。
もしこのまま出ていって、どこかから狙撃されたら、それまでだ。
離れた場所からの狙撃なら、身をかわす自信はある。
しかし相手は、どんな手段で出てくるかしれたものではない。
すでにロータリーには多量の爆薬が隠されていて、サキの姿が見えたとたんにスイッチが押されるかもしれない。
血がほしいと言っている以上、そこまでめちゃくちゃはやらないと思うものの、相手は狂人ケビン・ザ・リッパーだ。

常識では判断しないほうがいい。
寸前までいっしょに来たテツオは、今頃建物の陰を回り込んで、どこかに身を潜めているはずだ。
もう二度とテツオを、危険な目にさらしたくない。
空港の一件でこりごりだ。
よっぽど一人で来ようと思ったのだが、指定された時間も場所も、テツオは知っているため、撒くこともできなかった。
テツオと、そしてアイランが関係するだけに、迂闊な行動は取れない。
どうすればいいか、判断に迷っているときだった。
風に乗って車の爆音が近づいてきた。
すぐに一台の軍用ジープが姿を現し、北口ロータリーに停車した。
運転しているのはケビンだ。
助手席には、アイランの姿があった。
アイランは後ろ手に縛られているものの、意識はあるようだ。
「おぉい、サキ・アマミヤ。駆け引きは抜きにして、早いところ終わらせようぜ」
ケビンの声が、辺りに響いた。
サキは神経を澄ませて、様子をうかがった。

ケビンのジープ以外に近づいてくる物音はなかった。
「早くしてくれよ。いるのはわかってるんだからよぉ」
ケビンはあくび混じりに言った。
サキは、右手に持ったガンソードの銃口を下げ、ゆっくりと歩き出した。
「そこにいたのか。早く来い」
ケビンはサキの姿を見つけるなり、空のポリタンクを放った。
「それに血を入れろ」
ポリタンクの手前で、サキは足を止めた。
ケビンの乗るジープまでは、十メートルほどの距離だ。
助手席のアイランに目を向けた。
アイランは瞳を見開き、サキを見つめている。
何か訴えるような目つきだった。
だからといって問いかけるわけにはいかない。
ケビンが寄り添い、彼女の首筋にナイフを押しつけている。
どうするべきか――。
とっさに判断がつかなかった。
ケビンが約束を守る保証はない。

かといって、このままではアイランがやられる。
「おいおい、ぐずぐずしてんじゃねえ。お前だって、その血を何に使うか、わかってるんだろうが」
「母さん……！」
「そうだよ。チヅルは今、生死の間をさまよっている状態だ。しかしお前の血を与えれば、助かるかもしれねえ。本来なら、俺がこんなことを言わなくても、黙って差し出すのが、スジってもんじゃないのか。え？　義理人情を重んじるのが、日本人の美徳じゃなかったのか？」
サキが血を差し出せば、母親の命が助かるかもしれない。
あり得ないことではない。
あのとき、犬の群れに擬態したルフィアンに襲われたとき、サキだけが助かったのは、アチの血を受けたからだ。
そのアチの血を受けた自分が血を与えれば、母親も息を吹き返すかもしれない。
それにアイランの命も……。
「わかった」
手にしたガンソードのソードを伸ばすなり、自らの左手首に傷をつけた。
その場に屈みこんでガンソードを脇に置くと、ポリ容器の口に手首を近づけ、血を流しこむ。
鮮血がどんどんタンクにたまっていく。

くらくらと目眩がした。
頭の中に霧が立ち込めてきたかのようだ。
母親が助かるなら、アイランが助かるなら……。
そう思いながらも、魂が体から分離して、このまま別の世界へ誘われていくかのような感覚に襲われる。
「何をしているの！」
張りのある声が響き、サキは現実に連れ戻された。
顔を上げると、赤羽駅の駅舎の中から、ゆっくりとアチが姿を現した。
アチはサキのところまで歩み寄るなり、いきなりサキの頬を張った。
サキはふらつき、その場に尻餅をつく。
「私に断りもなく、馬鹿な真似はやめなさい」
アチは膝を曲げて屈み、サキの左手を取って、出血している手首に唇を当てた。
アチが唇を離したとき、出血は止まっていた。
「どうやら、親玉の登場らしいな」
ケビンが囃し立てるように言った。
「あなたの企みは、わかったわ」
アチはケビンに向かって言った。

「わかった？　ほほぉう、手首にキスしただけで見通せるとは、さすが聖女様だけのことはあるな」
「武装ボランティアの恥部、いいえ、あなたのような輩が武装ボランティアそのものといったほうがいいかもしれないわね」
「かわいい顔して、言うな。ラダンといい、おまえといい、以前のケビン・ザ・リッパー様だったら、すぐにでも肉屋の店先に並べられるくらいに刻んでやってたところだ。しかしチヅルと出会って、俺は変わった。安心しな。もうケビン・ザ・リッパーは廃業した。これからの俺は、そう、ケビン・アマミヤだ」
　その言葉を聞いたとたん、サキの中に激しい怒りが芽生えた。
　ガンソードに手を伸ばす。
「おっと、勝手な真似はやめるんだな」
　ケビンのナイフが、アイランの喉に食い込んだ。
　だがその瞬間、アイランが叫んだ。
「サキ、私にかまわないで。撃って！」
「なにぃ」
　さすがにケビンも、驚いたらしい。
「サキ、撃って！」

　アチが叫んだ。
「しかし……」
「うわあああ——ッ！」
　ケビンの背後の建物から、テツオが飛び出してきた。
「おっと小僧。そこにいるのは、お見通しだ」
　ケビンは手にしたナイフを、テツオに向かって放る。
　すさまじいスピードで、テツオの胸に迫る。
　しかしテツオは、ナイフを両手でキャッチした。
「大の大人でもかわした奴がいねえ、俺様のナイフを」
　信じられないという顔つきで、ケビンが言った。
　そのわずかな隙を、サキは逃さなかった。
　ケビンに向けて連射する。
　だが、ケビンは巨体を屈め、ジープの車体に身を隠す。
　そのわずかな隙を逃さずに、助手席のアイランが跳躍した。
「サキ、縄を——」
　縄を撃って——アイランの心づもりが、瞬時に理解できた。
　わずかゼロコンマ数秒という刹那。

身を屈めたケビンよりも速く、疾走しながら狙いを定めて、太さ一センチほどの縄に狙いをつけて、トリガーを絞る。
狙ったのはアイランの縄だ。
わずかな誤差も許されない。
左に逸れれば縄は切れず、若干でも右に逸れればアイランに当たる。
時間的にも、標的としても、走りながら針の穴に糸を通すより困難な作業を、サキは成功させた。
これまでの経験がプラスしたのはいうまでもないが、それだけでこなせる技ではなかった。
弾けたサキの熱い気持ち、アイランに対する思いが、瞬時に集結した結果だ。
そんなサキに応えるかのように、アイランは空中で、四肢を広げた。
「アイラン！」
さらにアイランとサキの〈あ・うん〉ともいえる呼吸に負けないタイミングで、テツオがガンソードを放った。
アイランは宙でキャッチし、その銃口をケビンに向けながら、ジープの脇に着地した。
サキは回り込むようにして、テツオの前に立ち、ガードしながら、ガンソードをケビンに向けた。
ジープの両脇から、アイランとサキが銃口を突きつけている。

アイランと目が合った。
サキが微笑むと、アイランもつられるように唇をほころばす。
アイランが初めて見せる笑み……。
しかしアイランは、すぐに戸惑ったように顔を強張らせ、サキから視線を逸らして、ケビンに険しい目を向けた。
「降参だ。参った、参った」
ジープに身を屈めていたケビンが、ホールドアップしながら体を起こした。
「テツオ、ナイスだった。おかげで助かったよ」
「そんなぁ、ただボクは夢中で……」
テツオは照れたようにつぶやいた。
「テツオ、ちょっと」
とつぜん、アイランがテツオのボディチェックを始めた。
「な、何するの？」
「いいから、じっとしてて」
やがてアイランは、テツオが首から下げていたペンダントに目をつけた。
「このペンダントの中には、何が入っているの？」
「家族四人で撮った写真だけど」

「ちょっと見てもいい？」
「うん」
アイランはペンダントを開けた。
しかし中に写真は入っておらず、超小型の発信機が入っていた。
「やっぱり、これで盗聴してたんだわ」
アイランは発信機を取り出し、地面に叩きつけた。
「ボクの、ボクの写真は？」
「さあ、どこへ捨てたっけかな」
ケビンがとぼけた声をあげた。
「大切な写真なんだぞ」
「だったら、もっと早く気がつけよ」
「どうやってすりかえたんだ」
「仲間の女を脅したのさ。かんたんだったぜ。『おまえの母親が見つかった。会わせてほしかったら……』って誘いをかけたら、すぐに乗ってきた。もっともその女も始末したがな」
「ちくしょう」
テツオが憎しみのこもった目でケビンを見やる。
「おっと、ホールドアップしてる相手を攻撃するなんて、ルール違反じゃないのか？」

ケビンはテツオの心を逆撫でするように笑った。
テツオは悔しそうに噛みしめて、うつむく。
ケビンの卑劣なやり方に、サキも怒りが込み上げてくる。
しかしそれでいて、心の一部では、ホッと安堵する気持ちもあった。
無事ケビンを降伏させたことで、問い詰めることができる。
場合によっては、ポリタンクに出した血をこれからいっしょに母親のところまで持っていって、輸血してもいい。
そんなサキの気持ちを察したかのように、アチが口を開いた。
「愚かな者たち。私の血を受けたからって、それを輸血して死人がかんたんに生き返ると思っているなんて」
「ダメなのか？」
サキは反射的に訊ねた。
「私の血ならまだしも。確率は小さいわ」
「それなら、あんたの血を俺の新しい花嫁にやってくれよ。そうすれば、チヅルと仲よく暮らせる。おい、サキとやら、なんならお前のこと、息子だと思ってやってもいいぜ」
ケビンが悪びれずに言った。
込み上げる怒りを押し殺し、サキはケビンを睨んだ。

「ゆっくりとジープを降りろ」
「わかってる、わかってる。しかたねえな、俺の負けだからなぁ」
ケビンは卑屈に笑いながら、ジープを降りる。
ところが片足を下ろしたとき、よろけた。
巨体が前のめりになって、地面に倒れそうになった。
ケビンの倒れる前方には、アイランが立っている。
「あぶない！」
アイランは持っていたガンソードを脇に向けて、ケビンの体を支えようと手を広げた。
「サキ！」
アチが叫んだ。
前屈みになったケビンの片手が、足首に伸び、靴に隠したナイフを引き抜く。
「この小娘ッ！」
引き抜きざま、ナイフをアイラン目掛けて放る気だ。
ナイフをつかんだ手が、サキからは死角になっている。
「卑怯者！」
撃たなければ、アイランがやられる――。
サキは反射的にトリガーを引く。

ナイフを放る寸前、ケビンは動きを止めた。
見開いた目をサキに向ける。
驚き、憎しみ、怒り――。
感情の渦が宿った瞳は、消える前の蠟燭のように輝き、そして光を失った。
巨体がごろんと転がり、そのまま仰向けに大の字となった。
照りつける初夏の太陽を見上げながら、ケビン・ザ・リッパーは事切れた。

◈

「サキ、どういうつもり。私に断りもなく勝手な真似をして」
アチが険しい表情で言った。
サキが黙って立っているとさらに語調をきつく言う。
「こんな武装ボランティアなんて、さっさと殺せばよかったの。それなのに血を無駄にして。まったくどういうつもりなの」
「アチ様、そんなに言わなくても。……アイラン、怪我はない？」
テツオが訊ねた。
「ええ、ありがとう」
アイランが言った。

「アイラン……」
サキは思わず、アイランを見つめた。
彼女の口から、ありがとう、という言葉を初めて耳にしたからだ。
サキに見つめられて、アイランもそれに気づいた様子だった。
けれどもうつむいたのは、一瞬だけだった。
すぐに顔を上げ、サキを見つめる。
「ごめんなさい」
アイランが言った。
ぎこちなかったけれど、サキには彼女の気持ちが、ひしひしと伝わってくる。
ごめんなさいという言葉に、これほどいろんな意味が詰まっていることを、サキは初めて知った。
だがしばしの沈黙の後、アイランが言った。
「サキ、あなたのお母さんに会ったわ」
その言葉に、サキは反応できなかった。
ただ目を見開いて、アイランを見つめ返すだけで精いっぱいだった。
「サキの母さんは、生きてるの？」
テツオが訊いた。

アイランが答えるより先に、アチが口を開く。

「それはありえないわ。私がサキを救い出したとき、彼女はもう――」

「たしかに意識はなかったけれど、でもケビンが言うように、血を与えたら復活できるかも。とても死んでいるようには思えなかったもの」

アイランはアチの言葉をさえぎって言った。

「……母さん、は……どこに……？」

崩れそうになる気持ちを懸命に押さえながら、サキは訊ねた。

「武装ボランティアの司令室よ。ここからすぐだわ。わたし、気を失ったふりをしてたけれど、ずっとケビンと司令官のラダンって女の人の話も聞いていたし、武装ボランティアの基地に入って、司令室まで行く道筋もはっきり覚えてるわ」

「行こうよ、サキ。お母さんを助けに」

テツオが声をあげた。

「だめよ、これ以上勝手な行動は、私が許さない」

鞭を打ちつけるような口調で、アチが言った。

「でもアチ様、サキの……」

「あなたたちは、救済グループの一員であることを忘れないで。サキもテツオも私の血によって、瀕死の重傷から立ち直った。そしてアイランは、私が助けたサキによって、救出された」

アチは断定的に言った。

サキは言葉こそ出さなかったものの、険しいまなざしをアチに向けた。

アチはサキの視線を微笑みで流した。

「池袋のミチコたちのグループが、ルフィアンに襲われる。すぐに救助に向かって」

「浦和の予言は、外れた」

サキは、ぼそりとつぶやいた。

「外れてはいない。邪魔が入っただけ」

「ラダンのことか？」

「私から見たら、ハエや蚊みたいな存在だけど、目障りなことは確かね。それよりも池袋に急いで」

「ねえ、アチ様。ミチコさんたちを救出したら、その後は？」

テツオが訊ねた。

「その後って……」

「もし予言がないなら、その間にサキのお母さんを助け出しに行ってもいいでしょ！　ねっ、アチ様!!」

しつこく食い下がるテツオにせき立てられるようにして、アチは渋々といった表情で、首を縦に振った。

「ミチコたちを、無事救出できたらの話よ」
「ありがとう、アチ様!! 決まったよ、サキ。急ごうよ」
テツオがサキの手を取った。
「しかし十分に気をつけたほうがいいわ。ルフィアンの本隊が、徐々に東京に入り込んできている。池袋に現れる奴らも、かなりのパワーを感じるわ」
「だいじょうぶだよ、ボクとアイランとサキの三人がそろえば。ねっ!」
サキは苦笑しながら、ケビンの乗り付けたジープに乗った。
「あれ、サキって、バイク以外運転できたっけ?」
テツオが訊いた。
「ま、何とかなるだろ」
サキはエンジンを掛けた。

❖

かつて新宿、渋谷とならぶ繁華街として栄えた池袋の街も、いまや吹きすぎる風の音だけが、空虚にこだましている
どの店やビル、ホテルやデパートも厳重な戸締りをして、逃げた様子であったが、すぐに暴徒の襲撃の的となった。

今では、街全体が喰い散らされた料理のように、荒れ果てている。
つい数日前までは、暴走族が大挙して押し寄せ、我が物顔で走りまわっていたものだ。しかしルフィアンの来襲が現実となった今、彼らの姿も見られなくなっていた。
それでも所々に、人々の姿が見られる。
逃げ遅れたり、またはじめから逃げるのを放棄した人々だった。
皆すでに生きる希望を失ったかのように、ぼんやりした表情で、街角をさまよったり、路上に寝込んだりしていた。
時々思い出したように、武装ボランティアの装甲車が街を走り抜けていく。
だが、街にたたずむ人々には、目もくれない。
武装ボランティアにとって、未だ池袋の街に残っている者など、虫けら同然なのだろう。
「だいじょうぶですか。もう少しですから、がんばってくださいね」
足腰の弱った老人たちを、安全な場所へと誘っている少女たちの一団があった。
救済グループのメンバーだ。
少女たちばかり五人という心細さだった。
三人の少女が老人たちの誘導にあたり、あとの二人の少女が、ガンソードを手に周囲を見回している。
グループのリーダーは、ミチコといった。

老人たちを先導しているのだが、手には白い杖を持っていた。目が不自由らしい。

熱意にあふれるその奉仕の精神は、救済グループのリーダー、アチからも一目置かれていた。

「マキさん、ほかにもまだ人がいるのかしら？」

ミチコの言葉に、ガンソードを持っていた少女が答える。

「ええ、あちこちにざっと見ただけでも、十人ほどは」

それを聞いたミチコは、大きな声で言った。

「皆さん、救済グループの者です。これからサンシャインシティまで、避難するところです。歩ける方は、ぜひいっしょにおいでください。歩けない方は、私たちがサポートしますので、声をかけてください」

しかし反応は、冷たいものだった。

路上に座り込み、ウイスキーをラッパ飲みしていた男が、怒鳴り声をあげた。

「どこへ逃げたって、化け物に食い殺されるんだ。逃げるだけ阿呆らしい」

「アチ様に連絡しましたから、もうすぐ援軍が駆けつけてくれるはずです。ですから、自棄にはならないで――」

「うるせえ。ごちゃごちゃ言ってると、化け物に殺される前に、俺がぶっ殺してやるぞ」

「そ、そんな……」

「ミチコさん、酔っぱらいよ。とにかく急ぎましょ」

仲間の一人が言った。

「人々の心がすさんでしまっている。夢も希望も持てないのが、原因なのです。ああ、アチ様。どうかここにいる人々をお救いください」

ミチコは頭を垂れて、祈りを捧げた。

だがすぐに、ハッと顔をあげた。

「何か物音が聞こえます」

そうつぶやいて、聴覚に神経を集中した。

さざ波のような音が、押し寄せてくる。

どんどん近づいてきている。

不吉な予感が強まってくる。

「何か、何かが押し寄せてくるわ。ものすごい数の何かが」

「あれは何かしら？」

仲間の一人が、前方を指さした。

南北に伸びる大通り――。

その北側から黒い絨毯のようなものが、どんどんこちらに迫ってきていた。

「鼠だわ。鼠の大群がこちらに押し寄せてくる！」

少女の一人が叫んだ。

老人たちの間に動揺が走った。
「どこか近くの建物に入りましょう。さあ皆さん、急いで。お願い、時間をかせいで」
ミチコの言葉に、仲間の少女たちは老人たちを、目の前にあった旅行会社の建物の中に誘導する。
ガンソードを持った二人が、道路の真ん中に立ち、迫り来る鼠の大群に対峙した。
鼠の大群は、スピードを増して突進してくる。
「ダメ、とても戦えないわ」
一人が、その場にしゃがみこんでしまった。
もう一人も立っているのがやっとという状況だ。
手にしたガンソードがぶるぶると震えて、とても戦える状態ではなかった。
「終わりだ。終わりだ。俺たちゃ、鼠に食われて、骨だけになっちまうんだ」
酔っぱらいが叫んだ。
「ああ、そんな……」
ミチコがつぶやく。
「そうはさせない」
押し殺してはいるが、力強い言葉が響いた。
サキだ。

鼠の大群の音にまぎれて気づかなかったのだが、サキが運転するジープが赤羽から池袋に到着したのだ。
ジープを降りたサキは、ガンソードを手に、迫り来る鼠の大群に向かって歩きだす。
「ふう、酷い運転だったわ」
助手席からアイランが降りた。
「間に合っただけ、ラッキーと思わなくちゃ」
そう言うテツオも、ジープを降りるなり、二、三歩よろけた。
「後は任せて」
アイランは腰砕けになった少女に言った。
「アイラン……」
少女は意外そうな顔つきで、アイランを見上げた。
アイランは照れ臭そうに唇を歪める。
「ごめんなさい、今まで」
「さあ、早く、建物の中に避難するんだ」
テツオはガンソードを構えた。
「まだまだパワーアップの余地はあるわね」
手にしたガンソードをチェックしながら、アイランが言った。

「チェッ、一生懸命にチューンナップしたのに」
テツオとアイランは顔を見合わせ、微笑む。
だが次の瞬間、二人はキッと表情を引き締め、こくりとうなずくと、サキの後につづいた。
中央にサキ、左側にテツオ、そして右側にアイランと横並びになって、広い車道を北に向かって歩く。
吹きつける風が、三人の髪をさらりとなびかせる。
「すごい数だ。それに大きいや。一匹一匹が熊くらいもあるよ」
テツオがつぶやいた。
「ぜんぶ、ルフィアンの擬態ね」
アイランの言葉に、サキはコクッとうなずき、足を止めた。
アイランとテツオも足を止める。
向かってくる鼠の大群との距離は、五十メートルあまりだ。
テツオが言ったように、鼠というよりも熊ほどもある。
体長は二メートル近い。
緊張の糸が、ぴんと張りめぐらされた。
「やるぞ」
ガンソードを構えるなり、サキの指がトリガーを引いた。

先頭を走る鼠の額(ひたい)に穴があく。
即座(そくざ)に後方の鼠たちにはじき飛ばされた。
アイランとテツオも発砲した。
先ほどまでしんと静まり返っていた池袋の街に、銃声が鳴り響いた。
三人の中央に立ち、ガンソードを連射するサキの心は、クールに燃えていた。
向かってくる敵の数とそのスピード、迫力に動揺したら、狙いが狂う。
焦(あせ)らず的確に、敵の急所を狙い、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ——。
「きりがないわ。迫ってくる」
アイランが声を震わせた。
初めての実戦だ。
おびえるのも無理はない。
「あわてるな。俺のかげに隠れて、援護してくれればいい」
「わかった」
アイランは一歩さがり、気持ちを奮(ふる)い起こすように顔を引き締めて、一発一発狙いながら、トリガーを引いた。
ルフィアンは、撃っても撃っても死体の山を乗り越えて、突進してくる。
サキは自分に言い聞かせながら、撃つ。

（落ち着け。あわてたら負けだ。敵のペースに飲まれるな）
一カ月前の自分とは、別人になっている。
直立不動の姿勢だった。
ぼんやりと信号待ちでもしているような姿にさえ見える。
リラックスして実戦に臨めるだけの余裕が生まれている証拠だ。
実際、よけいな力を入れるのは、狙いを外すだけだ。
一発外すと、焦りが生じ、焦りはさらに狙いを狂わせる。
いったん狂ったペースを取り戻すのは、至難の技だ。
敵を観察する余裕がなくなり、思わぬところから攻められると、対応できずにパニックに陥ってしまう。
そうなったら負けだ。
（落ち着け、落ち着け、落ち着け）
自分に言い聞かせながら、弾丸を発射する。
はじめは無限とも思えた黒い絨毯――巨大鼠の大群に終わりが見えた。
「ふう、もう少しだ」
テツオが安堵したように、肩で息をした。
「気を引き締めるんだ。油断したら負けだぞ」

サキはぴしゃりと語調を強めた。
「わ、わかった」
テツオはふたたび緊張に顔を引き締めた。
数分後、鼠たちの襲撃は終わった。
後に残ったのは、鼠の死骸でできた巨大な山だった。
「テツオ、がんばったな」
サキが褒めると、テツオは照れ臭そうに鼻の下を指で擦った。
「サキ、あれを見て！」
アイランが、鼠の死骸の上方を指さした。
全長十メートル近い鳥が姿を現していた。鳥というよりも、獣に羽が生えたような不気味な姿をしている。
「始祖鳥だ。鳥の先祖といわれる恐竜だよ」
テツオが言った。
たしかにサキも、以前、図鑑で見たことがある。
しかし見たものに擬態するルフィアンが、始祖鳥になるのは不自然だ。誰かが作為的に擬態させているとしか思えない。
（あいつだ。あいつの仕業に、間違いない）

サキの脳裏に、ラダンのことが浮かんだ。
「一匹じゃないよ。二匹、三匹……ああ、ぞくぞくと飛んでくる」
テツオが悲鳴に近い声をあげた。
だが驚きは、それだけではなかったのだ。
サキが先頭の一匹に照準を合わせたとき、始祖鳥は口を開け、奇声とともに怪光線を発した。
「危ない！」
サキはローリングして、かわす。
「何かに隠れるんだ」
サキはテツオとアイランにそう叫び、始祖鳥に向かって駆けだした。相手の注意を、自分に引きつけるためだ。
鼠たちの場合は数こそ多かったものの、動きも直線だったし、光線など発しなかった。
だが今回は、縦横無尽に飛び回り、さらに相手からも攻撃してくる。
左右のローリングやジャンプで避けながら、ガンソードを撃つ。
連射して、懸命に敵の急所を探す。
喉に当たったとき、始祖鳥の動きが衰えた。
喉元に狙いを集中させた。

数発当たったとき、動きを止めて、落下した。
「喉だ。喉を撃て！」
サキが叫ぶ。
街路樹に身を隠すテツオ、放置された自動車のかげから発砲するアイラン——。
二人の発砲する弾丸も、始祖鳥の喉を狙いだした。
サキが五、六匹仕留める間に、テツオは二、三匹、アイランは一匹を仕留めるといった具合だ。
だが、驚くべきはアイランの射撃だった。
身を隠して体を固定しているせいもあるが、連射をつづけるうちに、命中率が目に見えてアップしていた。
やがて——。
百匹近くを撃ち落としたとき、前方からひときわ大きな始祖鳥が姿を現した。その横幅は、五十メートル以上ある。
翼を一振りしたとき、一撃でサンシャインビルの上部が砕け散った。
超音波のような奇声を発し、口から吐く怪光線の破壊力も桁外れだ。
光線の当たった路面は、多量の爆弾を仕掛けたように炸裂。
隕石が落下した後のような穴が空いた。

体の表皮も鋼のように固く、サキの発した弾丸を、雨粒のようにかんたんにはじき返してしまう。
しかも、巨体だがそのスピードは、先ほどまでの連中以上だった。
超大型ジェット機のように舞い降り、攻撃してくる。
巨体が産み出す風圧だけで、ビルのネオンや窓ガラスが割れて、四散した。
ただ漠然と連射していても、効果は薄い。
トリガーから指を離し、サキは叫んだ。
「俺が掛け声をかけたら、一斉に喉を狙え」
それに応えて、アイランとテツオも発砲を止めた。
敵は悠然と上空で旋回し、不吉な影を投げかけた。
攻撃が止んだので、こちらを撃滅したと思ったのか、超弩級の始祖鳥は、いっそう大きな雄叫びをあげた。
滑空の速度が弱まり、サキたちの頭上を通過する。
「今だ！」
サキの声とともに三丁のガンソードが一斉に火を放った。
弾丸の連射。
三つの弾丸の筋が、始祖鳥の喉、一点に集まる。

凸レンズで太陽光線を集めたかのように――。
比較的やわらかな喉の表皮が破れ、体液がまき散らされた。
さらに集中して、発砲した。
十秒近くの狙い撃ちの後――始祖鳥は失速する。
その巨体はパルコの屋上に腹部を擦らせながら、西口方面に落下していく。
すさまじい地響きとともに、粉塵が舞い上がるのが見えた。
テツオがサキに駆け寄ってきた。
「これで全滅かな？」
「たぶん」
そう答えながらも、サキはしばらくガンソードを構えたまま、辺りの様子をうかがう。
数分経った後も、静寂が破られることはなかった。
「ありがとう」
ミチコが微笑んだ。
しかしサキは、笑みをかえすことはできない。
すでにこのあたりは、ルフィアンの棲息地といってもいい。
いつまた次の集団が、攻撃を仕掛けてくるかわからない。

いや、すでにどこかに別の一団が進入していて、すぐにでも襲いかかってくるかもしれないのだ。
「避難の目処は立たないのか？」
サキの言葉に、ミチコは弱々しく首を振った。
「とにかく少しでも、南へ行ったほうがいい」
気休めにしかならないかもしれないが……。
自動車のクラクションが鳴った。
道路に乗り捨ててあったバンの運転席から、アイランが声を上げた。
「この車、ちょっと配線を直したら動くわ」
「誰か運転ができる者はいないか？」
サキは訊ねた。
メンバーの少女たちは、困ったように顔を見合わせるばかりだ。
「おれが運転するよ」
先ほど路上で奇声を上げていた酔っぱらいが、ふらつきながら歩いてくる。
「おじさん、危なっかしいな」
テツオが言った。
しかし酔っぱらいは、神妙な顔つきで、頭を垂れる。

「さっきはすまない。自棄になってててつい……。だが必死に戦っているあんたらを見てて、自分が恥ずかしくなった」
「でも大丈夫ですか？　ずいぶん酔っているけれど」
ミチコが訊ねた。
「なに、これくらいの酒。安心してくれ、十分に注意して運転するから。それでも心配かい？」
「いいえ。ありがとうございます。助かりました。お願いしますわ」
ミチコが笑顔で言った。
「とにかく南へ、南へ逃げるんだ」
サキはそう言い残し、人々のところから離れ、ジープに向かう。
すぐにアイランとテツオが来た。
「行くんだね、お母さんのところへ」
テツオの言葉に、サキはうなずいた。
「案内するわ。乗って。急ぎましょ」
アイランがジープの運転席に乗り込んだ。
「あれ、アイラン、運転できたの？」
テツオが訊ねた。
「ゲーセンでやったことがあるだけだけど、たぶんサキよりはマシだと思う」

「うん、サキより酷い運転なんて、考えられない。急ごうよ！」
テツオは後部に乗り込んだ。
「あのな」
サキは頭を抱えながら、助手席に乗った。
すぐにジープは発進した。
舗装された路面を、凸凹道を進むような運転で——。

◈

赤羽台にある武装ボランティアの仮設基地に着いたのは、すでに太陽が大きく西の空に傾いた時刻だった。
瓦礫のかげにジープを止め、基地の様子をうかがった。
有刺鉄線に囲まれた基地内に、人影は見当たらない。
「出払っているのかな？」
テツオは不思議そうに言った。
「昼前に私が連れ出されたときは、装甲車やトラック、ヘリコプターなんかもあったわ。それにあの建物以外にも、いくつかのドームが作られていたはずなのに」
アイランの言う通り、なだらかに整地された基地内には、蒲鉾状のドームが一つ建っている

だけだった。
「この基地自体が放棄された可能性もある。すでにルフィアンはここらへんにも姿を現し、この程度の防御ではかんたんに突破されるから」
「じゃあ、サキのお母さんも、もうここにはいないのかな？」
「それは……」
「とにかく乗りこんでみましょ」
アイランがエンジンを掛け直した。
「ま、待って。ボクが運転する」
「テツオが？」
「うん。ボクもゲーセンでしかしたことないけど、少なくともサキやアイランよりはましだから」
「まあ、失礼ね。実物はゲームとは違うのよ」
文句を言うアイランを強引に退けて、テツオはジープを運転した。三人の中では最も安定した走行だった。
基地内に入っても、やはり人影は見当たらない。
表面上は冷静を装っているものの、サキの心は激しく揺れ動いていた。
基地自体が放棄された——。

自分が言った言葉を、証明するかのように人気がなかった。
となると、母親もいっしょに移動してしまったかもしれない。
ここに来るまでに、アイランからおおまかな状況は聞いた。
ケビンは武装ボランティアの中でも、かなり異色な存在だったようだ。
母親を連れてきたのも、命令ではなく、勝手な判断だったらしい。
撤退した基地内に、取り残されている可能性もあるのではないか。
しかし母は植物人間のような状態らしく、自力では体の機能が維持できない。
たとえここに残されていたとしても、維持装置のスイッチを切られていたら――。
わずかな間にさまざまな思いが脳裏を過った。
「その建物の脇で止めて」
アイランが言った。
蒲鉾状のドーム、その正面扉のところで、ジープは止まった。
すぐにアイランが駆け降り、扉に近づく。
「待て」
ジープを降りたサキは、アイランを脇に退けて、扉に耳を当てた。
中から物音は、聞こえてこない。
扉を開けた。

やはり中は無人だ。
正面に伸びる通路は、非常灯の明かりにぼんやりと照らされていた。
「司令室は？」
サキはアイランに訊いた。
「通路をまっすぐに進んで、一番奥の右側の部屋よ」
三人はガンソードを構えながら、通路を進んだ。
靴音だけが、反響する。
一歩一歩進むごとに、緊張の糸がキリキリと張りつめられていく。
何事もなく、司令室のところまで着いた。
だがそれまで通路脇にあった扉は、どれも皆、閉ざされていたのに、司令室の扉だけが、開け放たれていた。
サキが扉の手前で足を止め、アイランと顔を見合わせたとき、司令室の中から声が響いてきた。
「中に入って。待っていたわ」
すぐにピンと来た。
ラダンの声だった。
アイランとテツオが、不安そうな顔でサキを見る。

サキは唇を噛みしめて、こくりとうなずき、先頭を切って司令室に入った。
部屋の正面にこちら向きで置かれたデスクの向こうに、ラダンが座っていた。
サキの瞳は、左奥の隅に置かれた巨大な水槽に釘付けとなった。
「母さん――！」
水槽の中に全裸の母がいた。
口と鼻にチューブが取り付けられて、気泡が出ている。
生命維持装置は稼働している様子だ。
「今、ケビンが残した記録をチェックしていたの」
ラダンはデスクに置かれたノートパソコンを見ながら言葉をつづける。
「あの男、やりたい放題。おまけに私の極秘文書にまでアクセスしてたなんて。あなたたちにはお礼を言わなくちゃならないわ。邪魔者を始末してくれて、ありがとう」
「なぜ知っている？」
ラダンは顔を上げ、笑いながらサキを見た。
「生存反応が消えたもの。奴らの体には、発信機が埋め込まれているんだから」
「さっき池袋の街をルフィアンに襲わせたのは、おまえの仕業だな」
サキの言葉に、ラダンの笑みがいっそう大きく広がった。
「私、子どもの頃から恐竜が大好きだったの。どう、迫力だったでしょ？」

「いったいどうやって、ルフィアンを手なずけたりできたんだ？」
テツオが声をあげた。
「それは……ごめんなさいね、坊や。教えられないし、教えてもわからないわ。それに時間もないの」
ラダンは腰を上げた。
サキたち三人は、同時にガンソードの銃口をラダンに向けた。
そのとたん、ラダンとサキたちの距離がぐんぐんと離れだした。
「サキ、いったい――？」
テツオが表情を固くした。
「しまった。この建物自体が、ルフィアンの擬態だ」
大宮での出来事が、サキの脳裏に浮かぶ。
天井に向けて、トリガーを引いた。
すぐにアイランとテツオも、発砲する。
「水槽は、水槽は撃つな！」
「わかってるわ」
壁や天井が、生々しい粘膜の壁に変わり、ゼリー状の液体を滴らせながら収縮する。
そのまま三人を消化しようとしているかのようだ。

背筋がゾゾゾッと凍るほどの恐怖を感じながら、サキはトリガーを絞りつづけた。
ただ水槽に当たらないことだけを気づかいながら、あちこちに銃口を向けた。
始祖鳥に擬態したルフィアンの急所が喉だったように、このルフィアンにもどこかウィークポイントがあるはずだ。
建物に擬態したルフィアンが自分たちを消化するのが早いか、それとも銃弾で仕留めるのが先か――。
どんどん収縮してくる。
粘液が滴り落ち、サキたちをずっぷりと濡らす。
「うわあああああああああああああ」
テツオが悲鳴を上げ、意図せずして銃口を足元に向けた。
まわりの粘膜の蠢きが、ぴたりと止まった。
「どうしたのかしら？」
アイランがサキを見た。
サキは答えるより先に、テツオのように足元を撃つ。
辺りの粘膜が、逃げるように膨張を開始した。
「下だ。下を撃て」
三丁のガンソードが、銃口を下に向けた。

四方の粘膜が、煙を発し始めた。
黒く焼け焦げ、やがてぼろぼろと崩れ落ちてくる。
焼け落ちた廃墟から逃れるように、サキたちは身を屈めた。
炭化したルフィアンがぼろぼろになって死滅した後、辺りにはすべてが撤去された後の平地が広がっていた。
「しぶとい連中だ」
ラダンが吐き捨てるように言った。
彼女のとなりには、サキの母親の入った水槽だけが残っていた。
西の空から夕日が照りつけて、全裸の母が血に染まっているかのようだ。
「ルフィアンを調教するのは、犬や猫のようにかんたんにはいかない。それなのに私が懸命に手なずけた連中を、ことごとく死滅させるとは」
ラダンは険しい目で、サキを睨む。
瞳が怒りに燃え、全身からメラメラと熱気を帯びたオーラが立ちのぼっていた。
「ルフィアンをペットにして、見せ物にでもする気だったのか？」
サキの言葉に、ラダンの顔つきがいっそう厳しくなった。
「黙れ。ルフィアンを思いのままに操るなど、私にしかできないということをブラッド様に知らしめようとしたのだ。私を捨て、カチュアなどという小娘を選んだことを後悔させるために

も。それなのに、おまえらのせいで私の目論見はすべて水の泡だ」
ラダンの体が発光した。
炎だ。
ラダンの全身が、青白い炎の火焔に覆われている。
「サキ……」
アイランが声を震わせた。
テツオもサキに身を寄せる。
その一瞬のわずかな隙をついて、ラダンの胸が裂け、奥から触手が三本、ものすごい速さで伸びてきた。
しまった——！
そう思ったときには、すでにサキたちの手から、ガンソードは奪われていた。
触手はガンソードを後方に放り投げ、ふたたびサキたちに迫る。
その先端は、鎌首となって、大蛇のごとく口を開けた。
アイランはローリングで、サキはジャンプしてかわす。
だがテツオが捕まった。
テツオの右拳が、ぱっくりと噛まれた。
「テツオ！」

助けようとするが、即座に残りの二本の触手が、宙をうねり、襲いかかってくる。
「私を邪魔だてした者には、死を以って償ってもらう」
縦にぱっくりと割れたラダンの胸は、首筋や股間まで亀裂が広がり、皮膚がべろんとめくれ上がった。
「いったい、どうなってるの？」
赤黒い臓器が露出し、どんどん膨張する。
アイランが悲鳴に近い声をあげた。
「お前らの邪魔だてが、私を本気に怒らせてしまった。ブラッド様の血を受けた私の怒りはもう止まらない」
言葉を発しながらも、ラダンの口が裂けた。胴体と同じようにそのままめくれ上がり、粘膜が露出する。
すぐにその表面が瘡蓋状のもので覆われていく。
甲羅だ。
蟹のように硬質な甲羅が、表面に広がっていく。
バルーンに急激に空気を詰めるように、体が膨らんだ。
甲羅に包まれた体が二倍三倍、いや二乗三乗する速さで、巨大化する。
わずか数秒という間に、そこに姿を現したのは、背丈十メートル、その横幅は二十メートル

近い巨大な蟹に似た怪物だった。
「もう遅い。後悔しても、もう手遅れだ。殺す。お前らの肉体も魂も、完膚無きまで粉々にしてやる」
ラダンの声だった。
蟹の化け物の頭部に、ちょこんと飾りのようにラダンの頭部が、さらし首のような姿で乗っていた。
その口が言葉を発している。
「殺してやる。私の計画を邪魔する奴らは、絶対に許させない。絶対――！」
口からぶくぶくと泡を吹きながら、恨みつらみを口走った。
だが異変は、ラダンだけには収まらなかった。
「……ボクの……大事な、友だち……サキや……アイランを、傷つけようとする奴は……このボクが、許さないぃ……絶対に、……絶対に……許さない」
テツオが全身をぶるぶる痙攣させながら唸った。
今度はテツオの体に、ボウッと火がついた。
ラダンのときとは違うオレンジ色の炎が、竜巻のようにうねりながら巻き起こった。
「これは、いったい……」
アイランが呆然とつぶやく。

予想だにしなかったテツオの異変に、サキもただ目を見開くばかりだった。
「ボクの父さんも……母さんも……まだ小さかった弟まで、みんな死んだ。……殺された……。残っているのはたった二人の友だち……サキと……アイランは、ボクが守る……。ボクが守れなかった父さんや……母さんのようにはしない……絶対に、絶対に――!!」
次の瞬間、テツオの体が膨れあがる。
辺りに気流ができ、竜巻となった。
だかその火焔の塊は、氷のように固まっていく。
立ち込めた煙が凪に流された後、そこには身長五メートルを超える巨大な猿人がそびえ立っていた。

◈

テツオが変貌を遂げた巨大な猿人――。
その毛は鋼のように固く、胸板は銅板のように赤銅色に染まっている。
「なぜ……? そうか、アチとやらの血を受けたな」
巨大蟹の上に乗ったラダンの頭部が言った。
ガルルルルルルッ。
うなり声を発し、最前までテツオだった巨大猿人は、右手に噛みついていた触手を反対に噛み切り、即座に跳躍した。
巨大蟹目掛けて、襲いかかる。
巨大蟹は片方の鋏で応戦する。
だが猿人は両腕で鋏をつかむと、左右に捻り、捩じりきってしまった。
鋏を逸した切れ目から、真っ赤な鮮血が勢いよく飛び散る。
すぐに凝固し、無数の触手となって、猿人の体に絡みつく。
猿人が胸を突き出すと、締めつけていた触手が、ぷちぷちッぶちぶちぶちぶちッと音を立てて弾けた。
さらに腹部や腕に絡みつく触手を両手で握り、引きちぎっていく。
その隙に、巨大蟹は残ったもう片方の鋏を閉じ、その尖った先で胸を突いた。
ギリギリギリと鋭い刃先が、猿人に食い込む。
「クソッ。やめろおおお!」
サキは叫んだ。だが丸腰で、手出しすらできない。
「サ……サキ、ごめん」
猿人が振り向いた。
顔つきや体は変貌していたが、瞳の輝きは間違いなくテツオのものだった。
「テツオ!」

「ボク、父さんや母さんがいるときは、すごく悪い子だったんだ。わがままばかり言ってて、ちっとも言うことを聞かなかった。だから罰が当たったんだ」
「そんな……なぜテツオ、お前が」
罰が与えられるなら、俺のほうだ——サキは思った。
蟹に変化したラダンは、変貌を遂げたテツオを見て、アチに血を受けたからだと言った。
それなら原因は、サキにある。
自分がテツオを空港に残さなければ、こんなことにならなかった。
（悪いのは俺のほうだ。それなのになぜテツオ、おまえがこんな目に……）
「トドメだ」
鋏がいちだんと深く、突き刺さった。
「サ……サキ……ありが、と……う……!!」
言い終えた瞬間、猿人はがっくりとその場に倒れた。
「くそッ」
サキの怒りが、沸点に達した。
「サキ！」
アイランがサキに駆け寄りながら、拾ってきたガンソード二丁のうちの一丁を放った。
だが巨大蟹上部のラダンの片目が、それをとらえた。

蟹の口から泡が噴射された。
弾丸のような速さで、サキがキャッチする前に、空中でガンソードに命中し、ガンソードは地面に叩きつけられた。
銃身は、直角近くに折れ曲がっていた。
「なんて奴なの」
アイランはもう一丁のガンソードを構え、発砲しながらサキに近づく。
しかし弾丸は、硬い甲羅にカン、カーンと小気味よい音を残して、弾かれていく。
サキはアイランに駆け寄り、ガンソードを手にした。
アイランの前に立ち、連射する。
「テツオ……」
アイランが喉をつまらせた。
さっきまで巨大猿人だった体も、テツオのものに戻っていた。
怒りをエネルギーに変えて、サキはトリガーを絞った。
弾丸のすべてが甲羅に弾かれる。
こいつに弱点はないのか——。
「ふはははは、次はどっちにしようかね」
ラダンが笑った。

蟹本体の口も笑っているかのように、ぶくぶくと泡を立てている。
テツオの死を愚弄する笑い——。
笑いを封じるべく、口を撃つ。
「ぐぐッ」
ラダンの顔が歪み、蟹の動きが止まった。
(口だ、こいつの弱点は口だ!)
サキは狙いを定め、巨大蟹の口腔に攻撃を集中した。
「やめてええええええええええええええええええ!」
ラダンが絶叫した。
(今さら命乞いかッ)
ラダンの叫びが怒りに火を注ぎ、ガンソードを持つ手にも力がこもる。
だが次の瞬間、サキはトリガーから指を離した。
弾丸がピタリと止まり、界隈に静寂が戻った。
巨大蟹が伸ばした触手が、母の入った水槽に巻きつき、上空高く持ち上げている。
水槽につながっていた生命維持装置の管が引きちぎられていた。

先ほどまで母の口や鼻から発していた気泡が、今は出ていない。
「このままにしておいたら、脳に酸素が送り込まれず、本当にお陀仏よ」
ラダンが、楽しそうに言った。
「クッ——」
唇を噛み、銃口を下げた。
「人間は罪を犯した。神に対する冒瀆をくりかえしてきた。今、その罰が下されるとき。まずはサキ・アマミヤ。あなたから——」
ラダンの目が暗い光を宿しながら、サキを見下ろしている。
蟹の口が左右に開いた。
泡を噴射して、サキの命を奪う気だ。
「サキ……」
後部のアイランが、ぴたりと身を寄せてきた。
「すまない、アイラン」
振り向かず、頭を垂れた。
「ううん、あなたが謝る必要なんてない。悔しいけどラダンの言ったことにも、一理あるのかもしれないわ」
「何だって!?」

「これまで私たち人間がしてきたことは、神をも恐れぬ暴挙だったのかもしれない。その罪に対する罰が、今回のルフィアン騒動」
「ルフィアンは、人類の罪に対する罰……」
サキとアイランを見下しながら、ラダンが笑った。
「ふははははは。ちんけなドラマのワンシーンみたいね。もっと見ていたいけど、つきあっている時間はないわ。最後にあなたたちに、すてきな言葉を贈るわ。『ざまあみろ！』」
〈サキ、撃って。この化け物を！〉
サキの脳裏に声が響いた。
母の声——間違えるはずがない。母の声だ！
サキは顔を上げて、水槽を見た。
母は依然として、目を閉じたままだった。
けれども、まるで何かをサキに伝えるかのように、閉じられた唇の端から、気泡が一つ発せられた。
〈私はもう死んでいるの。復活なんてできない。それなのに安らかに眠ることもできず、魂が縛りつけられている——〉
「母さん……」
〈お願い、サキ。あなたの手で、私の魂を解き放って。私がこの世で最も愛しつづけた、あなたの手で……〉

「しかし、母さん……」
サキは母を見上げながら、つぶやいた。
「血迷ったか？　泣き言なら、早く終わらせろ」
ラダンが楽しそうに言った。
〈お願い、サキ。あなたの手で、私をあの人の元へ……あなたの父さんのところへ、送り届けてほしい。お願い、サキ。どうか、私の最期のお願いを聞き届けて……〉
「母さん！」
「サキ、私にも聞こえたわ。あなたの母さんの声が」
背後からアイランが、涙にむせぶ声で言った。
その言葉が、サキの心から迷いを消した。
「泣き言は終わりだな。それでは、罰を与えよう。サキ・アマミヤ。死ね——」
蟹の口がさらに大きく開いた。
泡が噴出される顎際——。
サキはガンソードを構え、即座に発砲した。
連射された銃弾が、一直線となって巨大蟹に飲み込まれるように命中した。
「ぎゃああああああああああああああああああああああああ」

ラダンの絶叫が、銃声をかき消した。
高温の油で満たした鍋に生きたまま放り込まれたかのように、巨大蟹は喘ぎ狂い、のたうち回った。
「ぐぐぐぐぐぐぐぐ、覚えていろ……サキ・アマミヤ……おまえは今、更なる罪を犯した……この罰は……この罰は必ず下されることを……!!」
巨大蟹は水槽を放り投げた。
巨大な影が上空に迫る。
いつの間にか、巨大な始祖鳥が、飛来していた。
始祖鳥は、口から怪光線を放つ。
サキたちがかわした隙に、その両足で、しっかりとラダンをつかんだ。
サキが反撃する暇もなく、すさまじい速さで遠くへ飛び去っていってしまった。

「母さん！」
サキは水槽に駆け寄った。
水槽は割れ、中を満たしていた溶液が地面に広がっていく。
サキは母親の上半身を抱き上げた。
気のせいだろうか。

母の唇は、柔らかな笑みを浮かべている。
「ううん、気のせいじゃない。これでよかったのよ。あなたの母さんが望んでいたこと。人間として死んでいけたんだから」
サキが思いを口にしていないのに、アイランがつぶやいた。
「アイラン……」
サキと目が合う。
アイランは悲しげな瞳で涙を流しながらも、サキを元気づけるようにこくりとうなずく。
そして、サキの母の死を悼んで、静かに目を閉じ、両手を合わせた。
サキも母親の体を抱えたまま、瞼を塞ぎ、頭を垂れた。
(母さん、安らかに眠ってくれ。父さんといっしょに、安らかに)
「ラダン……あの娘、おそらくブラッドの血を受けた。そのせいで……」
サキの後方から声がした。
振り返ると、そこにはアチが立っていた。その表情は、ふだんに増して険しかった。
「ブラッドって……？」
サキの問いに、アチは答えない。
サキたちに背中を向け、何かを思案するかのように、夕日を見つめた。
何かが起ころうとしている。

ルフィアンの騒動の裏には、まだ見えぬ別の何かが隠されている。
それにはアチも絡んでいる。
アチは、何かを知っている。
（ブラッドの血を受けたせい？）
いったい何のことだ。
ラダンはなぜ、あのような姿に変貌を遂げたのか。
そして、テツオまでもが……。
アチは、本当に聖女なのか。
本当に弱者を救出する聖なる存在なのだろうか？
だが今は、アチに訊ねる気力すら沸いてこない。
ガンソードを地面に置き、両手で母親の亡骸を抱え上げた。
アイランがテツオの遺体に近づき、祈りを捧げてから、抱え上げている。
サキは西の空を見た。
西の地平に、太陽が沈んでゆく。
照りつける夕日が、辺りをそして自分たちを真紅に染めている。
サキには、それが真っ赤な血の色に思えた。
更なる流血の惨劇を予言している。

これからはじまる悲劇――。
人間が犯した罪に対する神からの罰が、これから下されようとしているのか。

to be continued『sin and punishment』

あとがき

飯野文彦

『罪と罰』といえば、二十世紀の文豪ドストエフスキーの名作を思い出すでしょう。
かの名作と同じタイトルをつけるということは、それだけの自信と確信がなくてはできません。しかし、心配はご無用です。
すでにゲームを体験済みの方ならばご存じでしょうが『罪と罰～地球の継承者～』は、ドストエフスキーの名作同様、歴史に残るすばらしいゲームです。
私自身、ゲームを拝見させていただきましたとき、さまざまな面で驚き、感激しました。シューティングゲームとして超一級品であるだけでなく、ストーリーも、タイトルに密接した謎と、さらに予想を大きく超えるスケールの大きさを備えています。
想像をかき立ててくれるすばらしいグラフティック、魅力的なキャラとともに、謎を秘めたゲーム内世界に、ぐんぐん魅了されました。
本書はゲーム本編のプレストーリーになっています。ゲームの中での世界の数カ月前の出来

事を描いてみました。
これからゲームを体験するという方にも、楽しんでいただけるように工夫しました。
もちろん、ゲームをやられた方にはゲーム内での謎!?に対する答え……とまではいかなくても、流れは描いてあります（乞うご期待!）。
ゲームと相まって、より『罪と罰』ワールドを楽しんでいただけると思います。どうぞ、サキやアイランといっしょに、あなたも近未来の日本!?の冒険を味わってください。
最後になりましたが、ノベライズを許可していただきました任天堂およびトレジャーの皆様、メディアワークスの太田宏様、飯岡富士男様、本書を担当してくださった髙島紀彦様、具志堅勲様、そして何よりこの本を手にとってくださった読者の皆様に深く感謝し御礼申しあげます。
ありがとうございました!

GAME DATA

罪と罰

地球(ほし)の継承者

対応機種● NINTENDO64
メーカー● 任天堂
ジャンル● アクションシューティング
定価● 5,800円(税抜)
発売日● 2000年11月21日

人類によって創造された新種生命体、ルフィアンの暴走により混乱に陥った日本列島。

主人公サキは、救済グループの仲間、アイラン、アチらと共に、北海道より迫り来るルフィアン、対立する武装ボランティアと戦う。

果たして人類に未来はあるのか──。

質の良いゲーム作りには定評のある任天堂とトレジャーが手を組み完成した、アクションシューティングゲームの決定版！

◉飯野文彦著作リスト

著書：「オネアミスの翼Ⅰ」（ソノラマ文庫）
「オネアミスの翼Ⅱ」（同）
「怪人魔天郎」〈石ノ森章太郎原案〉（同）
「ねむってから勇者」（同）
「居候は星の王子様」（同）
「巫女様カーニバル」（同）
「富江replay」〈原作・伊藤潤二〉（ソノラマノベルズ）
「トップをねらえ！」（勁文社ノベルス）
「トップをねらえ！・完結編」（同）
「テリーナ姫の大冒険・お姫様は家出中」（大陸ネオファンタジー文庫）
「テリーナ姫の大冒険・消えたアイドル」（同）
「未完の美獣士① 空白のレジェンド」（同）

「邪教伝説」（徳間オリオン）
「楽勝ハイパードール」（徳間AM文庫）
「フロントミッション」（ログアウト文庫）
「悪魔くん千年王国Vol.1　起の巻」〈水木しげる原作〉（小学館SQ文庫）
「悪魔くん千年王国Vol.2　承の巻」〈水木しげる原作〉（同）
「可変走攻ガンバイク」（同）
「上海ゴーストストーリー」〈原案・染野行雄〉（同）
「蒼きリバイバー」（双葉ノベルズ）
「アーカトラス年代記・明日への旅立ち」（双葉ファンタジー）
「アーカトラス年代記・恋のプレリュード」（同）
「女族闘魔伝・バージンハンター襲来す！」（青心社）
「女族闘魔伝・真昼のラブホテルの決闘」（同）
「女族闘魔伝・放課後のアブないパーティ」（同）
「下級生Vol.1　一学期」（ケイエスエス）
「下級生Vol.2　夏休み」（同）
「無人島物語リミテッド　激流…時空を超えて【前編】」（同）
「あかずの間」〈原案・竹内義和〉（ぶんか社）
「ブレス・オブ・ファイアⅢ」（ゼスト）

「ハートワーク」（KKベストセラーズ）
「シーズン」（同）
「GONE過ぎ去りし日々」（同）
「となりのお姉さん」（同）
「放課後恋愛クラブ　恋のスクランブル」（ファミ通文庫）
「マクロスダイナマイト7（上）（下）」（ニュータイプノベルス）
「夏のかくれんぼ　学校の怪談4」（角川文庫）
「鉄甲機ミカヅキ　上」（角川スニーカー文庫）
「邪教伝説ミレニアム」（ハルキ文庫）
「アルコォルノヰズ」（ハルキホラー文庫）
「アークザラッドⅠ　封印の滝へ」（エニックス）
「アークザラッドⅡ上巻　炎の少年エルク」（同）
「アークザラッドⅡ下巻　新たなる伝説」（同）
「アークザラッドⅢ上下巻」（同）
「エンドレスセレナーデ」（コアマガジン）
「グランディアⅡ〈上〉〈下〉」（電撃ゲーム文庫）

共著：「新作ゴジラ」（講談社X文庫）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8 東京YWCA会館
メディアワークス電撃ゲーム文庫編集部
「飯野文彦先生」係
「鈴木康士先生」係

■

電撃文庫

罪と罰(つみ ばつ)
地球の継承者(ほし けいしょうしゃ)

飯野文彦(いいの ふみひこ)

発行　二〇〇一年二月十五日　初版発行
発行者　佐藤辰男
発行所　株式会社メディアワークス
〒一〇一-八三〇五　東京都千代田区神田駿河台一-八
東京YWCA会館
電話〇三-五二八一-五二〇八（編集）
発売元　株式会社角川書店
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）
装丁者　荻窪裕司（META+MANIERA）
印刷・製本　あかつきBP株式会社
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-8402-1746-7 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Time, Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

郵便はがき

おそれいりますが
切手を貼って
お出しください

101-8305

東京都千代田区
神田駿河台1−8
東京YWCA会館
株式会社メディアワークス
「電撃ゲーム文庫」係行

〒	—	ここには何も書かないでください→
住所	都道府県	
		TEL （ ）
氏名	ふりがな	男・女 / 年齢 歳
職業	※以下の中で当てはまる番号を○で囲んでください ①小学校3年生以下 ②小4〜6年 ③中1 ④中2 ⑤中3 ⑥高1 ⑦高2 ⑧高3 ⑨短大・専門学校生 ⑩大学生・大学院生 ⑪会社員 ⑫公務員 ⑬自営業 ⑭自由業 ⑮主婦 ⑯予備校生 ⑰フリーアルバイター ⑱無職 ⑲その他（ ）	
お買い上げ書店名	市・区・町	店

郵便はがき

おそれいりますが
切手を貼って
お出しください

101-8305

東京都千代田区
神田駿河台1−8
東京ＹＷＣＡ会館
株式会社メディアワークス
「電撃文庫」係行

〒	—	ここには何も書かないでください→
住所	都道府県	
		TEL （ ）
氏名	ふりがな	男・女 / 年齢 歳
職業	※以下の中で当てはまる番号を○で囲んで下さい ①小学校3年生以下 ②小4〜6年 ③中1 ④中2 ⑤中3 ⑥高1 ⑦高2 ⑧高3 ⑨短大・専門学校生 ⑩大学生・大学院生 ⑪会社員 ⑫公務員 ⑬自営業 ⑭自由業 ⑮主婦 ⑯予備校生 ⑰フリーアルバイター ⑱無職 ⑲その他（ ）	
お買い上げ書店名	市・区・町	店

※上記の太枠内と裏面のアンケートにご記入の上、このハガキをご返送下さい。抽選で毎月10名の方に図書カード2000円分を進呈いたします。なお、抽選は毎月末に行い、その2カ月後の「電撃の缶詰」にて当選者を発表いたします。

電撃ゲーム文庫　愛読者カード

皆さんのご意見をより良い作品づくりの参考とさせていただきたいと思います。
ぜひ以下のアンケートにご協力ください。(※あてはまる箇所に／を入れてください)

罪と罰　地球の継承者

(1)　本書をどこでお知りになりましたか？（複数回答可）
□書店　□電撃のないしょ話　□電撃の缶詰　□テレビのCM
□インターネット　□人にすすめられて
□テレビ・ラジオ（番組名　　　　　　　　　　　　）
□雑誌・新聞の記事（雑誌／新聞名　　　　　　　　）
□その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

(2)　本書の内容について。
□とても面白かった　□面白かった　□普通　□つまらなかった

(3)　本書の魅力はどの部分ですか？
□ストーリー　□キャラクター　□設定　□その他（　　　　）

(4)　本書のカバーについて。
□とても良い　□良い　□普通　□良くない

(5)　本書の原作のゲームをプレイしましたか？
□読む前に遊んだ　□読んでから遊んだ　□これから遊ぶ　□プレイしない

(6)　本書の原作のゲームの魅力はどの部分ですか？
□ストーリー　□キャラクター　□設定　□グラフィック

(7)　所有しているゲーム機を教えてください。
□プレイステーション2　□プレイステーション　□NINTENDO64
□ドリームキャスト　□その他（　　　　　　　　　）

(8)　1年間に何本くらいゲームを買いますか？
□10本以上　□5〜9本　□1〜4本　□買わない

(9)　小説で読みたいゲームソフトを教えてください。
（ソフト名　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

(10)　これまでにプレイしたゲームで好きな作品は？
（①　　　　　　②　　　　　　③　　　　　　）

(11)　本書に対するご意見、ご感想をお書きください。

プレゼント
応募券を
貼って
ください

●ご協力ありがとうございました

電撃文庫　愛読者カード

皆さんのご意見をより良い作品づくりの参考とさせていただきたいと思います。ぜひ以下のアンケートにご協力ください。（※当てはまる番号を○で囲み、カッコ内は具体的にご記入ください）

(1) 本書のタイトル（　　　　　　　　　　　　＜　　＞巻）

(2) 本書をどこでお知りになりましたか？（複数回答可）
①書店　②電撃の缶詰　③テレビ・ラジオ（番組名　　　　　　　）
④ＴＶのＣＭ　⑤インターネット　⑥人にすすめられて
⑦雑誌・新聞の記事・広告（雑誌／新聞名　　　　　　　）
⑧その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

(3) 本書のカバーについての評価をお聞かせください。
①とても良い　②良い　③普通
④悪い（何が悪いのですか？　①イラスト　②デザイン　③タイトルロゴ）

(4) 本書の内容についての評価をお聞かせください。
①とても良い　②良い　③普通
④悪い（何が悪いのですか？　①ストーリー　②キャラクター　③設定）

(5) 本書以外に電撃文庫を何冊お持ちですか？
①1〜2冊　②3〜5冊　③6〜10冊　④11〜20冊　⑤21冊以上　⑥0冊

(6) あなたは年間何冊くらい文庫や新書、単行本を購読しますか？
文庫（　　）冊　新書（　　）冊　単行本（　　）冊

(7) 下記の中でよく購読される雑誌は何ですか？（複数回答可）
①電撃王　②電撃PlayStation　③電撃Dreamcast　④電撃NINTENDO64
⑤電撃G'sマガジン　⑥電撃コミック　ガオ！　⑦コミック電撃大王　⑧電撃ｈｐ
⑨電撃HOBBY MAGAZINE　⑩電撃Animation magazine

(8) 上記以外でよく購読される雑誌は何ですか？（ジャンルは問いません）
（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

(9) よく観る（聴く）テレビ、ラジオ番組を教えてください。
テレビ（　　　　　　　　）ラジオ（　　　　　　　　）

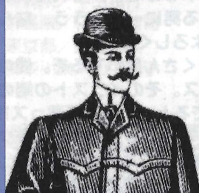
(10) 1カ月のお小遣いはいくらくらいですか？
（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

(11) 現在、気になる作家・イラストレーターはいますか？
作家（　　　　　　）イラストレーター（　　　　　　）
（　　　　　　）（　　　　　　）

(12) 本書に対するご意見、ご感想を自由にお書きください。

●ご協力ありがとうございました

電撃のゲーム誌＋攻略本のキーマンが漏洩(ローエイ)する

ヒソヒソ ヒソヒ 業界のないしょ話 ヒソヒソ ヒソヒ

電撃NINTENDO64 副編集長
後藤　勇

「やさしい」表現、というものを雑誌がらよく考えます。それは担当ハードが子ども向きなせいもあるでしょうし、「やさしい」言葉が好きなせいもあるかもしれません。もちろん「やさしい」には「易しい」以外に「優しい」という意味も含まれます。言葉遣いだけでなく、伝えるメッセージに気を配るということですね。某有名キャラのゲームでは「死ぬ」はNG、というのが原則なのですが、ま、正直なところ、そのキャラや世界を大事にしたいと考えるなら、ゲーム性の「易しさ」や表現を云々する前に、ゲームの内容の「優しさ」に気を遣うべきだと思うのですが……。おっと、これはよけいなお世話ですね。

ぼくたちが担当しているゲームの多くは、対象年齢が低い故にとても無口です。つまり「これはゲームだよ」という約束事さえ理解できれば、あとは世界観や設定などをゲーム中で説明しなくても、そのゲーム内の事象を、子どもたちはあたりまえなこととして受け入れることができるのです。ところがある程度の年齢以上になると、作品の中で饒舌にその世界を、日常を、人物造形を語り続けなければ、リアルに受け入れることができなくなってしまいます。ただ、そんなソフトのほうが雑誌映えするし、作りやすかったりはするんですけどね。で、そんな饒舌な『罪と罰』が小説になりました。先に発売された攻略本ともども楽しんでください（←結局宣伝でした）。

電撃のないしょ話
1月号【Vol.13】
発行●メディアワークス
編集●電撃ゲーム文庫編集部
〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8
TEL 03（5281）5208
2001年2月15日発行

最新情報満載!

電撃のないしょ話

電撃ゲーム文庫
電撃G's文庫

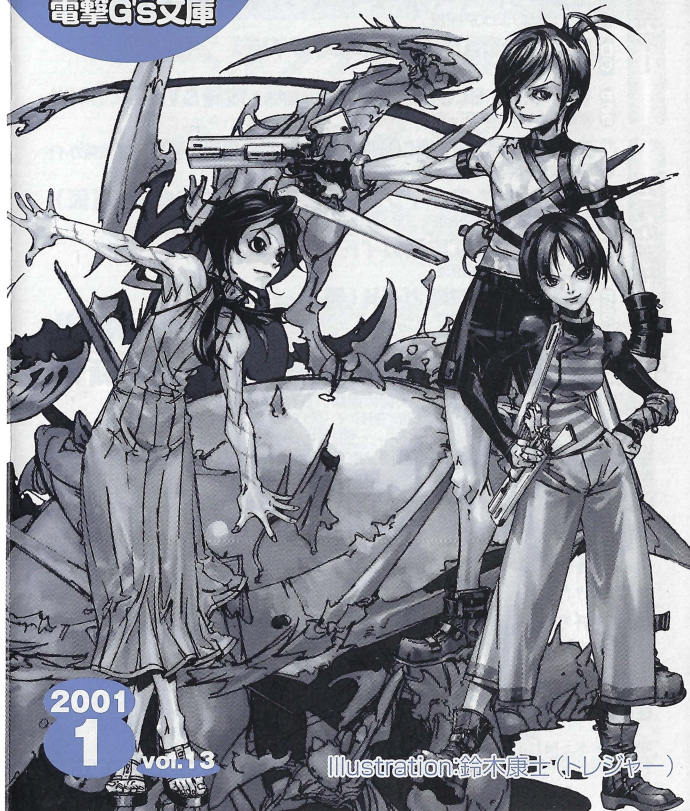
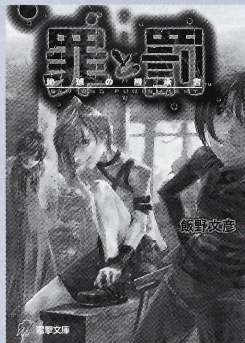
読んだ人だけ得をする 秘密の折込誌

2001 1 vol.13

Illustration:鈴木康士（トレジャー）

1月の新刊

絶賛発売中

電撃ゲーム文庫

母を喪ったサキは、
何のために戦い続けるのか!?

罪と罰 地球(ほし)の継承者

著／飯野文彦
イラスト／鈴木康士(トレジャー)
定価：本体620円＋税

食料危機に襲われた人類の窮余の一策、人工生命体……。人類の食料となるはずの存在が、突如として人類を襲い始めた。サキとアイランが挑むルフィアンとは一体!?

N64のゲームに秘められた様々な謎を読み解くプレストーリーが、ゲーム文庫から登場！

クルルに贈る、
天使からのプレゼント♥

天使のプレゼント マール王国物語

著／紺野たくみ
イラスト／日本一ソフトウェア
定価：本体620円＋税

マール王国のおてんば王女・クルルは、12歳の夢見るお年頃。憧れの王子様に出会うため、お城を抜け出そうと機会を狙っていた。そんなある日、待ちに待ったチャンスがやってきた！

人気ゲームシリーズ「マール王国物語」をクレアの視点から捕えた外伝ストーリー！

電撃G's文庫

素敵な再会のとき……

ときめきメモリアル2 君のうしろすがた

著／今田隆文
イラスト／コナミ・オフィシャル
定価：本体560円＋税

ご存知、コナミの大人気ゲーム待望のノベライズ。

幼い頃をともに過ごし別れを経験した懐かしい想い出から数年が過ぎた。高校で偶然再会した陽ノ下光と幼なじみの岩瀬健は、同じクラスになり、同じ陸上部に入り、一緒に過ごしていくはずだった。ところが、ある事件で二人の仲はまた遠ざかってしまう。

再会を通して、幼い頃の遠い想い出が新しい想い出へと変わっていく……。

電撃G's文庫
ときめきメモリアル①～⑥
著／花田十輝・山田靖智・あおしまたかし
イラスト／コナミ・オフィシャル

絶賛発売中!!

発行◎メディアワークス

電撃攻略王 ―攻略本はやっぱり電撃―

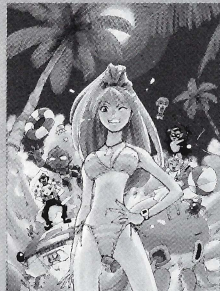
絶賛発売中！

- N64 **罪と罰 ～地球の継承者～ 完全攻略ガイドブック**
  定価：本体980円＋税
- PS **立体忍者活劇 天誅弐 公式攻略ガイド**
  定価：本体1,200円＋税
- DC **エルドラドゲート 第1巻・第2巻 ワールド＆攻略ガイド**
  定価：本体1,200円＋税
- DC **探偵紳士DASH! 公式攻略ガイド**
  定価：本体1,300円＋税
- PS2 **やるドラDVD BLOOD THE LAST VAMPIRE 攻略＆VISUAL BOOK**
  定価：本体1,200円＋税

2月の新刊

- WS **スーパーロボット大戦COMPACT2 第3部：銀河決戦篇 完全攻略ガイド**
  2日発売予定 予価：880円＋税
- PS2 **デッド オア アライブ2 ハードコア 公式攻略ガイド（仮）**
  上旬発売予定 価格未定
- PS **アイシア 公式攻略ガイド**
  22日発売予定 価格未定
- PS2 **鬼武者 完全攻略ガイド（仮）**
  下旬発売予定 価格未定

以下、続々刊行!!

電撃文庫 2月の新刊

住めば都のコスモス荘SP（スペシャル）
夏休みでドッコイ
阿智太郎 & 矢上 裕
予価：本体510円＋税

天国に涙はいらない
著／佐藤ケイ イラスト／さがのあおい
予価：本体510円＋税

陰陽ノ京（みやこ）
著／渡瀬草一郎 イラスト／田島昭宇
予価：本体610円＋税

ウィザーズ・ブレイン
著／三枝零一 イラスト／純 珪一
予価：本体650円＋税

ダブルブリッドV
著／中村恵里加 イラスト／たけひと
予価：本体570円＋税

リングテイル④ 魔道の血脈
著／円山夢久 イラスト／山村 路
予価：本体530円＋税

都市シリーズ 機甲都市 伯林3 パンツァーポリス1942
著／川上稔 イラスト／さとやす(TENKY)
予価：本体630円＋税

ブギーポップ・パラドックス ハートレス・レッド
著／上遠野浩平 イラスト／緒方剛志
予価：本体530円＋税

電撃文庫は毎月10日発売

発行◎メディアワークス

Coming Soon!!

2月の刊行予定

電撃ゲーム文庫

ペルソナ2 ＜罪＞
著／高瀬美恵 イラスト／金子一馬

ペルソナ2 ＜罰＞
著／高瀬美恵 イラスト／金子一馬

7ブレイズ 極楽丸と鉄砲お百合
著／榊 涼介 イラスト／コナミ・オフィシャル

電撃G's文庫

ルームメイトM② 井上涼子 17才 夏
監修／早見裕司
イラスト／丸藤広貴

電撃ゲーム文庫 電撃G's文庫 は 毎月25日発売

表紙のおはなし

今回の表紙は、『罪と罰 地球（ほし）の継承者』から、ゲームでイラスト＆キャラクターデザインを担当しているトレジャーの鈴木康士さんのイラストです。ゲームや小説以外でも『罪と罰』が楽しめるぞ。攻略王からは未公開の設定資料まで収録した完全攻略ガイドブックが発売。さらに「電撃大王」3月号からはコミック連載がスタート！ まとめて堪能しなくっちゃね!!

21世紀もナビ太と一緒──!? そんなあなたに……

読者クンの ないしょの小部屋

いやはや、21世紀到来でございやす。世紀が変わって、ナビ太も心機一転。これからは、渋めでダンディーな男になってやるのです。それだけじゃなく、優しくて、温かくて、みんなから愛される男に……。うう、なんか泣けてきたっス。そんなナビ太に愛のハガキをよろしくっス！

話は変わりまして、21世紀も投稿イラストはたくさん届いてるぞ。愛のこもったイラストばかりなので、ナビ太も感激っス。そのイラストの端の方にでも、ラブ♥ナビ太メッセージを書いてくれてると、もっと感激っス!!

今回も人気が高いのは『デ・ジ・キャラット』。でも、みんな各キャラクターに対する想いが違うので、ホントに楽しく読ませてもらってるのだ。待望の④巻は3月発売予定だよ。首をなが～くして待っててねん！

新潟県：水島茜
おお、音姫を描いてくるとは……。なんて、キミはツウなんだぁ～。

鳥取県：白石まい
投稿イラストの中で、一番多いのがぷちこ。ぷちこって思わず守ってあげたくなるよね。

新潟県:鈴木涼
ぷちこが目からビームをマスターするのはいつの日のことやら……。

熊本県：出口智教
この前発売されたばかりの『ルームメイトM』から井上涼子。新ストーリーはどうだったかな？

埼玉県：雪田香
でじこがとっても楽しそうだにょ。頭の上にはぷちこが休憩中だにゅ♥

青森県：氷澄せつな
う～ん、ラ・ビ・アン・ローズはかわいいっス。実はナビ太の好み……おっと、危ない危ない！

投稿のしかた　投稿せよ!

あて先はすべて
〒101-8305 (株)メディアワークス 電撃ゲーム文庫編集部
ないしょの小部屋係まで
(採用された方には、超レアな電撃グッズをお送りいたします)

読者プレゼント大発表!!

神来－カムライ－

①掛け軸型ポスター 10名

北海道／山上美幸	愛知県／石川優子
青森県／中田和行	滋賀県／廣嶋祐樹
群馬県／村井田恭司	大阪府／掛水秀一
東京都／阿部雄太	岡山県／栗本知幸
神奈川県／山中佳子	福岡県／鶴将嘉

②PS用ソフト 3名

宮城県／田崎穣士
東京都／渡辺元輝
兵庫県／奥秋克海

メイド イン ドリーム②

すぎやま現象氏サイン入りイラストカード 30名

①鈴蘭	③花梨	⑤椿
福島県／林秀明	茨城県／柳沼亮	北海道／遠藤泰亮
神奈川県／出井啓介	千葉県／新津剛	宮城県／小室洋揮
山梨県／塚田健	富山県／藤田佳明	栃木県／渡辺香織
静岡県／阿部浩幸	大阪府／西田憲介	京都府／長瀬源太郎
鹿児島県／原薗剛	熊本県／鎌田俊也	兵庫県／森本麻美

②撫子	④苺	⑥桜
群馬県／下山喩梨絵	埼玉県／斉藤将太	北海道／山森恵子
神奈川県／斎川貴	東京都／野口啓	茨城県／堀込真咲
愛知県／奥谷隆一	愛知県／村上育彦	東京都／佐藤智成
山口県／松原大輔	大阪府／石本啓記	岐阜県／小林泰秀
香川県／岩本浩明	福岡県／牛島大輔	大阪府／田中広悟

デ・ジ・キャラット②

販促用ポスター 30名

北海道／宮内倫	神奈川県／中村愛美	滋賀県／井上洋一
青森県／西山達也	神奈川県／廣元瑛恵	京都府／稲本功一
茨城県／森戸淳史	新潟県／伊藤集	大阪府／木下雄介
栃木県／上村由紀子	富山県／影山純也	大阪府／向山英里香
埼玉県／國井一幸	山梨県／塚田早穂	兵庫県／山下香澄
埼玉県／信太卓也	長野県／中村明子	岡山県／広野羽瑠果
千葉県／青木桃子	岐阜県／山田浩子	広島県／山本俊雄
千葉県／西崎雄治	静岡県／佐野江里香	愛媛県／山下藤夫
東京都／大橋佳乃子	愛知県／磯部早織	福岡県／鬼木理恵
東京都／大矢愛実	愛知県／大江健史	佐賀県／大久保茜

おめでとうございま～す!!

でじこの本も好評発売中だにょ。

小説　電撃G's文庫

デ・ジ・キャラット ①、②、③

著/菜の花こねこ　カバーイラスト/コゲどんぼ
本文挿絵/ひな。 定価：本体各530円＋税（①、③）
550円＋税（②）

コミック　電撃コミックス

Di Gi Charat 公式コミックアンソロジー Vol.1、2

定価：本体各680円＋税

単行本　電撃アニマガSPECIAL

ALL ABOUT Di Gi Charat I、II、III

定価：本体各950円＋税

2001年3月20日 デ・ジ・キャラット コンサート in 横浜アリーナ 開催決定!!

真田アサミさん（デ・ジ・キャラット役）、
氷上恭子さん（うさだヒカル役）と、
受験を終えて仕事に復帰する
沢城みゆきさん（プチ・キャラット役）に加え、
歌手の奥井雅美さんほか、
様々なゲストも登場予定。
展示や物販なども併せて開催する
一大イベントとなります。

●日程　：2001年3月20日(祝)
●会場　：横浜アリーナ
●主催　：TBS、ブロッコリー
●協力　：キングレコード、角川書店、メディアワークス
●主演　：真田アサミ、沢城みゆき、氷上恭子、他
●入場料：S席 2000円
A席 1500円
B席 1000円
●販売　：チケットぴあ各店、ゲーマーズ各店、
ブロッコリー通信販売及び
オンライン通販にて好評発売中

http://www.broccoli.co.jp/

●お問い合わせ先（コンサート事務局）
TEL.03-5372-6205